

令和2年度「がんばる先生支援」グループ研究A

地域文化としての郷土の伝統音楽を軸とした
教科横断的なカリキュラムデザインの研究

大阪市立開平小学校

地域文化としての郷土の伝統音楽を軸とした教科横断的なカリキュラムデザインの研究

I. 総論	3
1. 研究の概要	
2. 船場における「郷土の伝統音楽」	
(1) 「郷土の伝統音楽」とは	
(2) 船場における「郷土の伝統音楽」	
3. 開平小学校における音楽科カリキュラム	
(1) 開平小学校における地域文化を教材とした単元の関連	
(2) 開平小学校における音楽科「郷土の伝統音楽」カリキュラム【縦のつながり】	
(3) 「郷土の伝統音楽」を教材とした開平小学校におけるカリキュラム・マネジメント【横のつながり】	
(4) 開平小学校音楽科単元デザイン	
4. 研究計画	
II. 実践報告	
1. 第1学年における「郷土の伝統音楽」を教材とした取り組み	9
(1) 歌唱「拍の流れを意識して《わらべうた（かぞえうた）》をうたおう」	
(2) 音楽づくり「言葉の抑揚を意識して《売り声》をつくろう」	
(3) 鑑賞「リズムを意識して《天神祭どんどこ船お囃子》を味わおう」	
2. 第2学年における「郷土の伝統音楽」を教材とした取り組み	23
(1) 器楽「音色を意識して《天神祭地車囃子》をえんそうしよう」	
(2) 鑑賞「リズムを意識して《坐摩神社だんじり囃子》を味わおう」	
(3) 歌唱「はねるリズムを意識して《船場通り名おぼえうた》をうたおう」	
3. 第3学年における「郷土の伝統音楽」を教材とした取り組み	37
(1) 鑑賞「速さのちがいを意識して《御霊神社枕太鼓の音楽》を味わおう」	
(2) 鑑賞「太鼓のリズムとうたの重なりを意識して《難波神社ふとん太鼓》を味わおう」	
4. 第4学年における「郷土の伝統音楽」を教材とした取り組み	47
(1) 器楽「リズムを意識して《天神祭どんどこ船お囃子》をえんそうしよう」	
(2) 鑑賞「こぶしを意識して《淀川三十石船舟歌》を味わおう」	
(3) 音楽づくり「間を意識して《手締め（船場締め・大阪締め）》をつくろう」	
5. 第5学年における「郷土の伝統音楽」を教材とした取り組み	61
(1) 歌唱「声の特徴を意識して《淀川三十石船舟歌》をうたおう」	
(2) 音楽づくり「声の抑揚を意識して《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》の続きをつくろう」	
6. 第6学年における「郷土の伝統音楽」を教材とした取り組み	73
(1) 音楽づくり「リズムを意識して《船場通り名おぼえうた》の続きをつくろう」	
(2) 器楽「間を意識して《御霊神社枕太鼓の音楽》をえんそうしよう」	
III. 研究のまとめ	81

地域文化としての郷土の伝統音楽を軸とした教科横断的なカリキュラムデザインの研究

1. 研究の概要

本年度より、「学校における学びが、子どもたちの生きる力となり、これからの人生につながってほしいとの願いが込められた」新学習指導要領が本格実施となった。ここでは、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現が目指された。これからの社会が変化し予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現することで、明るい未来を共に創っていくことができるよう新たな学びへの進化が求められているのである。そこでは、子どもたちが「何を学ぶか」だけではなく「どのように学ぶか」が重要であり、育成すべき資質・能力を明確にした「学ぶ意義」「教科のつながり」「学校段階間のつながり」を踏まえた教育課程の編成をすることで、学習・指導の改善・充実、個の発達を踏まえた指導の充実、学習評価の充実が求められているといえる。

音楽科では、これまでより、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」や「音楽と生活との関わりに関心を持って生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むこと」に重点を置き、その充実が図られてきた。しかし、その一方で、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと」「我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと」「生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくこと」については、更なる充実が求められた。そこで、これまで第5学年及び第6学年において取り上げる旋律楽器として例示されていた和楽器が第3学年及び第4学年の例示にも新たに加えられた他、我が国や郷土の音楽の指導に当たっての配慮事項として、「音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」が新たに示された。

本校は、船場に残る唯一の小学校であり、「船場に生きる」ということを視点に、生活科・総合的な学習の時間を中心に授業づくりに取り組んでいる。令和元年度に行われた創立30周年記念式典では、1年生から「開平小学校」「船場」をテーマに生活科や総合的な学習の時間を通して学んできた「船場のよさ」を「船場ガイド～船場のよさを伝えよう～」として、本校を支えてきてくださった方々にプレゼンテーションした。児童が6年間を通じて学び感じた地域文化のよさを自分たちの言葉で発信することができた。

しかし、地域文化としての音楽においては、これまで、船場には多くの郷土の伝統音楽が伝承されているにも関わらず、十分に本校の教育に取り入れることができていなかった。そこで、平成29年度より、郷土の伝統音楽を取り入れた本校音楽科カリキュラムの再構築に着手した。平成29年度には、「がんばる先生研究支援グループ研究A」として本校音楽部で、「郷土の伝統音楽」の教材開発・授業づくりに取り組んだ。そこでは、児童が生活する地域に文化として伝わる「郷土の伝統音楽」を教材とすることが、自らの生活と関連付け音楽を味わい、学びをより深めていくということが明らかになった。平成30・31年度は、より系統的な音楽科カリキュラムの在り方について模索してきたが、各授業における児童の学びの過程を分析する中で、「他教科・領域と関連させることが、児童の学びをより深める手立てとなるのではないか」という新たな視点が見い出された。

そこで、本研究では、郷土の伝統音楽を地域文化の視点で捉え、他教科・領域との横断的なカリキュラムデザインの在り方を模索する。児童が、自分たちの生活経験を踏まえ、現代の生活とのつながりを見い出し、新たな価値観を形成していくことができるカリキュラムデザインを探究することを目的とする。

2. 船場における「郷土の伝統音楽」

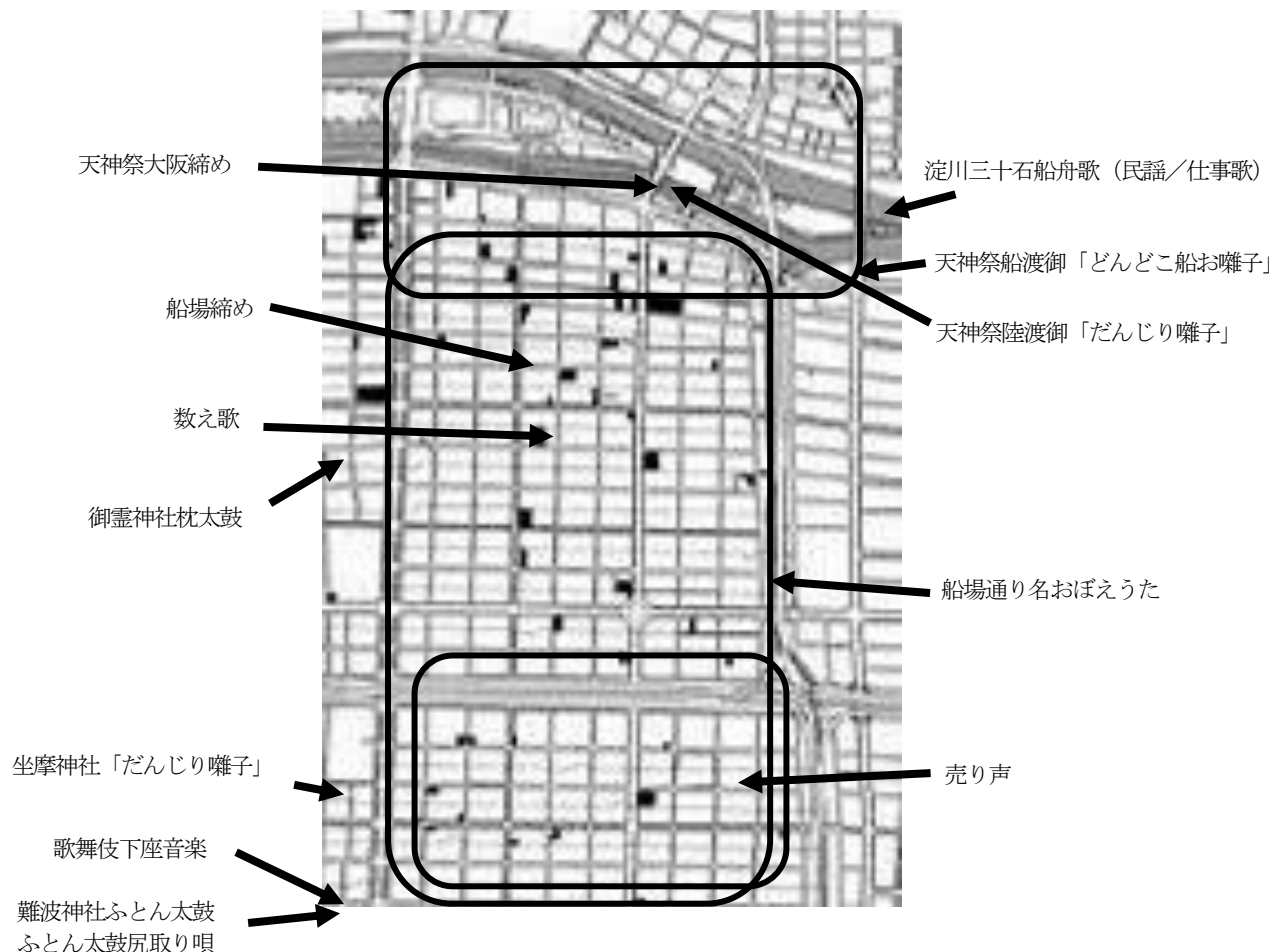
(1) 「郷土の伝統音楽」とは

これまでの「郷土の伝統音楽」に関する先行研究を踏まえ、「郷土の伝統音楽」を、「郷土に根付いてきた伝統的な音や音楽」とする。「郷土の伝統音楽」は、音楽だけで成り立っているのではなく、音楽以外の表現媒体と結びついたものであり、日本の伝統的な音楽文化の基盤となっている。音楽単体ではなく、言葉や動き、視覚的素材とのコラボレーションとして存在し、その土壌にある、その時、その場に生活する人々の営みの時間・空間を越えた蓄積によって特性が生み出されている。よって、本研究における「郷土の伝統音楽」を、「児童が生活する地域に根付いてきた伝統的な音や音楽」と定義する。教材化にあたっては、児童が自分と音楽とがどのようにつながっているのかを実感することから、自分の周りの人や環境とのつながりに気付いていくことができるようにすることが大切であると考える。

(2) 船場における「郷土の伝統音楽」

本校は、船場に位置する唯一の小学校である。本校の位置する場所は、大阪市の中心部であり、児童の多くは、高層マンション等の集合住宅に住んでいる。また、さまざまな地域からの転住による児童が多いため、地域とのつながりが希薄になってきている。そのため、本校のまわりには、多くの郷土の伝統音楽が存在しているにも関わらず、身近な音楽と感じておらず、知らない児童も多い。

研究を進めるにあたって、平成29年度より、船場に伝わる「郷土の伝統音楽」の実地調査（フィールドワーク）を行うことで教材開発を進めてきている。実地調査として、伝統音楽がどのように伝承されてきているか伝承されている方への「インタビュー」や実際の「伝承の場の取材」、祭りや地域で演奏されている場（物売り）の「現場取材」、さらには、実践者が実際に体験する「ワークショップ」や「伝承されている場への参加」を実施した。このような調査を踏まえ、「郷土の伝統音楽」について地域文化としての教材化の視点を明らかにしていった。地域と協働することで、学校と地域が児童の学びを支える共同体として、郷土の伝統音楽を教材とした音楽科授業デザイン、さらには、他教科・領域との関連を踏まえたカリキュラムデザインを提案することができるようにした。本研究を通して明らかになった、船場に伝わる「郷土の伝統音楽」は、以下（図1）のとおりである。



3. 開平小学校における音楽科カリキュラム

(1) 開平小学校における地域文化を教材とした単元の関連

開平小学校では、これまでに「船場に生きる」ということを視点に、生活科・総合的な学習の時間を中心に授業づくりに取り組んできた。そこで、全教科・領域のつながりが一目でわかるように本校カリキュラムを再編し、各教科・領域で取り組まれている地域文化を教材とした単元の抽出、さらに、各単元の関連を検討した。

表1 大阪市立開平小学校 令和2年度年間カリキュラム（第5学年計画カリキュラム10～12月抜粋）

	10月				11月				12月			
	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週
5年生の学年行事	林間学習	全校リクリング (生活科関連)		郷土の食 (給食/お好み焼き)			学習参観			企業訪問	終業式 大掃除	
学級活動	林間学習の準備をしよう	学級プロジェクトを考えよう	学級プロジェクトをすすめよう	係活動をふりかえろう	清掃活動を見直そう	学校・学級の課題について考えよう	学校・学級の課題について考えよう	2学期をふりかえろう	2学期のまとめをしよう			
道徳 日文	正義の実現	広い心	おたがいのけんり	わが町のほこりと伝統	働くということ	生命の重み	家族の一員として	自制する心	世界の人人と共に	温かな思い		
	名前のよい手紙	折れたタワー	住みよいマンション	和太鼓調べ	父の仕事	命の種を植えたいー緑の方庵ー	家族のために	流行おくれ	ペルーは泣いている	くすね落ちただんボール箱		
総合的な学習の時間	おしごと探検隊(20)											
	道修町について調べよう				少彦神社 薬の記念館見学 (道修町)	田辺三益製薬 見学		薬の町についてまとめよう 《ICT/NIE関連》		船場0-91-777 企業訪問		
国語 東書	植物のおもしろさを解説しよう④ 注目の多い料理店	古文に親しむ③	和の文化について調べよう⑩ 和の文化を受けつぐー和菓子をさぐる			伝統たい、心に残る言葉⑤	和語、漢語、外来語②	船場で親しもう⑧ 大塚いさんとがん	反対の立場を考えて意見文を書こう⑥	友達といっしょに、本をしょうかいしよう⑨		
書写 日文	点画のつながりと接し方③			分かりやすく効果的に伝える書き方①	委員会活動を伝えるリーフレットを作ろう			【文字のいすみ】③ 書きぞめをしよう				
社会 日文	工業生産とわたしたちのくらし(20時間)											
	大単元の導入①	くらしや産業を支える工業生産③	■自動車工業のさかんな発展⑧ ■わたしたちのくらしを支える食料工業⑧ ■わたしたちのくらしを支えるエネルギー工業⑧ ■わたしたちのくらしを支える化学工業⑧			日本の貿易とこれからの工業⑧		大単元の導入①	■情報を作り伝える⑦ ■放送局のはたらき⑦(選択)			
算数 日文	平均⑤	単位量あたりの大きさ⑫			分数と小数、整数⑦		割合⑩		図形の面積⑭			
理科 啓林	雲と天気の変化⑦			流れる水のはたらき⑪			みんなで使う理科室①	ふりこのきまり⑥				
音楽 教芸	いろいろな地域の音楽のよさを感じよう④【歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞】				曲想の変化を感じ取ろう⑥【歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞】				詩と音楽の関わりを味わおう④【歌唱・鑑賞】			
	言葉の抑揚を意識して(和歌)をうたおう【音楽づくり】②	声の特徴を意識して(淀川三十三船舟歌)をうたおう【歌唱】③	拍の違いを意識して(仕事歌)を味わおう【鑑賞】①	日本の音階を意識して演奏しよう【器楽】④								
図工 日文	使って楽しい焼き物③+③工作		立ち上がり!ワイヤーアート②立体		消してかく②絵画【少彦神社写生会含む】		光と場所のハーモニー②造形	言葉から思いを広げて④絵画				
家庭 開隆堂	ミシンでソーイング			食べて元気に⑪								
体育 光文	ソフトボール(ベースボール型)⑦【中央高校】					体の動きを高める運動⑤【第2運動場】						
	走り幅跳び⑤【体育館】					鉄棒運動⑤【体育館】						
英語 光村	Unit 5 He can run fast. She can do kendama.⑥			Unit 6 I want to go to Italy.⑧			Unit 7 What would you like?⑥			伝わる表現を選ぼう① Review		
ICT				プレゼンをしよう【Pepper】 ⑦「ミナミ」総合③		【タブレット】《カメラ機能、ノート機能》総合※随時撮影、編集						

各取り組みの関連を整理したことにより、音楽科として、地域文化として「郷土の伝統音楽」を教材とした授業において、“系統的（縦のつながり）”“教科・領域横断的（横のつながり）”な視点をもったカリキュラムデザインをすすめることが、より音楽科における学びを深めることにつながるのではないかと考えられた。

そのためには、「郷土の伝統音楽」の①文化的背景の把握、②子どもたちの生活との結びつきの分析が、教材開発において必要不可欠となるということが明らかになった。

(2) 開平小学校における音楽科「郷土の伝統音楽」カリキュラム【縦のつながり】

これまでの本校における「郷土の伝統音楽」の取り組みの分析、本年度本格実施の新学習指導要領における教科・領域の関連を踏まえ、年度当初に再整理し再編した、本校「郷土の伝統音楽」カリキュラムは、以下の通りである。

表2 令和2年度 開平小学校「郷土の伝統音楽」カリキュラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年					天神祭 （音楽）	天神祭 （音楽）		天神祭 （音楽）				
2年					天神祭 （音楽）	天神祭 （音楽）		天神祭 （音楽）				
3年										天神祭 （音楽）	天神祭 （音楽）	
4年					天神祭 （音楽）	天神祭 （音楽）		天神祭 （音楽）				
5年					天神祭 （音楽）	天神祭 （音楽）				天神祭 （音楽）		
6年									天神祭 （音楽）		天神祭 （音楽）	

《天神祭どんどこ船お囃子》は、第1学年鑑賞と第4学年器楽の教材とすることとした。

生活経験として、本校では、毎年天神祭前に、開平こども会より、男児児童を対象に、子どもどんどこ船の小若（漕ぎ手）の募集が行われる。例年、多くの児童が参加するため、祭当日の漕ぎ手は高学年（4年生）以上となるが、低学年児童も練習に参加し、大阪天満宮への宮入、鉦流神鉦の奉納には、第2学年の児童が代表となり行う。さらに、本年度より、川を渡った場所にある南天満公園に本校第2運動場ができたことにより、より子どもたちにとって、天神祭船渡御の行われる川は身近なものとなっている。

また、他教科・領域の学びでは、第1学年生活科「かいへい いま・むかし たんけんたい」、第2学年生活科「かいへい つながり たんけんたい」の学習を通して、地域の人々とのつながりや川に囲まれた地域（船場）について学習している。第3学年総合「船場探検隊」では大川と東横堀川の船上体験を経験したり、総合「船場お祭り探検隊」で船場に残るさまざまな祭りについて調べたりしている。第4学年社会「大阪府に伝わる祭りや行事と先人たち」（副読本「わたしたちの大阪」）においては、天神祭が事例としてあげられ、どのように現代に伝承されてきたのか考える。

そこで、第1学年では、鑑賞領域としてリズムを指導内容とし伝承空間の疑似体験を通した学びの場を構成することで、どんどこ船における音楽の役割を文化的背景と関連付けながら捉えることができるようにした。本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、天神祭どんどこ船曳航が行われなかったことから、初めて行事に出合う場にもなるようにした。実践を通して、自ら参加してみたいと感ずることができるようにした。第4学年では、生活経験・学習経験を踏まえ器楽領域として自分たちオリジナルの曳航図を考え演奏することで、リズムの重なりに対する学びを系統的に深めていくことができるようにした。詳しくは第2章実践報告において述べる。

(3)「郷土の伝統音楽」を教材とした開平小学校におけるカリキュラム・マネジメント【横のつながり】

地域文化としての郷土の伝統音楽を軸とした教科横断的なカリキュラムデザインを明らかにするために、年度初めに令和2年度開平小学校計画カリキュラムを作成した。

全教科・領域を見渡し、①音楽科における単元配列の見直し、②新たに教材化が必要となる単元の新設、③これまでの「郷土の伝統音楽」を教材とした授業案の再検討を行った。

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大を踏まえ、6月からの学校再開となった。6月からの実践に合わせ、再度5月末にカリキュラム再編を行い、実践を進めた。

学期ごとに、①計画カリキュラムの見直し、②実践した授業における視点の見直しを行い、年度末にむけ令和2年度実施カリキュラム、令和3年度計画カリキュラムを作成していくこととした。

図2 第4学年音楽科カリキュラム見直し(2学期末実施)

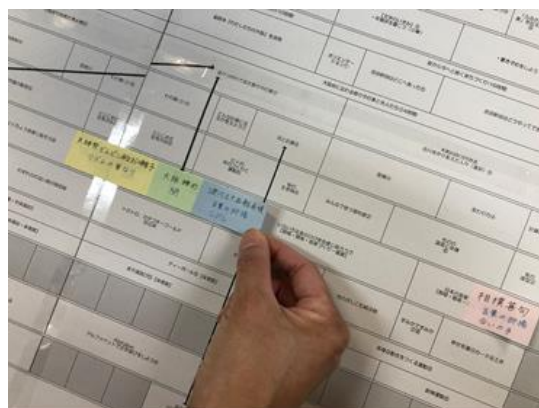


図3 第1学年音楽科カリキュラムの再編(1学期末実施)

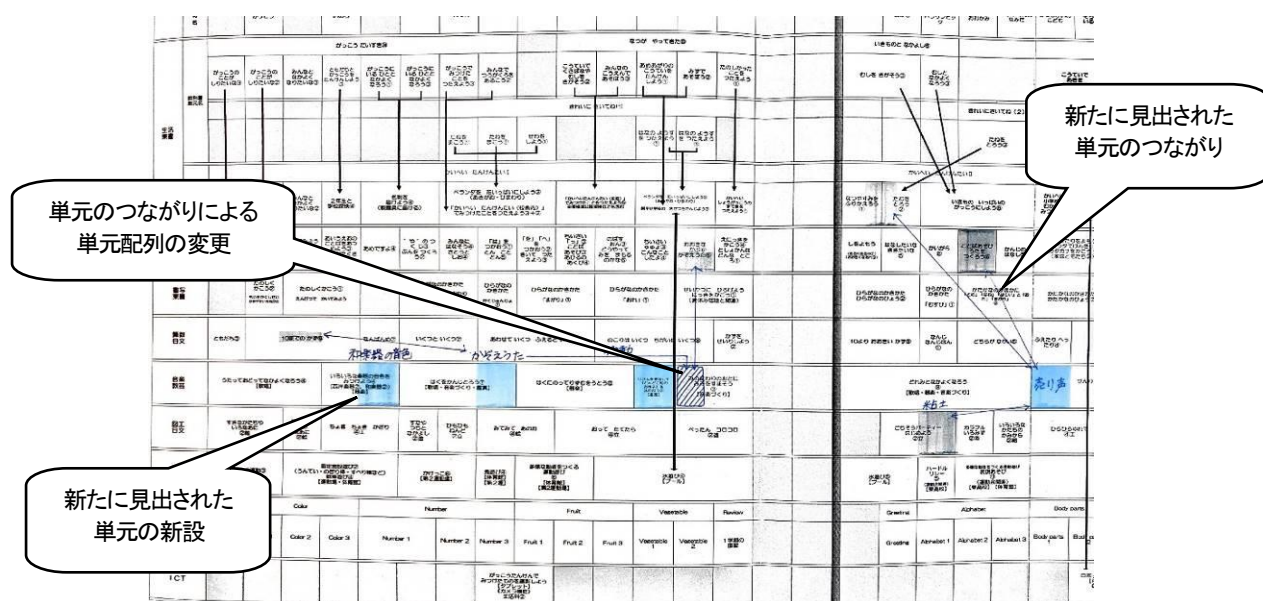
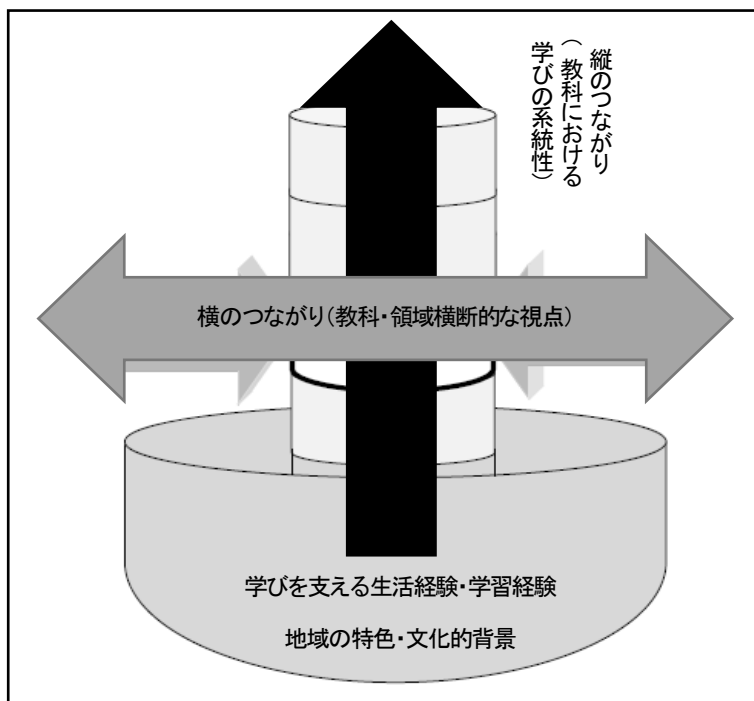


図4 開平小学校音楽科単元デザイン

(4) 開平小学校音楽科単元デザイン

カリキュラムの再編を踏まえ、「音楽科における系統性(縦のつながり)」「他教科・領域との関連(横のつながり)」を開平小学校音楽科における単元デザイン(図4)として表すことで、授業者が意識をもって、授業を展開していくことができるようにした。

各単元における「音楽科における系統性(縦のつながり)」「他教科・領域との関連(横のつながり)」,さらにその2視点を支える「郷土の伝統音楽」の「①文化的背景(教材としての楽曲分析)」「②子どもたちの生活との結びつき(学びを支える生活経験・学習経験、地域の特徴)」については、各実践報告において述べる。



4. 研究計画

本研究を進めるにあたって、まず、昨年度までの本校における①郷土の音楽を教材とした音楽科単元の抽出と、②本校における郷土についての学習単元（全教科・領域）の抽出を行った。

本年度、本校では、新学習指導要領全面实施にあたり、全教科・領域のつながりが一目でわかるように本校カリキュラムを作成した。抽出した郷土についての学習単元の関連を、そのカリキュラムに加筆することで、授業者が常に教科・領域の関連を意識しながら各授業を展開したり、1年間、さらには6カ年を通したカリキュラムの中に、どのように位置づく学びであるのかを意識したりすることができるようにした。（図5：PLAN大矢印）

本年度、実践計画（図5：PLAN大矢印）において、改めて郷土の伝統音楽のフィールドワークを行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、さまざまな郷土の伝統音楽に関わる行事・祭りが中止になったことなどを踏まえ、実地調査ではなく、これまでの実地調査資料を再分析することにした。フィールドワークを踏まえた教材分析を行うことで、より文化的背景を踏まえた授業展開を考えていくことができるようにした。

このような計画PLANを踏まえ、各学年における実践を行っていった。授業は、すべて映像と写真で記録することで、児童の発言による思考の流れを分析できるようにした。また、児童のワークシートもすべて記録し、系統的なワークシートを作成していくことができるようにした。これらの授業記録（映像・写真・ワークシートデータ）を、各実践ごとに分析し、次の実践における改善点を明確にした。随時、分析することで、適時性をもった授業改善を図り、実践を積み重ねていくことができるようにした。研究メンバーで共に分析することで、多角的に授業改善を図ることができるようにした。本年度、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、授業時数が削減したこと、授業の適時性が失われたこと（祭りの中止など）により、授業案を立案しながらも実践を行うことができないものも生まれることが計画の段階で明らかになっていた。そのような実践については、昨年度の児童の様子を、授業記録映像をもとに分析し実践報告としてまとめることとした。

このように、大きな研究PDCAサイクル（図5：大矢印のサイクル）を、細かなPDCAサイクル（図5：小矢印サイクル）の連続の中で進めていくことができるようにすることで、より研究を深めていく。

年度末には、令和3年度計画カリキュラムを作成することで、地域文化としての郷土の伝統音楽を軸とした教科横断的なカリキュラムデザインを、より推し進めていくことができるようにした。

図5 本研究のPDCAサイクル



第1学年

実践報告

(1) 歌唱

「拍の流れを意識して《わらべうた（かぞえうた）》をうたおう」

(2) 音楽づくり

「言葉の抑揚を意識して《売り声》をつくろう」

(3) 鑑賞

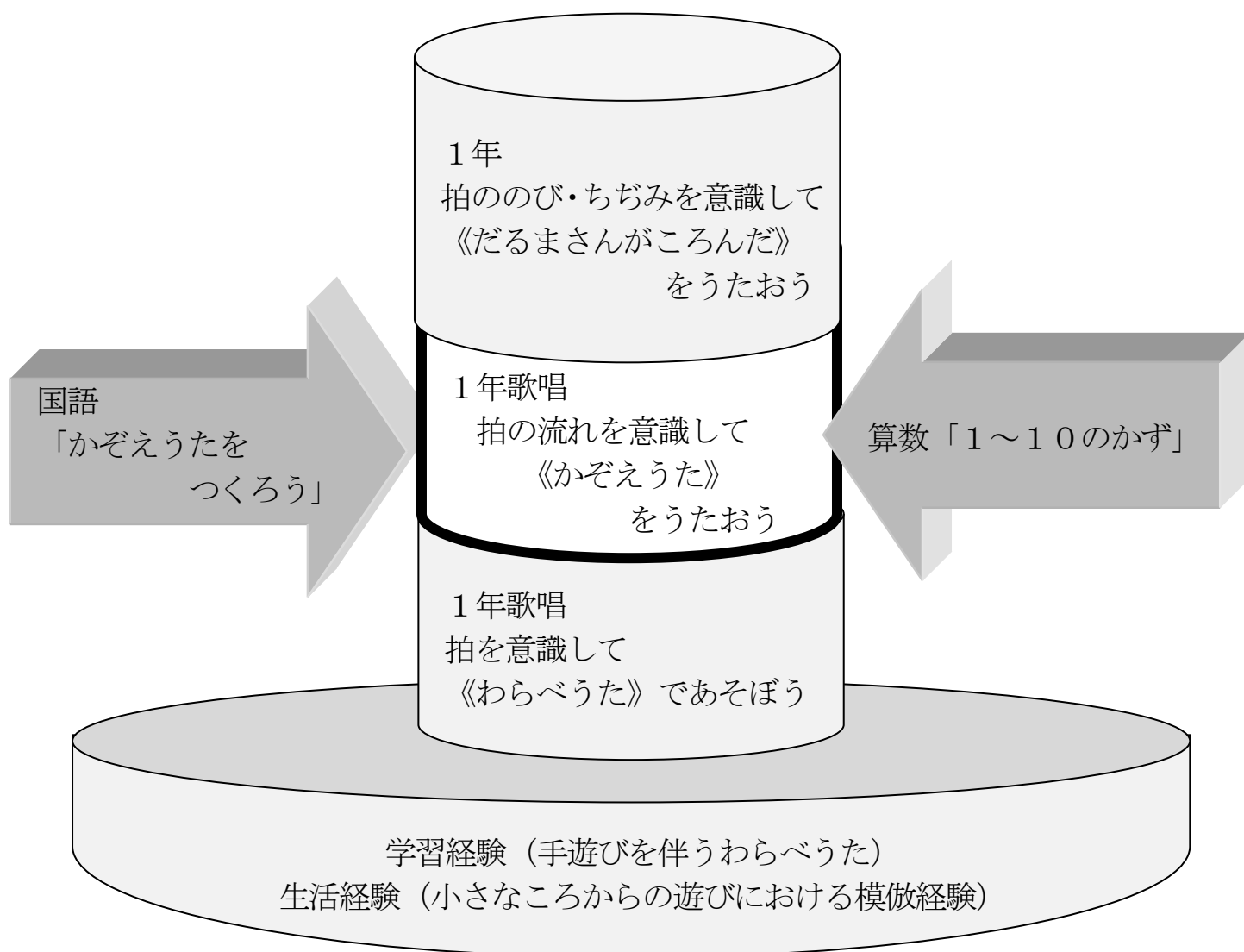
「リズムを意識して《天神祭どんどこ船お囃子》を味わおう」

1. (1) 第1学年 歌唱「拍の流れを意識して《わらべうた（かぞえうた）》をうたおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 ー生活と音楽とのかかわり ー遊びうた（わらべうた）	○拍 ・拍に合わせて、お手合わせをする。	○音・言葉・動き ー音・言葉・動きのかかわり（遊びうた／わらべうた）
活動を通して 指導できる内容	・うたに合わせて動作をまねてうたい合い手合わせを行う、かぞえうた。同じ旋律で大阪府各地でうたい継がれている。地域により歌詞が変化したり、多くの数までうたわれたりしている。	●言葉の抑揚 ・同じ旋律で大阪府各地で歌い継がれているが、地域により歌詞が変化する。 ●反復 ・数に合わせて、同じ旋律がくりかえされる。	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：拍の流れ
- 単元目標：○拍の流れの特質を捉え、イメージに合わせた表現の工夫を重ね、うたっている。
- ・拍の流れを知覚し、拍の流れを意識して表現している。(知識・技能)
 - ・拍の流れの特質を感受し、イメージに合わせて表現の工夫をしている。(思考・判断・表現)
 - ・拍の流れに関心をもって、主体的に表現しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①拍の流れを理解している。 ②拍の流れを意識してうたっている。	①拍の流れにのってうたうことの特質を感受している。 ②拍の流れに合わせて、イメージに合わせた表現の工夫を考えている。	①拍の流れに関心をもち、主体的に取り組もうとしている。

活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	《一つひよこが》の文化的背景を踏まえ、オリジナル《かぞえうた》をつくる。			
1	◆《かぞえうた》への興味を引き出す。 ◆文化的背景をとらえさせる。 ◆自分たちの生活や学習と《かぞえうた》のつながりを感じさせる。	1. 《一つひよこが》の手合わせで遊ぶ。 2. オリジナル《かぞえうた》をつくる。	●導入時には、これまでに学習したさまざまな手合わせうたで遊ぶ場を設定することで、拍の流れを体感することができるようにする。 ●歌詞の提示に合わせ、子どもたちの歌詞への疑問を解決していくことで、文化的背景に自然に迫っていくことができるようにする。 →道修町にある薬箱や昔の大阪の川における船頭の写真やイラストを掲示することで、大阪に伝承されてきたうたであることを感じることができるようにする。 ●ペアで考える場を設定することで、うたづくりの中で常にお手合わせをし、拍の流れを感じることができるようにする。 →新型コロナウイルス感染拡大予防対策として、手を合わせることはせず、距離をとって向かい合った形で行う。		
2	◆分析の場面の必要感をもたせる。	3. お互いの《かぞえうた》を交流する。	●他教科、他領域における学習、生活経験・学習経験と連動させることで、よりうたづくりに主体的に取り組むことができるようにする。 ●うたづくりにおいて、うまくいかないことを交流することで、拍の流れに気付くことができるようにする。		
分析 拍の流れにあった《一つひよこが》と拍の流れにあっていない《一つひよこが》を聴き比べ、拍の流れの特質を捉える。					
	◆拍の流れを知覚させる。 ◆拍の流れの特質を捉えさせる。 ◆再経験にむけ、うたづくりのポイントをつかませる。	4. 拍の流れにあった《一つひよこが》と拍の流れにあっていない《一つひよこが》を聴き比べ、拍の流れに気付く。 5. 《一つひよこが》の拍の流れによる特質を捉える。	●子どもたちの表現における問題解決を図る場面とすることで、より主体的に取り組むことができるようにする。 ●拍の流れに合っているものと合っていないものを聴き比べる場を設定することで、手合わせをともなう《かぞえうた》を特徴付ける特質を捉えることができるようにする。 ●拍の流れにのってうたづくりをすることで、お手合わせうたにすることができることを捉えることができるようにする。	知識・技能① 【ワークシート】 思考判断表現① 【ワークシート】	

3	再経験	拍の流れを意識して、オリジナル《かぞえうた》の表現の工夫をする。		
	◆拍の流れを意識して、お手合わせができるオリジナル《かぞえうた》のうたい方の工夫を考えさせる。	6. 拍の流れを意識して、お手合わせができるオリジナル《かぞえうた》のうたい方の工夫を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ●分析の場面でみつけた拍の流れに合わせてうたう工夫のポイント（拍の流れに合うように言葉を短くする、拍の流れに合わせて言葉を伸縮させるなど）を活用して、オリジナル《かぞえうた》のうたい方の工夫をすることができるようになる。 ●これまでの学習経験や、遊びなどの生活経験を踏まえ、ペアでうたを考えることで、自らの生活における新たな気付き・価値観の創造につなげていくことができるようになる。 ●客観的にオリジナル《かぞえうた》を捉えることができるように、表現をタブレット端末に記録し、ふりかえる場を設定する。随時、ふりかえることができるようにすることで、自分たちのお手合わせにおける拍の流れを視覚的に捉え、表現の工夫につなげていくことができるようになる。 	思考判断表現② 【ワークシート・活動の様子】 主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】
	評価	お互いの《かぞえうた》を聴き合い、拍の流れの特質を捉え、まとめる。		
	◆それぞれのオリジナル《かぞえうた》を聴き合い、拍の流れの特質をまとめさせる。	7. お互いの《かぞえうた》を交流し、拍の流れの特質やお手合わせを伴う《かぞえうた》のよさをまとめる。	●互いの表現を聴き合い、拍の流れの特質をまとめる。	知識・技能② 【演奏】



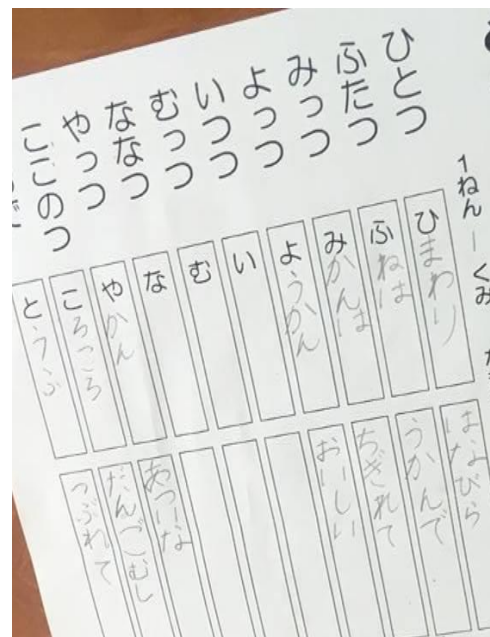
実践のポイント

生活との結びつきを感じることのできるカリキュラムデザイン

子どもたちは、これまでに遊びの中で、手遊びを多く体験してきた。前単元「拍を意識して《わらべうた》であそぼう」では、《おちゃらかほい》や《なべなべそこぬけ》など、わらべうた遊びを通して音楽の学びを深めてきた。このようなわらべうた遊びでは、身体を通して、拍の流れを感じることができる。

そこで、本単元では、教材として用いた《一つひよこが》が、大阪に古くから伝承されてきたことを感じることができるよう、歌詞にでてくる「薬箱」が道修町に展示されていることを伝え道修町が薬の町であることを知る、船場の町の昔の様子を伝えることで番頭さんについて知る、大阪の川の船について伝えることから船頭さんについて知るなど、より身近な地域に伝わる音楽であることを感じることができるようにした。

このような文化的背景や現代における自分たちの生活とのつながりを感じることができるようになることで、オリジナルのうたづくりに、より主体的に取り組むことができるようにした。



オリジナルうたづくり

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

子どもたちは、これまでに遊びの中で、手遊びを多く体験してきている。休み時間などにも、お手合わせをする姿がみられたことから、前単元「拍を意識して《わらべうた》であそぼう」では、《おちやらかほい》や《なべなべそこぬけ》など、わらべうた遊びを通した音楽の学びの場を設定した。わらべうた遊びは、身体を通して、拍の流れを感じる教材である。そこで、本単元では、歌唱活動経験を踏まえ、自分たちで歌詞を考える活動を設定することで、より拍の流れに対する学びを深めていくことができるようにした。自分たちのうたに合わせて、お手合わせ遊びを成立させる上で、拍の流れに対する意識が自然と生まれ、学びへの必要感を持って活動を進めていくことができたと考える。



お手合わせ遊びを通して拍の流れを捉える

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

本実践では、国語科「かぞえうたをつくろう」、算数「1～10の数」、生活科における「学校や地域についての学び」と関連づけることで、より主体的に活動を進めていくことができるようにした。子どもたちの歌詞づくりにおいて、自分たちの生活経験や国語における言葉に対する学習経験をもとに、活動を進めていく姿がみられた。さらには、数は続いていく（算数科における学び）ということ踏まえた「もっと、うたのつづきをつくりたい」や、地域に伝わるうたであったことを踏まえ、より自分事として捉えた「開平小学校のいろいろなものの数をつたえるうたにしたい」というような子どもたちの発言には、より主体的に音楽づくりを進めていきたいと感じる姿がみられた。

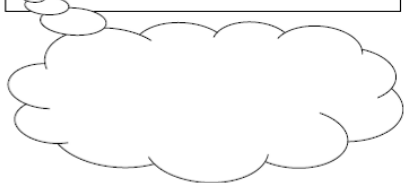
ワークシート

第2時 比較聴取ワークシート

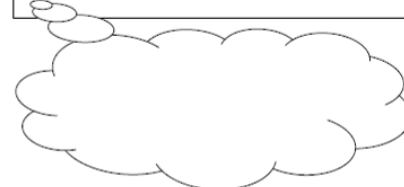
どん・どん・どんにあわせて《かぞえうた》をつくろう

♪ちがいをみつけよう

① はくのながれにあって とき



② はくのながれにあって とき



第1・2・3時 うたづくりワークシート

とこやなむいよみふひと
おこのつつなつつつつ

と	こ	や	な	む	い	よ	み	ふ	ひ

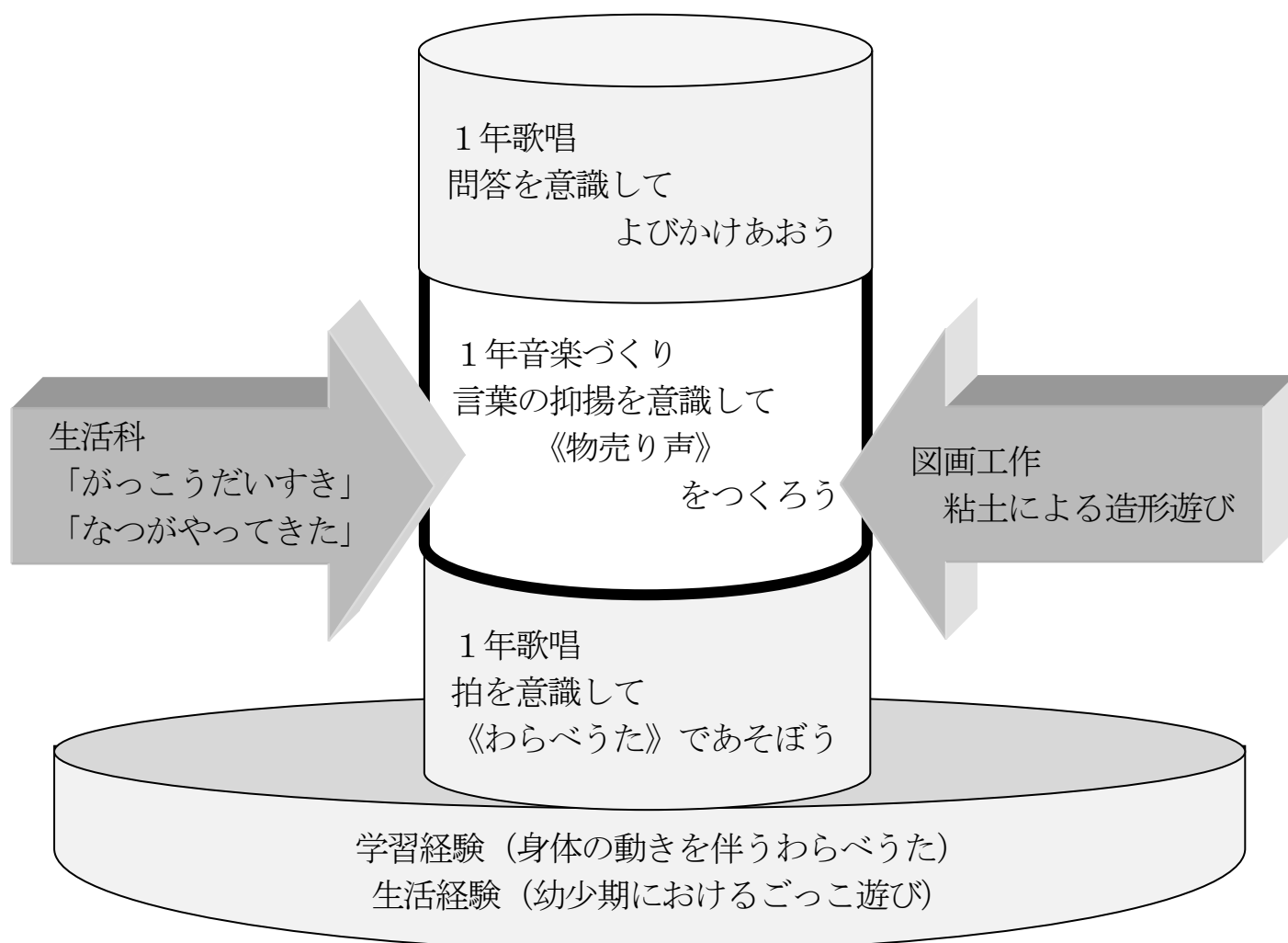
たい	たい	たい	たい	たい	たい	たい	たい	たい	たい
なく	なく	なく	なく	なく	なく	なく	なく	なく	なく
ない	ない	ない	ない	ない	ない	ない	ない	ない	ない

1. (2) 第1学年 音楽づくり「言葉の抑揚を意識して《物売り声》をつくろう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 ー生活と音楽とのかかわり ー生活の声（物売りの声） ・江戸時代、物売りが路上で移動しながら売り物を持って歩く際、売り物の名称を何度も繰り返す中で生まれたうた。	○言葉の抑揚 ・さまざまな地域で伝承されているが、地域により《売り声》の言葉の抑揚は異なる。 ○言葉の伸縮 ・さまざまな地域で伝承されているが、地域により《売り声》の言葉の伸縮は異なる。	○音と動きとのかかわり ー移動と変化 ○音と言葉とのかかわり ー言葉の抑揚
活動を通して 指導できる内容	・《わらびもち屋》や《やきいも屋》などの《売り声》は、今も私たちの生活に根付いており、子どもたちにとっても生活の中で耳にする音楽の一つである。	●声（音）の高低 ●間	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：言葉の抑揚
- 単元目標：○言葉の抑揚の特質を捉え、イメージに合わせてうたづくりをしている。
- ・言葉の抑揚を知覚し、言葉の抑揚を意識して表現している。(知識・技能)
 - ・言葉の抑揚の特質を感受し、イメージに合わせて表現の工夫をしている。(思考・判断・表現)
 - ・言葉の抑揚に関心をもって、主体的に表現しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①言葉の抑揚を理解している。 ②言葉の抑揚を意識してうたっている。	①言葉の抑揚の特質を感受している。 ②言葉の抑揚を意識して、イメージに合わせた表現の工夫を考えている。	①言葉の抑揚に関心を持ち、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	さまざまな《物売り声》をきき、さまざまな《物売り声》の文化的背景を知り、いっしょにうたう。物売り遊びをする。(売り物をつくり、オリジナルの《物売り声》をつくって遊ぶ。)			
1	<p>◆《物売り声》への興味を引き出す。</p> <p>◆文化的背景をとらえさせる。</p> <p>◆物売り遊びをすることで、言葉の抑揚を体感させる。</p> <p>◆自分たちの生活とのつながりを感じながら《物売り声》づくりを進めさせる。</p>		<p>1. さまざまな《物売り声》をきき、さまざまな《物売り声》の文化的背景を知り、いっしょにうたう。</p> <p>2. 売り物をつくり、オリジナルの《物売り声》をつくって遊ぶ。</p>	<p>●初めに、《物売り声》の音源を提示してから、映像を提示することで、文化的背景に自然に迫っていくことができるようにする。</p> <p>●文化的背景を感じることができるように、実際の《物売り声／わらびもち・いしやきいも》を模倣して、物売り遊びをする。</p> <p>→新型コロナウイルス感染拡大予防対策として、人数を限定したり、ソーシャルディスタンスをとりながら、物売り遊びができるようにする。</p> <p>●物売り遊びを疑似体験することで、地域のどのような場所で行われているかを体感したり、《物売り声》が伝承されてきた文化的背景、現代においても伝承されている意味を感じることができるようにする。</p> <p>●図画工作科造形遊びの学習と連携し、図画工作科の時間に、売り物にしたいものを創作する。</p> <p>→新型コロナウイルス感染拡大予防対策としてグループで売りものをつくったり、うたづくりをするのではなく個々に活動を行うこととする。</p> <p>●売り物づくりの中で、売り物の特徴やアピールポイントを意識しておくことで、歌詞づくりに活かすことができるようにする。</p> <p>●他教科・領域における学習、生活経験・学習経験と連動させ、売りたいものに込めた想いを歌詞にのせることができるようにする。</p> <p>●売り物を用いて、「売り手」と「買い手」に分かれ、物売り遊びをすることで、言葉の抑揚に気付くことができるようにする。</p> <p>→新型コロナウイルス感染拡大予防対策として、「売り手」が売り歩いている様子を「買い手」が見る場を設定することで、物売りの様子を捉え、お互いの《物売り声》のよさやアドバイスを考えることができるようにする。</p>	
2	<p>◆分析の場面の必要感をもたせる。</p>				

3	分析	2種類の言葉の抑揚の異なる《物売り声》を聴き比べ、言葉の抑揚の特質を捉える。		
	◆言葉の抑揚の違いを知覚させる。	3.言葉の抑揚の異なる《物売り声》を聴き比べ、言葉の抑揚の違いに気付く。	●子どもたちの表現を踏まえ、言葉の抑揚、言葉の伸縮の異なる《売り声》を聴き比べる場を設定することで、《売り声》を特徴付ける特質を捉えることができるようにする。	知識・技能① 【ワークシート】
	◆言葉の抑揚の違いによる特質を捉えさせる。 ◆うたづくりのポイントをつかませる。	4.《物売り声》の言葉の抑揚の違いによる特質を捉える。	●自分たちの表現に込めた願いと言葉の抑揚の表現の工夫をすることのつながりを捉えることができるようにすることで、再経験へつなげることができるようにする。	思考・判断・表現① 【ワークシート】
	再経験	言葉の抑揚を意識して、オリジナルの《物売り声》の表現の工夫をする。		
	◆イメージに合わせた《物売り声》の表現の工夫を考えさせる。	5.言葉の抑揚を意識して、イメージに合わせた演奏表現を考える。	●自分たちの売り物に対するイメージを踏まえ、よりイメージに合う《売り声》に近づけるために、言葉の伸縮を工夫してオリジナルの《売り声》をつくりかえることができるようにする。 ●これまでの学習経験と遊びなどの生活経験を踏まえ、うたを考えることで、自らの生活における新たな気付き・価値観の創造につなげていくことができるようにする。 ●客観的に《売り声》を捉えることができるように、表現をタブレット端末に記録し、ふりかえる場を設定する。	思考・判断・表現② 【ワークシート・活動の様子】 主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】
	評価	お互いの《物売り声》を交流し、言葉の抑揚の特質や《物売り声》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《物売り声》のよさを共有させる。	6. お互いの《物売り声》を交流し、言葉の抑揚の特質や《物売り声》のよさをまとめる。	●互いの表現を聴き合い、言葉の抑揚の特質をまとめる。	知識・技能② 【演奏】

実践のポイント

生活との結びつきを感じることのできるカリキュラムデザイン

そこで、本単元では、出合いの場において、船場の町に今も残る《物売り声》を提示した。子どもたちにとってなじみのある《物売り声》を提示したことで、生活とのつながりを自然に感じることとなった。また、初めて《物売り声》に出合った児童においても、どのような場所でうたわれているのかなどを交流していくことで、船場で伝承されてきた文化的背景を感じたり、今もどのように伝承されているのかを想起したりすることが容易になった。

このように、出合いの場において、文化的背景や現代における自分たちの生活とのつながりを感じることができるようにしたことで、オリジナルのうたづくりに、より主体的に取り組むことができた。常に「売り手」と「買い手」を意識した活動とすることで、「どんなところをアピールするとよいのか」「どのような声でうたうか」「言葉の抑揚をどのようにつけてうたうか」など、さまざまな表現の工夫を考え、より想いを届けられる《物売り声》へと表現を高めていくことができた。

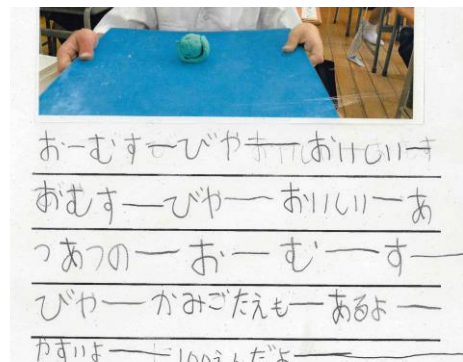
音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

子どもたちは、これまでに生活の中に今も残るうた（わらべうた）に、遊びの中で親しんできていた。また、子どもたちは、休み時間など遊びの中で、自然に言葉をうたにしていっていることもある。

このような子どもたちの姿を学習として設定することで、言葉の抑揚という音楽的要素に着目し、より音楽としての学びを深めていくことにつながった。

このような学習を踏まえることで、祭囃子において共にうたわれる「しりとりのうた」（難波神社ふとん太鼓）や、仕事歌として伝承されてきた民謡の学習において、「言葉の抑揚」という音楽的要素とそれらの音楽が伝承されてきた文化的背景のつながりを、子どもたちが学びの過程において自然に意識していくことが

できるようにした。本単元においては、「より遠くの人にも《物売り声》を届けたい」「売り物のすてきなところを、より伝えたい」という想いをうたにのせて表現するという活動にすることで、言葉の抑揚に対する意識が自然と生まれ、学びへの必要感を持って活動を進めていくことができたと考える。



物売り遊びを踏まえた《物売り声》づくり

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

本実践では、図画工作科における粘土を用いた造形遊びと関連付けることで、造形遊びにおけるつくりたいものへのイメージの深まりと音楽科における歌詞づくりが相互に関連し、それぞれの活動の深まりが見られた。粘土を用いた造形遊びにおいて「だんごをかったときには、おさががついているほうがうれしいだろうな」「おいしいおにぎりに見えるように、のりをつけてみよう」など、より詳細にイメージを膨らませ、その工夫したポイントを歌詞にしていけることができた。

また、生活科「がっこうだいすき」「なつがやってきた」などにおける季節感とも関連付けることで、本時の導入で提示した《わらびもちの物売り声》や《いしやきいもの物売り声》へのイメージが深まり、「あさがおの色水は、ジュースにみえるな」「つめたいジュースだと、毎日あついかから、たくさんの人が買いものにきてくれそう」など、《物売り声》が伝承されてきた文化的背景や現代においても用いられている意味を感じながら、自分たちのうたづくりに活かしたり、うたい方の工夫につなげたりすることができた。

ワークシート

第2時 比較聴取ワークシート

すてきな《うりごえ》をつくろう
♪ききくらべよう。

① よくようが ある とき
うたをせんであらわすと

② よくようが なし とき
うたをせんであらわすと

第1・2・3時 うたづくりワークシート

♪「うりもの」のすてきなところがつたわる《うりごえ》をつくろう。

だんご やさん

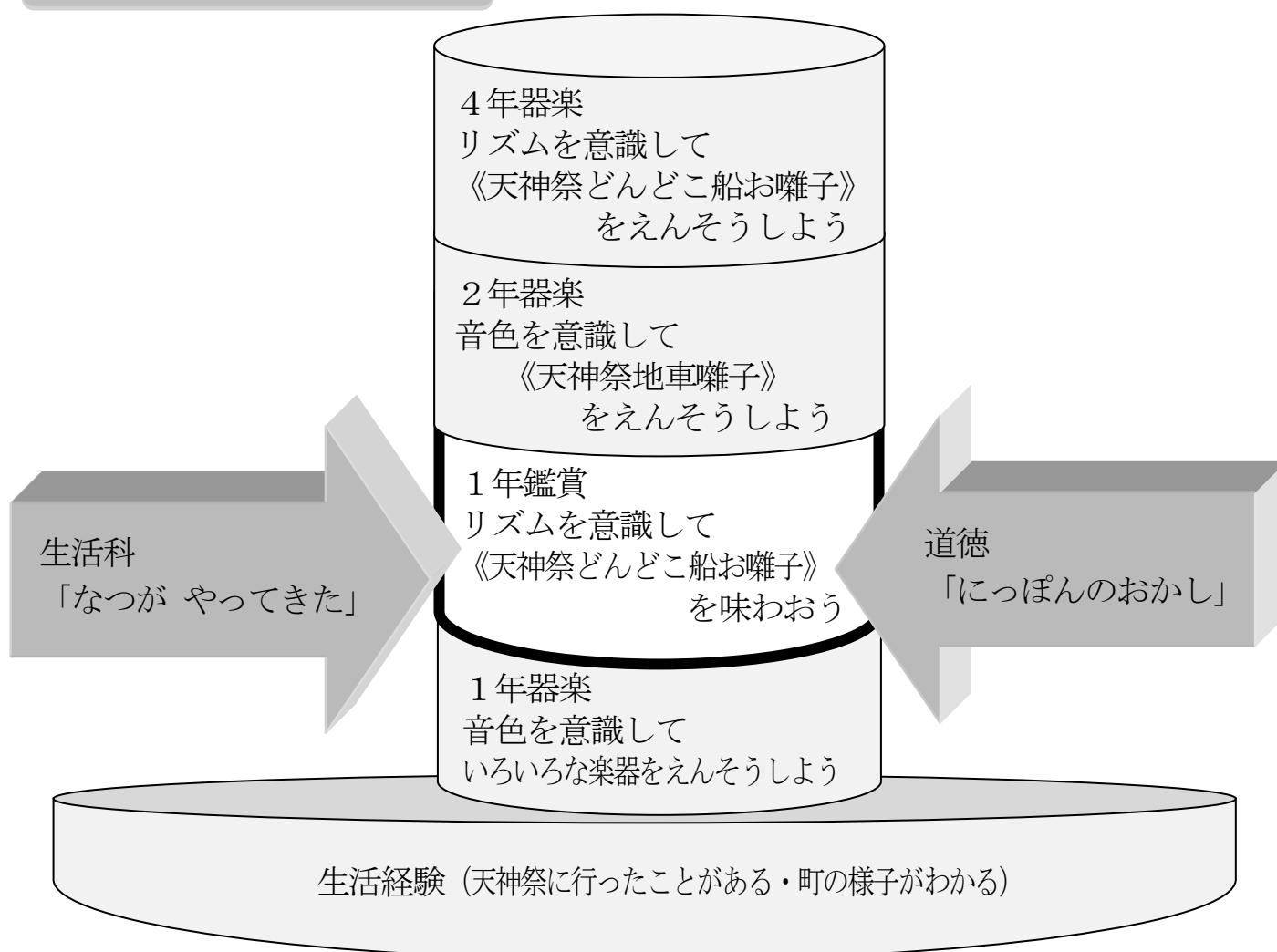
だんごーやさんーきなこー
あじみたらーあじー
ぼうーつーぎーあじー
1ーいー100まんたよー
4ほんー120まんたよーあつてあけのー

1. (3) 第1学年 鑑賞「リズムを意識して《天神祭どんどこ船お囃子》を味わおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 -生活・歴史と音楽とのかかわり -どんどこ船 ・開かれた商業都市として水上交通の発達で 繁栄してきた大坂の経済的実力を背景に、 天神祭はどんどん盛大になっていったと言 われている。このような地域の背景を踏ま え、天神祭は、船渡御を一番の特色とした 川の祭りとして伝承されてきている。この ような天神祭は、日々の船漕ぎの腕前を大 勢の見物人に見てもらふ絶好の機会であ り、その代表が「どんどこ船」であった。 船尾にとりつけられた「太鼓」と「鉦」を どんどこと大川の川面いっぱいうち鳴ら しつづ、かけ声勇ましく漕ぎめぐる様子は、 船渡御の花形とされている。	○リズムパターン ・3つのリズムパターンを太鼓と鉦 で演奏している。 ・船渡御において、「前進する時」 「回転する時」など演奏される場 面によってリズムパターンが異 なる。 ○速度 ・船渡御において、「前進する時」 「回転する時」など演奏される場 面によって速度が異なる。 ○楽器の音色 ・太鼓と鉦で同じリズムを打っている。 ●楽器の音色 ・口唱歌を歌いながら、船漕ぎをす る。	○音・言葉・動きのかか わり -船漕ぎによる身体の動 き ・音（お囃子）、言葉（口 唱歌・掛け声）、動き（船 漕ぎ）のかかわり
活動を通して 指導できる内容			

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：リズムパターン
- 単元目標：○リズムパターンをとらえ、演奏されている空間・状況とのかかわりを意識し《お囃子》のよさを味わう。
- ・リズムパターンの違いを知覚することができる。(知識・技能)
 - ・リズムパターンによる特質を感受し、文化的背景と関連付け、お囃子のよさを考える。(思考・判断・表現)
 - ・リズムパターンに関心をもって、主体的に《お囃子》とのかかわり、よさをとらえようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①演奏される場面におけるリズムパターンの違いを理解し、それぞれのリズムパターンの特徴を捉えている。	①リズムパターンの違いを感受している。 ②お囃子のよさを文化的背景と関連付け、紹介文にまとめる。	①リズムパターンの違いに関心をもって、リズムを打ったり、動きの模倣をしたりしている。 ②リズムパターンの違いを意識して、紹介文によさを表そうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	天神祭どんどこ船における《お囃子》に合わせて、船漕ぎを疑似体験する。(前打ちのみ)			
1	◆《どんどこ船のお囃子》への興味を引き出す。	1.天神祭どんどこ船曳航の様子から、気付いたことを交流する。	●気付きに合わせ、疑似体験空間をつくっていく。(川・船・漕ぐ場所など) →新型コロナウイルス感染拡大予防対策として、教室全体を船と見立て、船の両側の漕ぎ手を疑似体験したり、教室の窓から、漕ぐ様子を見ることで、実際の祭りにおいて、川の祭りを見ている観客を疑似体験したりすることができるようにする。		
てんじんまつりのどんどこぶねの《おはやし》をきこう					
	◆船漕ぎを疑似体験することで、リズムを体感させる。 (言葉【口唱歌】・音楽【お囃子】・動き【船漕ぎ】が三位一体であることを体感させる) ◆文化的背景を捉えさせる。	2. 天神祭どんどこ船における《おはやし》に合わせて、船漕ぎを疑似体験する。 (前打ちのみ)	●船漕ぎを疑似体験することで、身体でリズムパターンを感じることができるようにする。 ●掛け声や「太鼓」「鉦」の口唱歌を唱えながら疑似体験をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●提示映像と疑似体験空間を一致させることで、より「お囃子(音楽)」「船漕ぎ(動き)」「掛け声・口唱歌(言葉)」を三位一体として感じることができるようにする。 ●漕ぎ手と打ち手に分かれて疑似体験する。 ●(前打ちの) 船漕ぎがさらに進むことを伝え、回転のお囃子の船漕ぎを疑似体験することで、リズムパターンの変化に気付くことができるようにする。		
	◆分析の場面の必要感をもたせる。				

主体的に学習に取り組む態度①【活動の様子】

	分析	2種類の《おはやし（前打ち・回転）》を聴き比べ、リズムパターンの特質を捉える。			
		<p>◆リズムパターンの違いを知覚させる。</p> <p>◆リズムパターンの違いによる特質を捉えさせる。</p> <p>◆実際の《お囃子》のリズムパターンのつながりを捉えさせる。</p>	<p>3.リズムパターンの異なる《お囃子》を聴き比べ、速度の違いに気付く。</p> <p>4.《お囃子》のリズムパターンの違いによる特質を捉える。</p>	<p>●①《前打ち》、②《回転》の《お囃子》を比較提示することで、リズムパターンの特質をより捉えることができるようにする。（口唱歌と太鼓を用いた教師による比較提示）</p> <p>●身体を通して2種類の《お囃子》を聴き比べる場を設定することで、より知覚・感受を深めることができるようにする。</p> <p>●掛け声や「太鼓」「鉦」の口唱歌を唱えながら《お囃子》を聴き比べる場を設定することで、リズムパターンの違いを捉えることができるようにする。</p> <p>●子どもたちの気付きに合わせて、適宜、気付きを言葉のみならず、音楽で共有することができるようにする。</p> <p>●それぞれの《お囃子》について言葉やイラストで感じたイメージをまとめることができるようにする。</p> <p>●経験の場における祭りの《おはやし》がどちらであったかをおさえることで、再経験へつなげることができるようにする。</p>	<p>知識・技能① 【ワークシート】</p> <p>思考・判断・表現① 【ワークシート】</p>
	再経験	リズムパターンを意識して、天神祭どんどこ船における《おはやし》に合わせて、船漕ぎの疑似体験をし、《お囃子》のよさを伝える紹介文をかく。			
2		<p>◆リズムパターンを意識して《お囃子》を捉えさせる。</p>	<p>5.リズムパターンを意識して、天神祭どんどこ船における《お囃子》に合わせて、船漕ぎの疑似体験をし、《お囃子》のよさを伝える紹介文をかく。</p>	<p>●リズムパターンを意識して、船漕ぎを改めて疑似体験することで、身体でリズムパターンの違いを感じることができるようにする。</p> <p>●これまでの地域学習（生活・国語・音楽）を踏まえ、自らが感じた天神祭どんどこ船の《おはやし》のよさを伝えるポスター（紹介文）をかく。（パフォーマンス課題）</p>	<p>思考・判断・表現② 【紹介文】</p>
	評価	お互いの紹介文を交流し、天神祭におけるどんどこ船の《お囃子》のよさをまとめる。			
		<p>◆それぞれの感じた《お囃子》のよさを共有させる。</p>	<p>6. お互いの演奏を交流し、天神祭におけるどんどこ船の《お囃子》のよさをまとめる。</p>	<p>●ルーブリックに照らし合わせながら、紹介文を交流することができるようにする。</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度② 【活動の様子】</p>

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

児童にとって、自分たちの生活する地域が川に囲まれているということは、身近な地形の特徴である。本年度は、南天満公園にある開平小学校第2運動場に行くときには、必ず川を渡って行っている。その経路に、天神祭どんどこ船の船着場があり、また、どんどこ船が天神祭当日に宮入する大阪天満宮の参道もある。

しかし、多くの1年生の子どもたちにとって、天神祭は、「花火を見に行ったことがある」「屋台でおいしいものを食べた」という印象が多く、数名の児童が「船にたくさんの人がのっているのを見たことがある」という生活経験にとどまり、本校児童が参加しているどんどこ船について知っている児童は、毎年ほとんどいない。

そこで、本実践を天神祭の前に行うことで、子どもたちが、この学習をきっかけとして天神祭に参加することで、より学びを主体的に深め、自らの生活経験につなげていくことができるようにした。

本単元の実施中に、本校第2運動場に行く際には、川で足をとめ、どんなところで天神祭が行われ、どのように船渡御でどんどこ船が曳航し、お囃子が演奏されているのか考えることで、より生活との結びつきを感じながら、学びを深めていくことができるようにした。



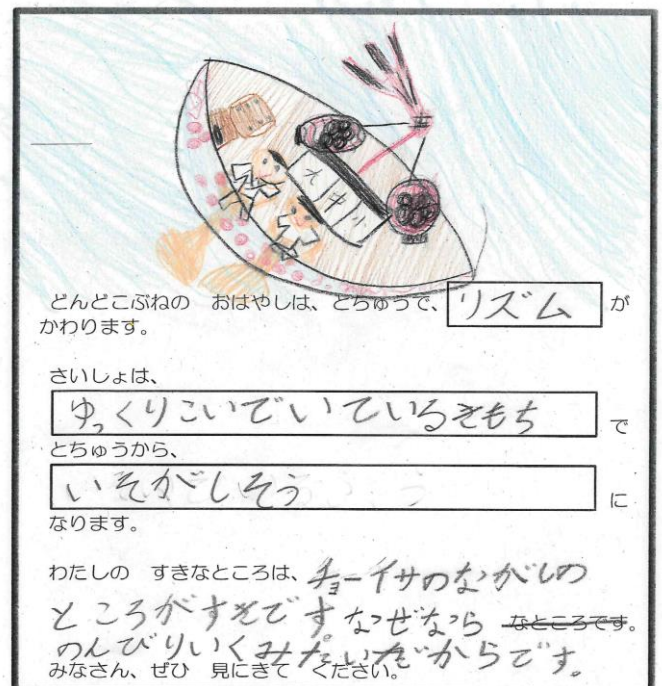
船渡御が行われているところを知る

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

経験の場における自らの生活経験とのつながりによる気付きを踏まえ、「前進（流し）」と「回転」という2つの船の進み方があり、それぞれの場におけるリズムパターンが異なることに気付くことができるようにした。

それぞれの場面におけるお囃子を比較聴取することで、リズムパターンの違いに気付き（知覚）、その特質を捉え（感受）、さらには、実際の祭りの中で、2つのお囃子が分断されているのではなく、船の動きとつながり、1つの音楽として演奏されていることを捉えることができるようにした。このような場面を設定することで、改めてお囃子を味わう場において、音楽を一体として味わうことにつながり、楽曲全体のつながりを音楽のつながりのみならず、動きや言葉などと関連付け捉えていくことにつながっていった。このような疑似体験を踏まえることで、パフォーマンス課題「天神祭どんどこ船の《おはやし》のよさを伝えるポスターをかこう」に、より主体的に取り組むことができたと考えられる。

♪ はじめて「どんどこぶね」を、みにきたひとがいます。
「みどころ」を しょうかいする ポスターをつくりましょう。

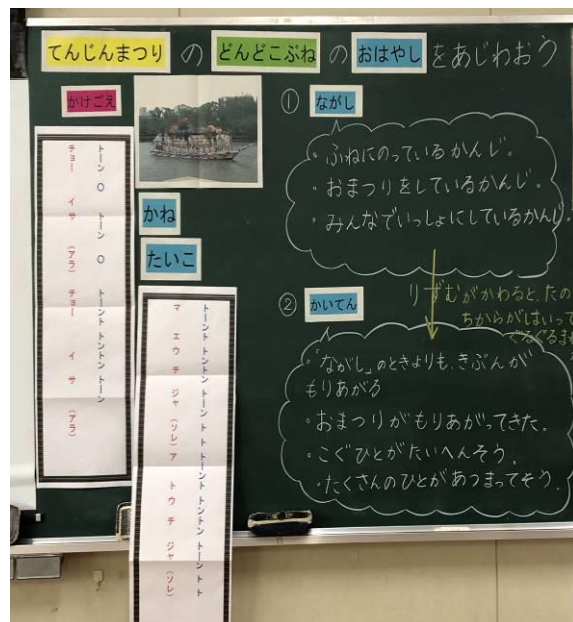


天神祭どんどこ船のお囃子のよさを伝えるポスター

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

生活科「なつがやってきた」と関連付けることで、季節感を感じながら、学びを推し進めていくことができるようにした。本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、天神祭のどんどこ船の曳航は行われなかったが、「来年の夏休みには、見に行ってみたいな」「来年、どんどこ船を漕げるなら、実際に漕いでみたいな」など、生活とのつながりを感じ、自分も主体的に関わってみたいと感じることに繋がったようである。

また、道徳「にっぽんのおかし」の学習と関連付けることで、天神祭が、大阪のみならず、日本においてとても有名な祭りであることにも気付き、自分たちの生活する町に伝承されてきているよさを感じることにもつながったと考える。



生活経験・文化的背景を踏まえた感受の深まり

ワークシート

第1時 比較聴取ワークシート

第2・3時 紹介文ワークシート

《どんどこぶねのおはやし》をあじわおう

♪ 2つの《おはやし》をききくらべよう。

①

ながし

いほんとにながれてる
かんじになりました。
ふねにのってるかんじになりました。
おまつりをしているかんじ
になりました。リズム

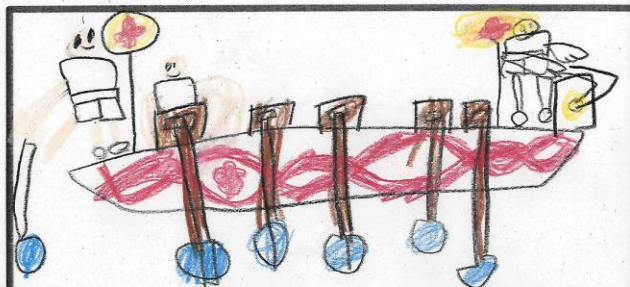
②

がいてん

「ながし」のとまよしも
きぶんが「も」より「な」になり
ました。ほくとして「な」で「き」が
なりました。

リズムが「か」かると、たのしい。

♪ はじめて「どんどこぶね」を、みにきたひとがいます。
「みどころ」を しょうかいする ポスターをつくりましょう。



どんどこぶねの おはやしは、とちゅうで、リズムが
かわります。

さいしょは、

トーン トーン トーン トーン トーン トーン トーン
とちゅうから、

$\frac{1}{t} \rightarrow \frac{1}{t+1}$ に
なります。

わたしの すきなところは、

おまづめ きるいんがしてまゝ ところです。

みなさん、ぜひ 見に来て ください。

第2学年

実践報告

(1) 器楽

「音色を意識して《天神祭地車囃子》をえんそうしよう」

(2) 鑑賞

「リズムを意識して《坐摩神社だんじり囃子》を味わおう」

(3) 歌唱

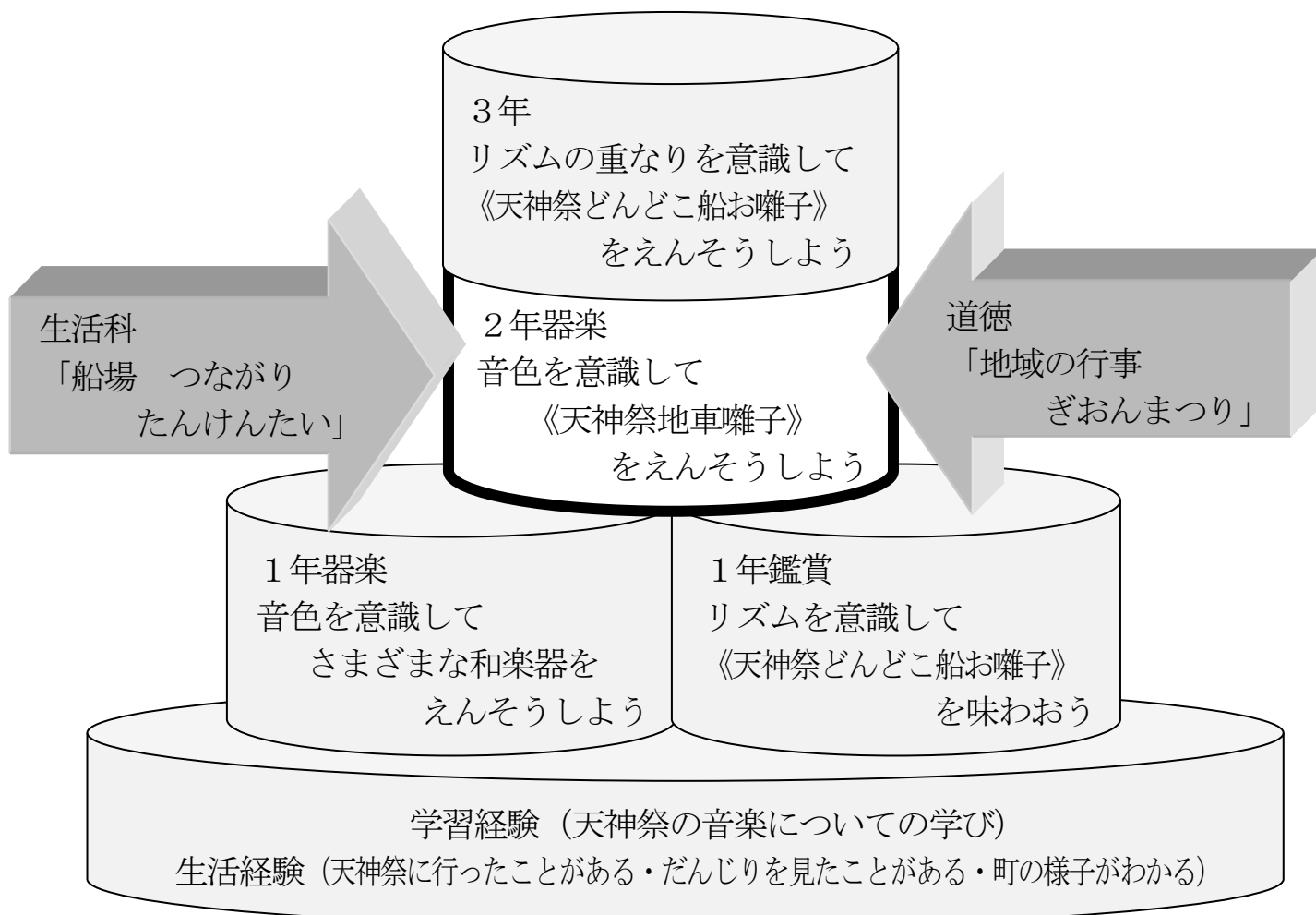
「はねるリズムを意識して《船場通り名おぼえうた》をうたおう」

2. (1) 第2学年 器楽「音色を意識して《天神祭地車囃子》をえんそうしよう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 ー生活・歴史と音楽とのかかわり ーだんじり ・夏に行われる天神祭は、子どもたちにとって生活の一部となっている地域の祭りである。 ・地車は、7月24日は大阪天満宮境内において終日、祭りを盛り上げ、25日の陸渡御では、催太鼓を先頭に、猿田彦、神鈴、地車と続き、総勢3000人の大行列が天神橋までの約3kmのコースを老松町通、新御堂筋、市役所北側を通して歩く。その後、天神橋北詰乗船場より船渡御に向かう。このような陸渡御、船渡御を通して、《地車囃子》は、軽快なリズムで演奏される。 ・《地車囃子》に合わせて、手や指などを使って龍の爪や宝珠をとっているように見せたり、2匹の龍が離れたり近づいたりする姿をイメージして「龍踊り」(動き)が踊られている。	○楽器の音色 ・太鼓と鉦で同じリズムを打っている。 ○リズム ・「コンジキジンジキジンジキジンコンコン」というリズムを太鼓と鉦で演奏している。	○音・言葉・動きのかかわり ー踊りや舞による身体の動き ・音(地車囃子)、言葉(口唱歌)、動き(龍踊り)のかかわり
活動を通して 指導できる内容		●楽器の音色 ・口唱歌を歌いながら、龍踊りをする。(鑑賞、器楽) ●リズム、リズムの重なり ・リズムを感じながら口唱歌をうたい、龍踊りをする。(鑑賞、器楽)	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：鉦の音色
- 単元目標：○和楽器の音色を意識して、お囃子におけるよさを感じ、演奏している。
- ・太鼓と鉦の音色を知覚し、太鼓と鉦の音色を意識して表現している。(知識・技能)
 - ・太鼓と鉦の音色の特質を感受し、イメージに合わせて表現の工夫をしている。(思考・判断・表現)
 - ・太鼓と鉦の音色に関心をもって、主体的に表現しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①太鼓と鉦の音色を理解している。 ②太鼓と鉦の音色の特質を意識してお囃子を演奏している。	①太鼓と鉦の音色の特質を感受している。 ②太鼓と鉦の音色を意識して、お囃子のイメージに合わせた表現の工夫を考えている。	①太鼓と鉦の音色に関心をもち、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	天神祭陸渡御地車曳行における《地車囃子》に合わせて龍踊りを疑似体験する。			
1	◆《地車囃子》に興味をもたせる。	1.天神祭陸渡御地車曳行の様子をみて、気付いたことを交流する。	●平成29年度夏の天神祭陸渡御における「地車曳行」を提示する。 →導入は、《地車囃子》に注目することができるように、音源のみを提示する。 →音源による提示の後、映像を提示する。	《てんじんまつりのだんじりばやし》をきこう	
	◆文化的背景をとらえさせる。 ◆龍踊りを疑似体験することで、リズムを体感させる。 （言葉【口唱歌】・音楽【地車囃子】・動き【龍踊り】が三位一体であることを体感させる）	2.映像に合わせて、龍踊りを疑似体験する。	●気付きの発言に合わせて、《お囃子》に関する文化的背景を伝える。気付きに合わせ、疑似体験のための空間を創造する。 ●気付きを踏まえ、龍踊りを疑似体験することで、身体で《地車囃子》の特質を感じることができるようにする。 ●気付きを踏まえ、伝承されてきた文化的背景と関連付け、《地車囃子》の口唱歌を伝え唱えることができるようにする。 ●《地車囃子》に用いられる和楽器に対する気付きを踏まえることで、音楽と身体の動きを関連づけ捉えることができるようにする。 ●掛け声や「太鼓」「鉦」の口唱歌を唱えながら疑似体験をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●提示映像と疑似体験空間を一致させることで、より「お囃子（音楽）」「龍踊り（動き）」「口唱歌（言葉）」を三位一体として感じることができるようにする。 ●「龍踊り」と「打ち手（お囃子口唱歌）」に分かれて疑似体験することで、より「お囃子（音楽）」「龍踊り（動き）」「口唱歌（言葉）」を三位一体として感じることができるようにする。 ●疑似体験の中で、「鉦と太鼓による《地車囃子》」と「太鼓のみによる《地車囃子》」を提示することで、2つの音楽の違いに気付くことができるようにする。【知覚】		
2	◆分析の場面の必要感をもたせる。				

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

児童にとって、自分たちの生活する地域が、川に囲まれているということは、身近な地形の特徴である。本年度は、南天満公園にある開平小学校第2運動場に行くときには、必ず川を渡って行っている。その経路に、天神祭だんじりが曳行路の一部があり、また、大阪天満宮の参道もある。そこで、天神祭だんじり曳航の場面との出会いにおいて、子どもたちの気付きに合わせ、1年における天神祭だんじり船の学習経験を想起することから、だんじり船曳航などの船渡御に対して、陸渡御があることを伝え、生活との結びつきを感じ、学習に向かうことができるようにした。子どもたちが、この学習をきっかけとして天神祭に参加していくことで、より学びを主体的に深め、自らの生活経験につなげていくことができるようにした。本単元の実施中には、本校第2運動場に行く際に、曳行路で足をとめ、どんなところで天神祭の陸渡御が行われ、どのようにお囃子が演奏されているのか考えることができるようにすることで、より生活との結びつきを感じながら、学びを深めていくことができるようにした。

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

《地車囃子》との出会いの場において、鉦のリズムを伝承する「口唱歌」や「龍踊り」を取り入れることで、《地車囃子》の特質を身体で感じながら、活動を進めていくことができるようにした。「龍踊り」を疑似体験することで、「りゅうがどんどん上がっていくかんじがしたよ。ねがいごとが、空までとどくようにおどりたくなるな」「かねのおとがあると、キラキラしているかんじがするよ。おどっていると、どんどん楽しくなるな」というように、どのような気持ちを込めて演奏しているのか、踊っているのかを身体を通して想起していく姿がみられた。《地車囃子》を特徴付ける鉦の音色に着目することで、鉦の音色による《地車囃子》のよさに気付くことができるようにした。



身体を通してだんじり囃子を感じる

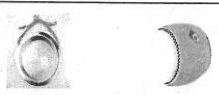
他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】


生活科や道徳における郷土愛に関する単元と関連付けることで、自分たちの生活する町に伝承されてきている音楽にも目を向けることができるようにした。身近な祭りのお囃子を取り上げることで、「じっさいに見に行ってみよう」「いつもは、たくさんの車が通っている道だけど、お祭りのときは、だんじりが主役になっているんだな」など、どのように伝承され、今もどのように大切にされているのかを感じることができた。

ワークシート

第2時 比較聴取ワークシート

♪ ききくらべてみよう。

①  () (〇)

②  (〇) (〇)

②よりもなにか音がたりないような感じがしました。こちもいけれど何かたりないような感じがする。

①よりもおまつりのおどりや音楽がもりあがったような感じがしました。何か②のほうがおもしろいような感じがする。

第3時 紹介文ワークシート

てんじんまつりの「だんじりばやし」は、
(たいこ) と (かね) と (りゅうおどり) で、
えんそうしています。

かねとたいこをあわせてるから、もりあがるかんじが
しました。たいこがあったからかがわいてくるかんじが
しました。

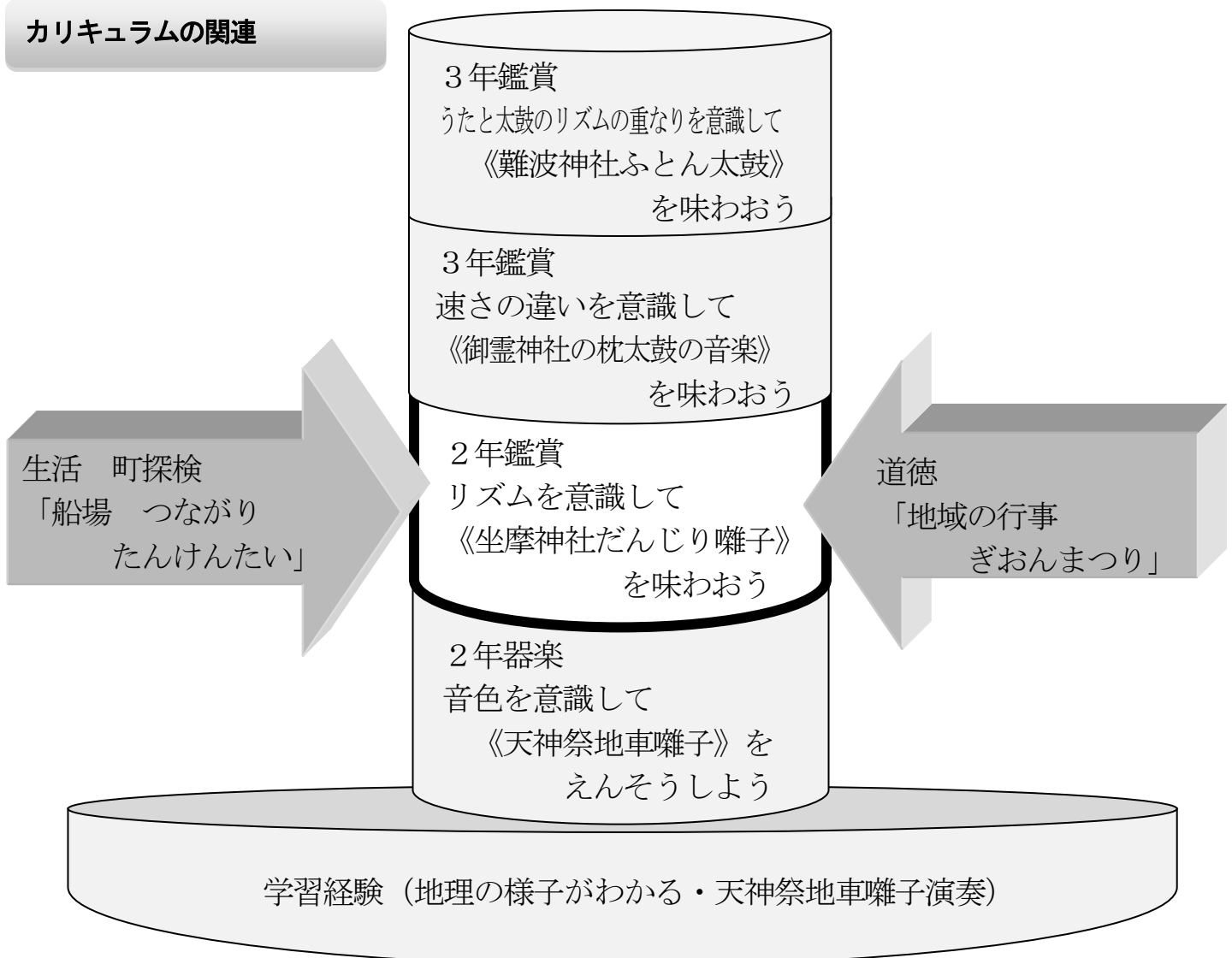
わたしの すきなところは、
たいこかねとりのりゅうおどりがあわさったよう
みなさん、ぜひ 見にきて ください。

2. (2) 第2学年 鑑賞「リズムを意識して《坐摩神社だんじり囃子》を味わおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 -地域の行事と音楽とのかかわり -地元のお囃子（だんじり囃子） ・久太郎町にある坐摩神社では、だんじり囃子がさかんであった。（読本『わが町船場』より）	○リズム ・「チキチン チキチンチキ チキコンコン」とだんじりの動きに合わせてはやされる。	○音・言葉・動き -音・言葉・動きのかかわり -だんじりの動きとお囃子のリズム
活動を通して 指導できる内容	・坐摩神社のだんじりは、氏地の浜仲氏によって、全盛を競い、東堀り十二浜から出ていた。しかし、明治35年ごろ、市内に水道がひかれ、重い物をひくことが禁じられ、夏祭りのだんじりも差し止められたこともあった。 ・このだんじりのお囃子は、『夏祭浪花鑑』にも取り上げられた。「チキチン チキチンチキチキコンコン」と夏の夜に澄みわたるような音を町々に響かせていたといわれている。 ・しかし、明治8年の火災でお道具類が燃えてしまっで以来途絶えてしまった。	●拍の流れ	

カリキュラムの関連



実践の概要

□ 指導内容：リズム

□ 単元目標：○リズムの違いを捉え、演奏されている空間・状況とのかかわりを意識し、よさを味わう。

- ・リズムの違いを知覚することができる。(知識・技能)
- ・リズムによる特質を感受し、文化的背景と関連付け、お囃子のよさを考える。(思考・判断・表現)
- ・リズムに関心をもって、楽曲におけるリズムの違いをとらえようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

□ 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①リズムの違いと伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、リズムによる特徴を捉えている。	①リズムと演奏されている空間・状況との関わりを捉え、お囃子のよさを考える。 ②お囃子のよさを文化的背景と関連付け紹介文にまとめる。	①リズムの違いを意識して、リズムを打ったり、紹介文によさを表そうとしたりし、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	口唱歌から《坐摩神社だんじり囃子》のリズムを捉え、演奏を通して気づいたことを交流する。			
1	<p>◆《坐摩神社だんじり囃子》への興味を引き出す。</p> <p>◆文化的背景を捉えさせる。</p>		1.読本「わが町船場」を読み、《坐摩神社だんじり囃子》について、気づいたことを交流する。	<p>●読本「わが町船場」のイラストを提示し、どのようなことをしている場面を考える。</p> <p>●気づきに合わせ、読本「わが町船場」の本文を提示することで、口唱歌に気付くことができるようにする。</p> <p>●気づきに合わせた、文化的背景をつなげて捉えていくことができるようにする。</p> <p>●気づきに合わせた、疑似体験空間を創造することで、自らの生活経験・学習経験とつなげていくことができるようにする。</p>	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】
《坐摩神社だんじり囃子》を味わおう					
<p>◆疑似体験することで、《お囃子》を体感させる。 (言葉【口唱歌】・音楽【お囃子】・動き【だんじりの動き】が三位一体であることを感じるさせる)</p> <p>◆分析の場面の必要感をもたせる。</p>			<p>●口唱歌（言葉）をうたいながらリズムをうったり、だんじりの動き（動き）、鉦のリズム（音）を一体として疑似体験することで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。</p> <p>●2学期に学習した天神祭のだんじり囃子を想起することで、同じだんじり囃子でもリズムが違うことに気づき、リズムの違いに着目するきっかけをもつことができるようにする。</p>		
分析		リズムの異なる《坐摩神社だんじり囃子》と《天神祭だんじり囃子》を聴き比べ、リズムの違いによる特質を捉える。			
<p>◆リズムの違いを知覚させる。</p> <p>◆リズムの違いによる特質を捉えさせる。</p> <p>◆リズムと文化的背景のつながりを捉えさせる。</p>		3.リズムの異なる《坐摩神社だんじり囃子》と《天神祭だんじり囃子》を聴き比べ、リズムの違いに気付く。	<p>●リズムの異なる《坐摩神社だんじり囃子》と《天神祭だんじり囃子》を比較提示することで、リズムの違いを捉え、特質の感受に繋げることができるようにする。</p> <p>●それぞれの口唱歌を提示し、音源に合わせてうたうことで、リズムの違いを捉えることができるようにする。</p> <p>●気づきに合わせた、音源を提示することで、動きと音と言葉のつながりを捉えることができるようにする。</p> <p>●リズムの違いによる特質を捉え、文化的背景と関連付けることで、再経験へつなげることができるようにする。</p>	知識・技能① 【ワークシート】 思考・判断・表現① 【ワークシート】	

2	再経験	リズムを意識して、《坐摩神社だんじり囃子》を紹介する、読本「わが町船場」の本文を考える。		
	◆リズムを意識して《だんじり囃子》をとらえさせる。	5. 《坐摩神社だんじり囃子》についての紹介文をまとめる。	●1年生の時から学習で用いている読本「わが町船場」の坐摩神社の祭りについての部分に追記する紹介文をまとめる場面を設定する。	思考判断表現② 【紹介文】
	評価	お互いの紹介文を交流し、坐摩神社の《だんじり囃子》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《だんじり囃子》のよさを共有させる。	7. お互いの紹介文を交流し、《坐摩神社だんじり囃子》のよさをまとめる。	●互いの紹介文を交流することから、リズムによる音楽のよさをとらえることができるようにする。	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

子どもたちにとって、船場にある神社の1つ坐摩神社の夏祭りは、身近な祭りである。しかし、伝承が途絶えただんじりの存在を知る児童はなかなかいない。子どもたちが地域学習で用いている読本「わが町 船場」には、坐摩神社の祭りにおいてだんじりが盛んであったことがイラストと共に記載されている。合わせて、これまでのお囃子の学習で用いた「口唱歌」が掲載されていることにより、子どもたちは、記述から音楽（お囃子）を容易に想起することができる。

そこで、導入時に、イラストから祭りを想起する場面を設定し、本文を読み進めることで、音楽（お囃子）の存在に気づき、自分たちが現代に復活させていくことはできないかと考えることを学習の起点とした。このような意識をもつことで、より主体的に学びに向かっていくことができるようにした。



坐摩神社のだんじりは、氏地の浜神社によって、その昔全盛を誇ったもので、東掘り十二浜から出ました。しかし、明治三十五年（一九〇二）頃、市内に水道がひかれ、重い物をひくことが禁じられ、この夏祭のだんじりもさしとめられたこともあり、このだんじりのおはやしは『夏祭浪花鑑』に取り上げられたくらいで、「チキチン、チキチン、チキチンコン」と夏の夜に澄みわたるような音を町々に響かせていました。しかし、坐摩神社の渡御は明治八年（一八七五）の火災で御道具類が燃えてしまつて以来、とだえてしまいました。

夏祭の渡御行列に武者行列が出るのもこの神社の特色でした。現在では、三年に一度二トンもあるみこしをトラックに載せ、回っています。

だんじりが盛んであった坐摩神社の祭り

111

読本「わが町船場」における記述

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

《坐摩神社のだんじり囃子》を口唱歌から想起する場面において、「おはやしは口唱歌でつたえられてきたんだったな」「チキチンチキチンってことは、かねの音色なんだろうな」「イラストに、太鼓と鉦がえがかれているよ。天神祭のだんじりと同じだ」というように、これまでの学習経験を踏まえた発言が多くみられた。

学習経験を踏まえ、同じ楽器で演奏された2つのだんじり囃子《天神祭地車囃子》と《坐摩神社夏祭りだんじり囃子》を比較聴取することで、よりリズムの違いに着目していくことができた。

① 坐摩神社(だんじりばやし)

チキチン チキチン チキチン コンコン

② 天神祭(だんじりばやし)

ゴンジキ ジンジキ ジンジキ コンコン

口唱歌をもとにしたお囃子の比較聴取

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

生活科や道徳における郷土愛に関する単元と関連付けることで、自分たちの生活する町に伝承されてきている音楽にも目を向けることができるようにした。また、長い歴史の中で伝承が途絶えてしまったものもあり、「自分たちが今、できることは何かないのだろうか」と、自分事として、学びを深めていく姿がみられた。

ワークシート

第2時 比較聴取ワークシート

<p>①坐摩神社《だんじりばやし》</p> <p>チキチン チキチン チキチキ コンコン</p> <p>はくに音をばくに引いていこうで たのしいう。かるくなるかんじ がする</p>	<p>②天神祭《だんじりばやし》</p> <p>ゴンジキ ジンジキ ジンジキジン コンコン</p> <p>かんばってだんじりをひいて いるおたのしみかんじ 音はするがくさくさ</p>	<p>①坐摩神社《だんじりばやし》</p> <p>チキチン チキチン チキチキ コンコン</p> <p>かねやたいに音をたいてるかんじ たのしいう。す</p>	<p>②天神祭《だんじりばやし》</p> <p>ゴンジキ ジンジキ ジンジキジン コンコン</p> <p>こまかくてにぎやかなかんじ。 だんじりをひいてる人の あるいるペースが同じ いまいでるかんじ</p>
--	---	---	---

第2時 紹介文ワークシート

○ 坐摩神社の《だんじりばやし》をしようかいしよう。


ざま神社の夏祭りでは、みんなで力をあわせてにぎやかになるようにかんばってだんじりをひいたりかねやたいこでおまつりをにぎやかにさせてるいいいなと思いました。

ざま神社の夏祭りでは、

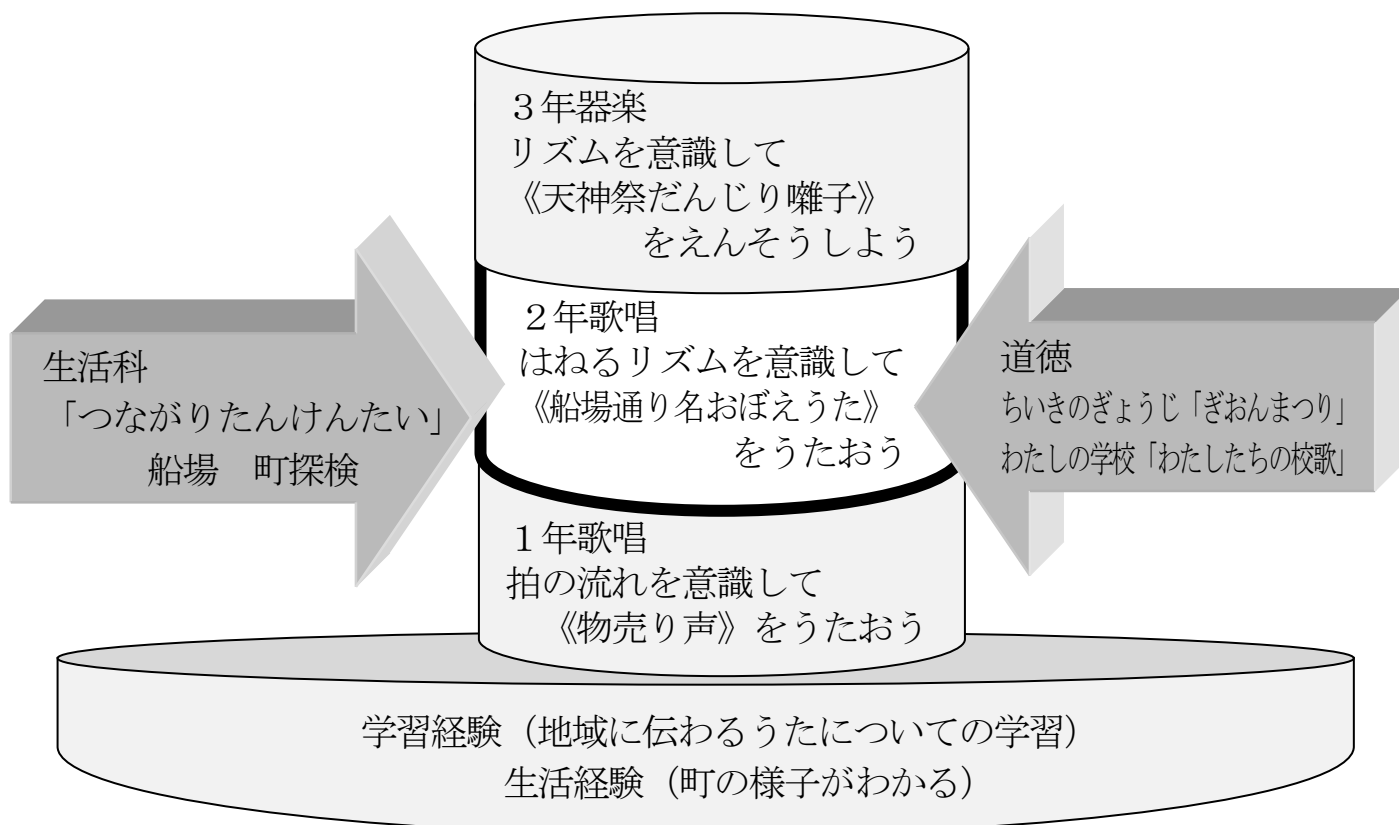
みんなで力を合わせてきもちよくかんばっていけるかんじがしますかねとたいにかきれいな音色になっていまち自分からだんじりきもちよくおまつりしたいみたいです。

2. (3) 第2学年 歌唱「はねるリズムを意識して《船場通り名おぼえうた》をうたおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	<p>○風土・生活・文化・歴史</p> <p>—生活と音楽のかかわり</p> <p>—わらべうた、生活の音楽(おぼえうた)</p> <p>・船場の町は、今も東西と南北の通りが基盤の目のように区割りされている。このわらべうたは、このような船場の通りの名を北から順にうたっている。</p> <p>・船場の商家には各地から丁稚や女中が集まったことから、通り名を覚えないと仕事にならないので、覚え歌ができたのではとされている。</p>	<p>○はねるリズム</p> <p>・  というリズムは、このわらべうたの躍動感を生み出し、親しみやすいうたとなっている。</p> <p>○音高(わらべうたの音律)</p> <p>・レ、ファ、ソの3音で構成されている。</p> <p>○歌詞の抑揚と旋律のかかわり</p> <p>・「かじき」「びんあづち」など、言葉の抑揚が、旋律の動きに反映されている。</p>	<p>○音と動きとのかかわり</p> <p>—通りを歩く身体の動き</p> <p>—遊びによる身体の動き(まりつき)</p> <p>○音と言葉とのかかわり</p> <p>—言葉の抑揚</p>
活動を通して 指導できる内容	<p>・また、子どもたちには、鞠つき歌として伝承されてきたとも言われている。</p> <p>・七五調の言葉遊びうた。</p>	<p>●拍の流れ</p> <p>・うたに合わせて、歩いたりまりつきをしたりする。(歌唱)</p> <p>・拍の流れに合わせて歩いたりまりつきをしたりして「自分のまちのうた」をつくる。(音楽づくり)</p> <p>●リズム</p> <p>・リズムを感じながらうたう。(歌唱、音楽づくり)</p>	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：はねるリズム
- 単元目標：○リズムを意識して、《船場通り名おぼえうた》をうたったり、うたづくりをする。
- ・はねるリズムとはねないリズムの違いを知覚することができる。(知識・技能)
 - ・はねるリズムによる特質を感受し、文化的背景と関連付け、うたづくりをしている。(思考・判断・表現)
 - ・リズムに関心をもって、主体的にうたったり、うたづくりをしたりしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①リズムの違いを理解している。 ②はねるリズムを意識して、うたっている。	①はねるリズムとはねないリズムを感受している。 ②はねるリズムを意識して、表現の工夫を考えている。	①はねるリズムを意識して、身体表現(歩く)をしている。 ②はねるリズムを意識して、うたづくりをしている。

□ 活動の流れ

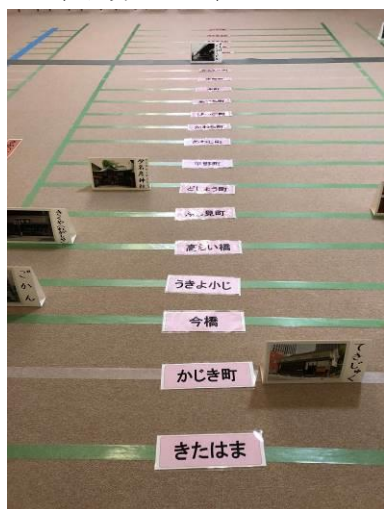
時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	《船場通り名覚え歌》をうたいながら、歩く。			
1	◆《船場通り名おぼえうた》への興味を引き出す。	1. 《船場通り名おぼえうた》をうたいながら、歩く。	●うたいながら歩くことで、身体でリズムを感じることができるようにする。	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】	
	《せんばとおり名おぼえうた》をうたおう				
	◆文化的背景をとらえさせる。 ◆歩くことで、リズムを体感させる。 （言葉・音楽・動きが三位一体であることを体感させる） ◆分析の場面の必要感をもたせる。	2. うたに合わせて歩き、気付いたことや困ったことを交流する。	●うたいながら、歩くことで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●生活科における町探検の活動と関連付けることで、文化的背景を捉えることができるようにする。 ●歩く中で、気付いたつまづき（うまくうたにあわせて歩けない、歩くとうたがへんになる、など）を交流することから、リズムに着目するきっかけをもつことができるようにする。		
分析		2種類の《船場通り名おぼえうた》（はねるリズムのもの、はねないもの）を聴き比べ、リズムの特質を捉える。			
◆リズムの違いを知覚させる。	3. リズムの異なる《船場通り名おぼえうた》を聴き比べ、リズムの違いに気付く。	●身体を通して2種類の《船場通り名おぼえうた》を聴き比べる場を設定することで、より知覚・感受を深めることができるようにする。 ●2つの《船場通り名おぼえうた》を比較提示することで、リズムの特質をより捉えることができるようにする。 ●「歩く役」「うたう役」に分かれて、身体を通して聴き比べる場を設定することで、よりリズムの違いを捉えることができるようにする。 ●リズムの特質を捉え、文化的背景とつなげることで、再経験へつなげることができるようにする。	知識・技能① 【ワークシート】		
◆リズムの違いによる特質を捉えさせる。	4. 《船場通り名覚え歌》のリズムの違いによる特質を捉える。				
◆リズムと文化的背景のつながりを捉えさせる。			思考判断表現① 【ワークシート】		

2	再経験	はねるリズムを意識して、《船場通り名おぼえうた》をうたいながら歩く。 うたの続きがあることを伝え、うたづくりを行う。		
	◆はねるリズムを意識して、うたづくりをさせる。	5.リズムを意識して、自分たちオリジナルのうたを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ●はねるリズムを意識して、うたの続きを考える場を設定する。自分の住むまちのすてきなところを伝えるうたづくりを行うことで、より伝えたいことを明確にイメージし歌詞づくりにつなげていくことができるようにする。 ●創作したうたに合わせて、歩きながらうたうことで、身体でリズムの特質を感じることができるようになる。 ●歩きながらうたうことで、言葉・音楽・動きが三位一体であったことを踏まえ、文化的背景を踏まえた表現とすることができるようになる。 	思考・表現② 【活動の様子】
	評価	お互いのうたを交流し、《船場通り名おぼえうた》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《船場通り名おぼえうた》のよさをまとめさせる。	6.互いのうたを交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ●互いのうたを身体を通して共有することから、はねるリズムの特質を捉えることができるようにする。 ●「2年〇組オリジナル船場通り名おぼえうた」として、全員のうたをリレーにして表現することで、よりはねるリズムでうたうことのよさを感じることができるようになる。 	知識・技能② 【演習】 主体的に学習に取り組む態度② 【活動の様子】

実践のポイント

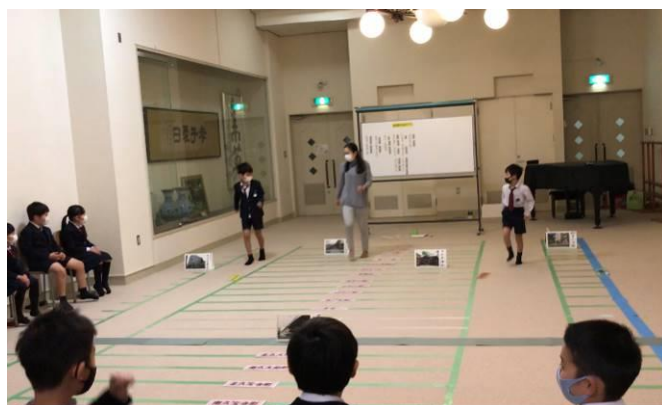
生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

本校の児童の通う校区は、とても広い。通り（東西の道）と筋（南北の道）が碁盤の目ようになっており、子どもたちも、自分たちの住んでいるところを「〇〇町」と意識し、



生活している。

子どもたちは、全員が、
堺筋を順に北上・南下し、
校区北東角に位置する学
校に登校している。そこ

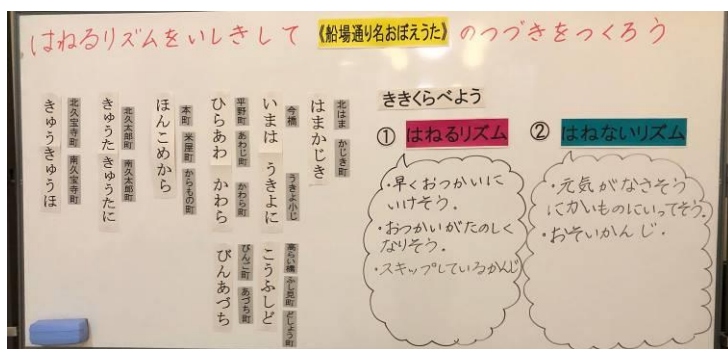


で、導入の場面において、教室を校区に見立て、通りと筋を床面に描き、町探検でみつけたさまざまな建物やお店などの位置を確認し、その床面の筋に沿って《船場通り名おぼえうた》をうたいながら歩くことで、日々の生活とのつながりを感じ、活動を進めていくことができるようにした。

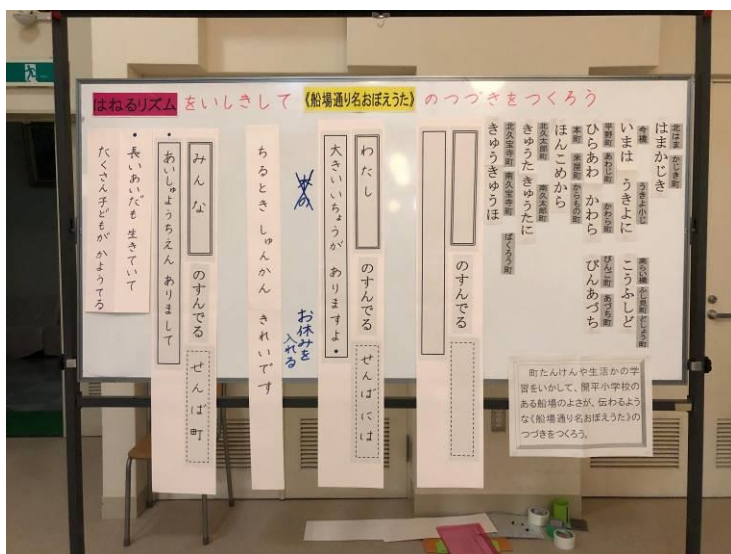
音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

本実践において、音楽の特質に着目する場として、リズムの違いを比較聴取する場を設定した。比較聴取にあたっては、「はねるリズムによる《船場通り名おぼえうた》と「はねないリズムによる《船場通り名おぼえうた》」を提示した。《船場通り名おぼえうた》をうたいながら歩いているときに生じたつまずき（うまくうたにあわせて歩けない、歩くとうたがへんになる、など）を交流することから、リズムに着目するきっかけをもつことができるよう、2つのリズムによる《船場通り名おぼえうた》を提示した。そこでは、「歩く役」「うたう役」に分かれて、身体を通して聴き比べることができるようにすることで、より豊かにリズムの違いを捉えることができるようにした。「①のリズム（はねるリズム）だと、覚えやすいし歩きやすいけれど、②のリズム（はねないリズム）だと、なんか重たい感じがして歩きにくい」と身体を通して知覚・感受を深めていくことができた。

また、うたづくりの場面においては、随時、互いのうたを交流する場を設定することで、うたづくりやはねるリズムにのってうたうポイントを考え、自分の表現に活かしていくことができるようにした。



比較聴取の場



互いのうたを交流し表現の工夫を考える

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】



生活科町探検の様子

本実践を行う上で、生活科における町探検との連携を図った。

町探検のふりかえりの場面において、子どもたちは、それぞれみつけた史跡や建物などが、どの場所にあったか、なかなか思い出すことができなかった。

そこで、本校児童が、さまざまな地域学習において教材として用いている読本「わが町船場」で、それぞれの史跡や建物がどこにあったのかを確認していた。その読本には、本実践で用いた《船場通り名おぼえうた》についての記載があることから、本実践につなげていった。



読本「わが町船場」で通り名を確認



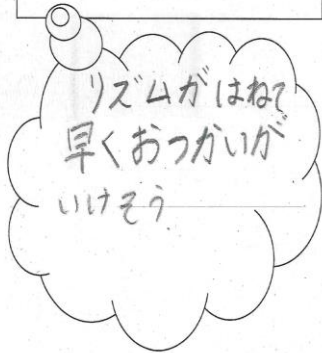
自分の住む町についてうたにする

ワークシート

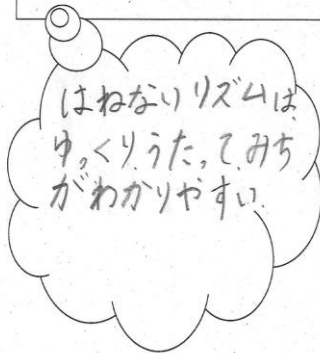
第1時 比較聴取ワークシート

♪ ききくらべてみよう。

① はねるリズム

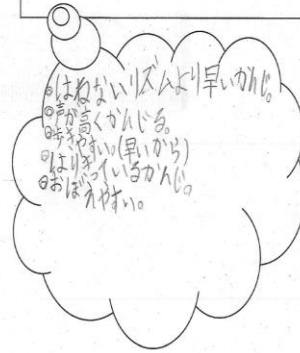


② はねないリズム

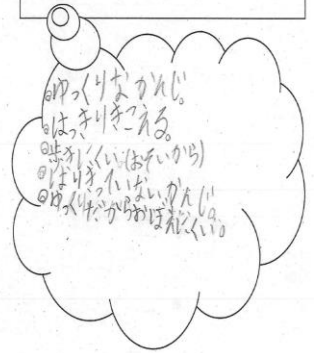


♪ ききくらべてみよう。

① はねるリズム



② はねないリズム



第1・2時 うたづくりワークシート

はまかじき
いまは うきよに
こうふしど
ひらあわ かわら
びんあづち
ほんこめから
きゆうた きゆうたに
きゆうきゆうほ

わたしのすんでる
うなぎやさなかおしいよ。

ふしみ

はまかじき
いまは うきよに
こうふしど
ひらあわ かわら
びんあづち
ほんこめから
きゆうた きゆうたに
きゆうきゆうほ

わたしのすんでる
ちがいにやぎくありまして
しんどいときもべんりだよ

北郷町

第2時 ふりかえりワークシート

♪ 友だちの「うた」をきいて、きづいたことをまとめよう。

ぼくのとのは「しているとき」とは「とき」がありました。

ことばをかえて「リズムを」いい感じにできました。

体で「上上下下」をやつと、こころでいい感じにできました。

♪ オリジナルの「通り名うた」をつくってかんがえたことをまとめよう。

発見したこと・きづいたこと

はねるリズムのしょうが「いいかんじ」がしました。

たのしかったこと・うまくできたこと

うたをうたったら体がうこいてきてとても楽しかった。

かんそう

とても楽しかったからまたやりたいです。😊

第3学年

実践報告

(1) 鑑賞

「速さのちがいを意識して《御霊神社枕太鼓の音楽》を味わおう」

(2) 鑑賞

「太鼓のリズムとうたの重なりを意識して

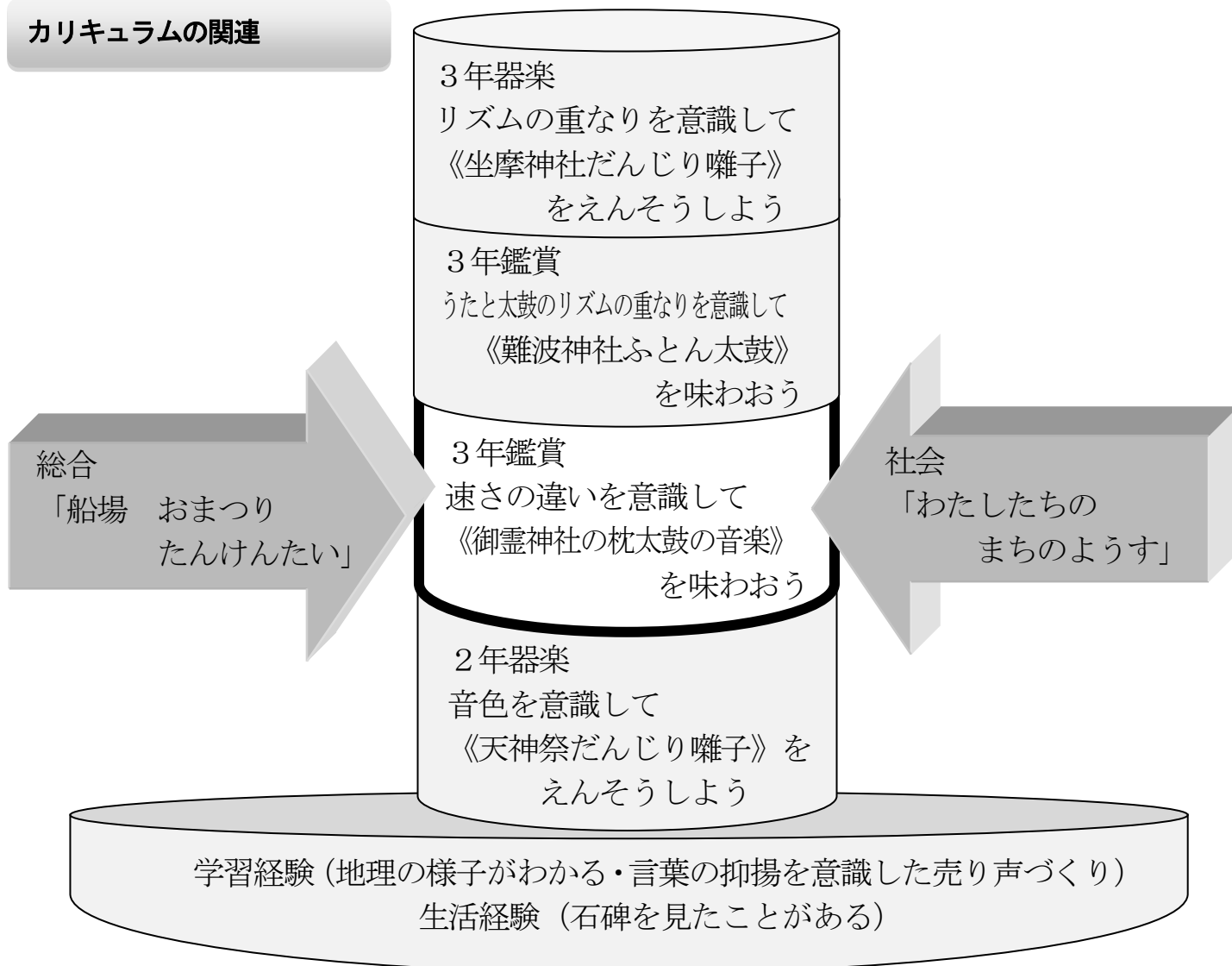
《難波神社ふとん太鼓》を味わおう」

3. (1) 第3学年 鑑賞「速さを意識して《御霊神社枕太鼓の音楽》を味わおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 -地域の行事と音楽とのかかわり -地元のお囃子（枕太鼓） ・願人（がんじ）が乗る「枕太鼓」。枕太鼓とは、祭りのはじまりを告げ、神輿を先導する露払い、邪気を払う役割を担う。祭りの枕太鼓は神社のものであるため、地車は町ごとの名誉もあり意匠、飾りが豪華になるのに対して、枕太鼓では太鼓と赤い枕だけで、殆ど飾りもなく、いたってシンプル。しかしながら願人の太鼓の打ち方は凝っている。願人の所作は上方文化の真髓といえる「粋」そのものである。 ・枕には、「五穀成就（穀物が豊かに実ること）」と「天下太平（世の中が平和でよく治ること）」が刺繍されている。	○速さの違い ・枕太鼓の打たれる場面（待機場面、宮入場面）によって、速さの違いが生じる。 ○拍 ・掛け声に合わせてうたれる音楽は、動きに合わせて拍の流れが変化する。 ○間 ・枕太鼓の動き、打ち手の動きにより間が生じる。	○音・言葉・動き -音・言葉・動きのかかわり -太鼓と動き（動きを伴う太鼓）
活動を通して 指導できる内容	・動きの由来は現在の宮司さんもわからないようであるが、宮入、宮出の前のにぎやかさ、祭りの盛り上げとして昔から引き継がれているようである。	●拍の流れ ●リズム	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：速さの違い
- 単元目標：○速さの違いをとらえ、演奏されている空間・状況との関わりを意識し、よさを味わう。
- ・速さの違いを知覚することができる。(知識・技能)
 - ・速さの違いによる特質を感受し、文化的背景と関連付け、速さの違うそれぞれのお囃子のよさを考える。(思考・判断・表現)
 - ・速さの違いに抑揚に関心をもって、楽曲における速さの違いをとらえようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①速さの違いと伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、速さの違いによる特徴を捉えている。	①速さの違いと演奏されている空間・状況との関わりを捉え、それぞれのお囃子のよさを考える。 ②速さの違いによるお囃子のよさを文化的背景と関連付け紹介文にまとめる。	①速さの違いを意識して、リズムを打ったり、紹介文によさを表そうとしたりし、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい	子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	《御霊神社枕太鼓の音楽》（宮入）を聴き、気づいたことを交流する。		
1	◆《お囃子》への興味を引き出す。 ◆疑似体験することで、《お囃子》を体感させる。 （言葉【掛け声】・音楽【お囃子】・動き【太鼓の動き】が三位一体であることを体感させる）	1. 《御霊神社枕太鼓の音楽》（宮入）を聴き、気付いたことを交流する。	●出合いは、音のみを提示する。 ●気づきに合わせて、文化的背景をつなげて捉えていくことができるようにする。 ●気づきに合わせて、疑似体験空間を創造することで、自らの生活経験とつなげていくことができるようにする。（鳥居・参道・境内）	
《御霊神社の枕太鼓》をきこう				
	◆文化的背景をとらえさせる。 ◆分析の場面の必要感をもたせる。		●疑似体験空間の中で、子どもたち自らが観客役になり映像を視聴することで、よりイメージ豊かに音楽と関わることができるようにする。 ●映像に合わせて、掛け声（言葉）を言ったり、打ち手の動き（動き）、打つ真似（音）をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●宮入とは異なる場面の《枕太鼓の音楽》（待機時）の音楽を提示することで、生まれた気づき（リズムが違う、なんかゆっくりしている、など）を交流することから、速さの違いに着目するきっかけをもつことができるようにする。	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】
分析	2種類の《枕太鼓の音楽》【待機時】、【宮入時】を聴き比べ、速さの違いによる特質を捉える。			
	◆速さの違いを知覚させる。 ◆速さの違いによる特質を捉えさせる。 ◆速さと文化的背景のつながりを捉えさせる。	3.速さの異なる《お囃子》を聴き比べ、速度の違いに気付く。 4.《お囃子》の速さの違いによる特質を捉える。	●2つの《枕太鼓の音楽》を比較提示することで、速さの違いによる特質を捉えることができるようにする。 ●音源に合わせて打つ真似をする身体を通して聴き比べる場を設定することで、より速さの違い、特質を捉えることができるようにする。 ●気づきに合わせて、映像を提示することで、動きと音と言葉のつながりを捉えることができるようにする。速さの違いのみならず、日本伝統音楽ならではの、「間」が“場”や“状況”に応じて変化するということを感じること、祭りにおける枕太鼓の位置付け（祭りの意味）を捉えることができるようにする。 ●速さの違いによる特質をとらえ、文化的背景と関連付けることで、再経験へつなげることができるようにする。	知識・技能① 【ワークシート】 思考判断表現① 【ワークシート】

2	再経験	速さの違いを意識して、2つの場面における《枕太鼓の音楽》を改めて疑似体験する。 《枕太鼓の音楽》についての紹介文をまとめる。		
	◆速さの違いを意識して《お囃子》をとらえさせる。	5. 速さの違いを意識して、2つの場面における《枕太鼓の音楽》を改めて疑似体験する。 6. 《枕太鼓の音楽》についての紹介文をまとめる。	●速さの違いを意識して、疑似体験することで、「言葉と動き、音のつながり」や「祭りの意味」を感じることができるようにする。 ●1年生の時から学習で用いている読本「わが町船場」の御霊神社の祭りについての部分に追記する紹介文をまとめる場面を設定する。	思考判断表現② 【紹介文】
	評価	お互いの紹介文を交流し、御霊神社の《枕太鼓の音楽》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《お囃子》のよさを共有させる。	7. お互いの紹介文を交流し、《枕太鼓の音楽》のよさをまとめる。	●互いの紹介文を交流することから、速さの違いによる音楽のよさをとらえることができるようにする。	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

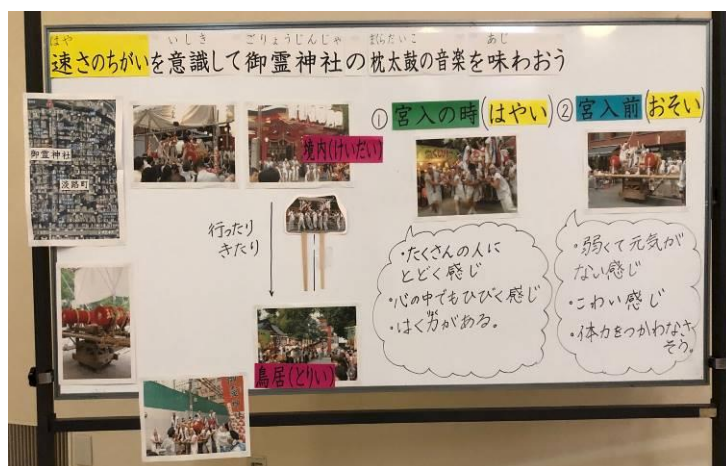
御霊神社夏祭りには、多くの児童が参加している。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、夏祭りは中止となったため、子どもたちは、とても残念に感じていた。

そこで、そのお祭りで行われている枕太鼓の曳行において囃される《枕太鼓の音楽》と出合う場を設定することで、本年度も夏祭りを感じることができるようにした。導入において、宮入の場面における《枕太鼓の音楽》を聴き、自らの身体を通して疑似体験する活動を設定した。御霊神社の「鳥居・参道・境内」を疑似体験の空間として創造することで、自らの生活経験とつなげていくことができるようにした。

疑似体験空間の中で、子どもたち自らが打ち手になって体感したり、観客役になって映像を視聴したりすることで、よりイメージ豊かに音楽と関わるができるようにした。また、映像に合わせて、掛け声（言葉）を言ったり、打ち手の動き（動き）、打つ真似（音）をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにした。このような疑似体験を踏まえ、宮入とは異なる場面の《枕太鼓の音楽》（待機時）を提示することで生まれた気付き（リズムが違う、なんかゆっくりしている、など）を交流することから、速さの違いに着目するきっかけをもつことができるようにした。その感受の中においても、曳行される実際の町の様子を思い浮かべたり、神社の参道を想起したりする姿がみられたことは、自らの生活経験や文化的背景と関連付け、音楽のイメージを深めていっていたと考える。



生活とのつながりを身体で感じる



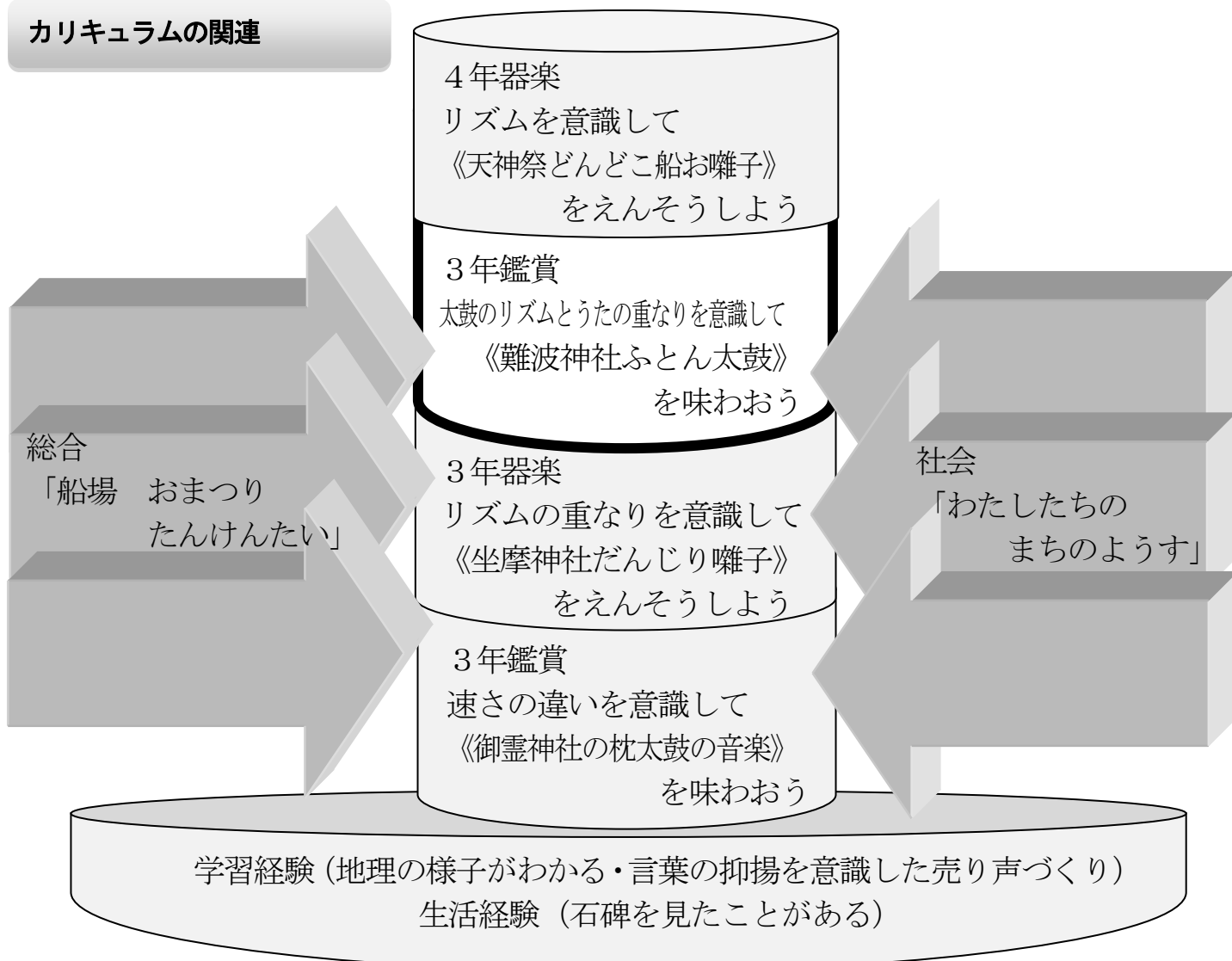
生活経験と関連付け、音楽を捉える

3. (2) 第3学年 鑑賞「太鼓のリズムとうたの重なりを意識して《難波神社ふとん太鼓》を味わおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 -地域の行事と音楽とのかかわり -地元のお囃子（枕太鼓） ・難波神社の布団太鼓のお囃子では、太鼓を打つリズムに合わせて、太鼓台の担ぎ手たちが太鼓台を揺らしながら足並みを揃えて練り歩いたといわれている。その揺れの動きに重ねて蒲団太鼓囃子唄がうたわれた	○太鼓のリズム ・蒲団太鼓のリズムに合わせ、太鼓台が練り歩く。 ○太鼓のリズムと囃子唄の重なり ・太鼓のリズムに合わせて、囃子唄を重ねる。	○音・言葉・動き -音・言葉・動きのかかわり -囃子唄と太鼓のリズムと動き（動きを蒲団太鼓曳行）
活動を通して 指導できる内容	・現在、難波神社では、このような蒲団太鼓の曳行は行われなくなったが、堺市百舌鳥八幡宮月見祭には、今も布団太鼓お囃子として伝承されている。明治後期ごろから、他の神社の夏祭りで大人も子どもも唱和するようになったと言われている。蒲団太鼓がくり出されるときには、囃子唄（尻取り唄）を必ずうたい囃したといわれている。	●拍の流れ ●囃子唄の抑揚 ・太鼓台を揺らしながら	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：太鼓のリズムと囃子唄の重なり
- 単元目標：○太鼓のリズムと囃子唄の重なりをとらえ演奏されている空間・状況との関わりを意識し、よさを味わう。
- ・太鼓のリズムと囃子唄の重なりを知覚することができる。(知識・技能)
 - ・太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質を感受し、文化的背景と関連付けお囃子のよさを考える。(思考・判断・表現)
 - ・太鼓のリズムと囃子唄の重なりに関心をもって、楽曲における重なりのよさを捉えようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①太鼓のリズムと囃子唄の重なりと伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、重なりによる特徴を捉えている。	①太鼓のリズムと囃子唄の重なりと演奏されている空間・状況との関わりを捉え、お囃子のよさを考える。 ②太鼓のリズムと囃子唄の重なりによるお囃子のよさを文化的背景と関連付け紹介文にまとめる。	①太鼓のリズムと囃子唄の重なりを意識して、リズムを打ったり、囃子唄をうたったり、紹介文によさを表そうとしたりし、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	《難波神社ふとん太鼓》と同じように生まれ現代にも伝承され続けている《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓》(宮入)を聴き、気づいたことを交流する。			
1	◆《お囃子》への興味を引き出す。 ◆疑似体験することで、《お囃子》を体感させる。 (言葉【囃子唄】・音楽【お囃子】・動き【太鼓の動き】が三位一体であることを感じるさせる)	1. 《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓》(宮入)を聴き、気づいたことを交流する。	●出合いは、難波神社にある「蒲団太鼓」の写真を提示する。読本「わが町船場」に掲載されている部分を提示する。 ●《難波神社ふとん太鼓》は現代には子ども太鼓としてのみ残っていることを伝え、昔どのような音楽であったのかを、同じルーツで伝承されている《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓》を聴くことで、音楽と出合う。映像提示することで、どのような祭りであったのか、読本にある挿絵と合わせて想起することができるようにする。	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】	
《難波神社ふとん太鼓》を味わおう					
◆文化的背景をとらえさせる。		●気づきに合わせて、文化的背景をつなげて捉えていくことができるようにする。 ●《難波神社ふとん太鼓》の歌詞を提示し、尻取り唄であることに気付くことができるようにする。 ●気づきに合わせて、疑似体験空間を創造することで、蒲団太鼓の動きと音楽、囃子唄のつながりを感じることができるようにする。 ●疑似体験空間の中で、子どもたち自らが観客役になり映像を視聴したり、実際に蒲団太鼓曳行の動きを模倣することで、よりイメージ豊かに音楽と関わることができるようにする。			

	◆分析の場面の必要感をもたせる。		<ul style="list-style-type: none"> ●動きに合わせて、囃子唄（言葉）をうたったり、口唱歌をうたいながら太鼓を打つ真似（音）をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●疑似体験の場において、太鼓を入れてうたいながら動いたり、太鼓の演奏はせずうたいながら動いたりすることから、太鼓のリズムと囃子唄の重なりに着目するきっかけをもつことができるようにする。 	
分析	2種類の《ふとん太鼓の音楽》（【囃子唄のみのもの】、【太鼓のリズムに囃子唄を重ねたもの】）を聴き比べ、太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質を捉える。			
	<p>◆太鼓のリズムと囃子唄の重なりを知覚させる。</p> <p>◆太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質を捉えさせる。</p> <p>◆太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質をとらえ、文化的背景と関連付け再経験への必要感をもたせる。</p>	<p>3. 2種類の《ふとん太鼓の音楽》（【囃子唄のみのもの】、【太鼓のリズムに囃子唄を重ねたもの】）を聴き比べ、太鼓のリズムと囃子唄の重なりにより気付く。</p> <p>4. 太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質を捉える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●2種類の《ふとん太鼓の音楽》（【囃子唄のみのもの】、【太鼓のリズムに囃子唄を重ねたもの】）を比較提示することで、太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質を捉えることができるようにする。 ●音源に合わせて動いたり、うたったりと、身体を通して聴き比べる場を設定することで、より太鼓のリズムと囃子唄の重なりを知覚し、その特質を捉えることができるようにする。 ●気付きに合わせて、《百舌鳥八幡宮月見祭団太鼓（宮入）》の映像を提示することで、動きと音と言葉のつながりを捉えることができるようにする。太鼓のリズムと囃子唄の重なりのみならず、日本伝統音楽ならではの、“場”や“状況”とのつながりを感じ、祭りにおけるふとん太鼓の位置付け（祭りの意味）を捉えることができるようにする。 ●太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる特質をとらえ、文化的背景と関連付けることで、再経験へつなげることができるようにする。 	<p>知識・技能① 【ワークシート】</p> <p>思考・判断・表現① 【ワークシート】</p>
再経験	太鼓のリズムと囃子唄の重なりを意識して、読本「わが町船場」に追記する《難波神社ふとん太鼓の音楽》についての紹介文をまとめる。			
2	◆太鼓のリズムと囃子唄の重なりを意識して《お囃子》を捉えさせる。	<p>5. 太鼓のリズムと囃子唄の重なりを意識して、《難波神社ふとん太鼓》を改めて疑似体験する。</p> <p>6. 《難波神社ふとん太鼓》についての紹介文をまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●太鼓のリズムと囃子唄の重なりを意識して、疑似体験することで、「言葉と動き、音のつながり」や「祭りの意味」を感じることができるようにする。 ●1年生の時から学習で用いている読本「わが町船場」の難波神社の祭りについての部分に追記する紹介文をまとめる場面を設定する。 	<p>思考・判断・表現② 【紹介文】</p>
評価	お互いの紹介文を交流し、《難波神社ふとん太鼓》のよさをまとめる。			
	◆それぞれの感じた《お囃子》のよさを共有させる。	7. お互いの紹介文を交流し、《難波神社ふとん太鼓》のよさをまとめる。	●互いの紹介文を交流することから、太鼓のリズムと囃子唄の重なりによる音楽のよさをとらえることができるようにする。	<p>主体的に学習に取り組む態度 ① 【活動の様子】</p>

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

難波神社夏祭りでは、境内に子ども布団太鼓がおかれている。しかし、昔行われてた布団太鼓は、現在伝承されているものとは異なっている。堺市にある百舌鳥八幡宮月見祭で行われる布団太鼓と同様であったと言われており、地域によって太鼓のリズムに重ねてうたわれる囃子唄（尻取り唄）が異なっている。読本「わが町船場」には、難波神社で行われていたふとん太鼓の囃子唄が掲載されている。



現代に残る祭りから、地域の祭りについて考える

これまでの生活経験や学習経験において、子どもたちが味わっているお囃子の多くは、太鼓や鉦によるお囃子のみで、うたを伴うものはほとんどない。そこで、現代にも残る百舌鳥八幡宮月見祭の布団太鼓曳行の様子を映像でみることで、より関心をもって、自分たちの住む地域にあったふとん太鼓の音楽について考えていくことができるようにした。

また、映像に合わせて、身体を通して模倣することで、太鼓のリズムとうたの重なりやふとん太鼓の動きとのつながりを感じることができた。

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

これまでの器楽によるお囃子の学習経験を踏まえ、より本教材の特徴である《太鼓のリズムとうたの重なり》に着目することができるように、《太鼓のリズムにうたが重なったお囃子による曳行のとき》と《うたのみによる曳行のとき》という2つの身体を通した疑似体験をすることから、それぞれの文化的背景を踏まえた《太鼓のリズムとうたの重なり》について感受を深めていくことができるようにした。



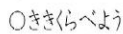
疑似体験を通した比較聴取

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

3年総合「船場 おまつり探検隊」の学習と関連付け、読本「わが町 船場」を用いて、学習を進めていった。読本においては、音楽についての記述はあるが、読むだけではどのような音楽か体感することはできない。そこで、総合的な学習の時間と関連付け学習を展開することで、口唱歌の記述から演奏につなげ、音楽に主体的に関わり、さらには文化的背景など、より子どもたちがさまざまな視点から、船場に伝わるお祭りについて考えていくことができた。



太鼓のリズムと囃子唄の重なりを意識して
《難波神社のふとん太鼓》を味わおう



何が必要ないか^{おとどきな}にする。もしもからなら、
 さんに^{おとどきな}ない。リス^{おとどきな}がからなら、
 おとどきなないけど、話^{おとどきな}はうたいたい。
 もしもからなら、
 もしもからなら、

ぼたんにからしし　竹に虎
虎追うて走るは　わとうない
わとないお方に　知恵かそか
知恵の中山　せいかん寺
せいかん寺のおしよさん　ぼんさんで
ぼんさんタコ食て　へとついた
その手でおしよかの　顔なでた
おしよかもあきれて　飛んで出た
ヒーヤフーヤ　エヤサツサ

おあす
おどろきました。きれいな音。ほそ、いい
おあす。おあすかえじがすき。いよかた。
おにいいかんい。いよとていす。いよかた。
リズムがいい。いよとていす。いよかた。

○「わが町 船場」に、《難波神社ふとん太鼓》の音楽のしょうかいをつけくわえよう。



ふ、とんたいこが名物の
なは神社のお又示ッ
のうたではしりとりをつ
かていて、とてもおもしろ
う、うたです。太この
スッテンドン、スッテン
ドンというリズムにあ
わせてすすんだり、う
たったりして、いまし
た。今のはのこ、てはいませ
んが、ネットかなどで

蒲田太鼓が名物の
難波神社の祭り

遊樂所、五丁目の難波神社は、通稱、南宮町の御稲荷さま
 んで遊ばれてきたところ。六丁、南船場一丁目、島之内、阿波
 座・新堀江、堀江、わたり一丁、南船場、二丁目、南堀江、
 江下、通一丁目、御旅所があつて、七月二十一日に、難波
 が行われました。難波神社の名物は、蒲田太鼓でした。
 これは、枕太鼓の上の四本、柱の屋根に、紅白雛紗・羊毛
 の織った地の綿織物、のふんをおおい、へちま四
 人の子どもが美しく着飾つて乗り、拍子に合わせ
 て、「エー、ホー、ウ、エヤサツサ」牡丹に唐獅子、竹に虎
 虎迫つて走ると、和服・内、わなのおおむに……とはやす。
 これは、つまり、尻とり文句の一種です。打手は普通の
 の枕太鼓と同じ、特別に選ばれた子どもたちがこれ
 をこめました。

第4学年

実践報告

(1) 器楽

「リズムを意識して《天神祭どんどこ船お囃子》をえんそうしよう」

(2) 鑑賞

「こぶしを意識して《淀川三十石船舟歌》を味わおう」

(3) 音楽づくり

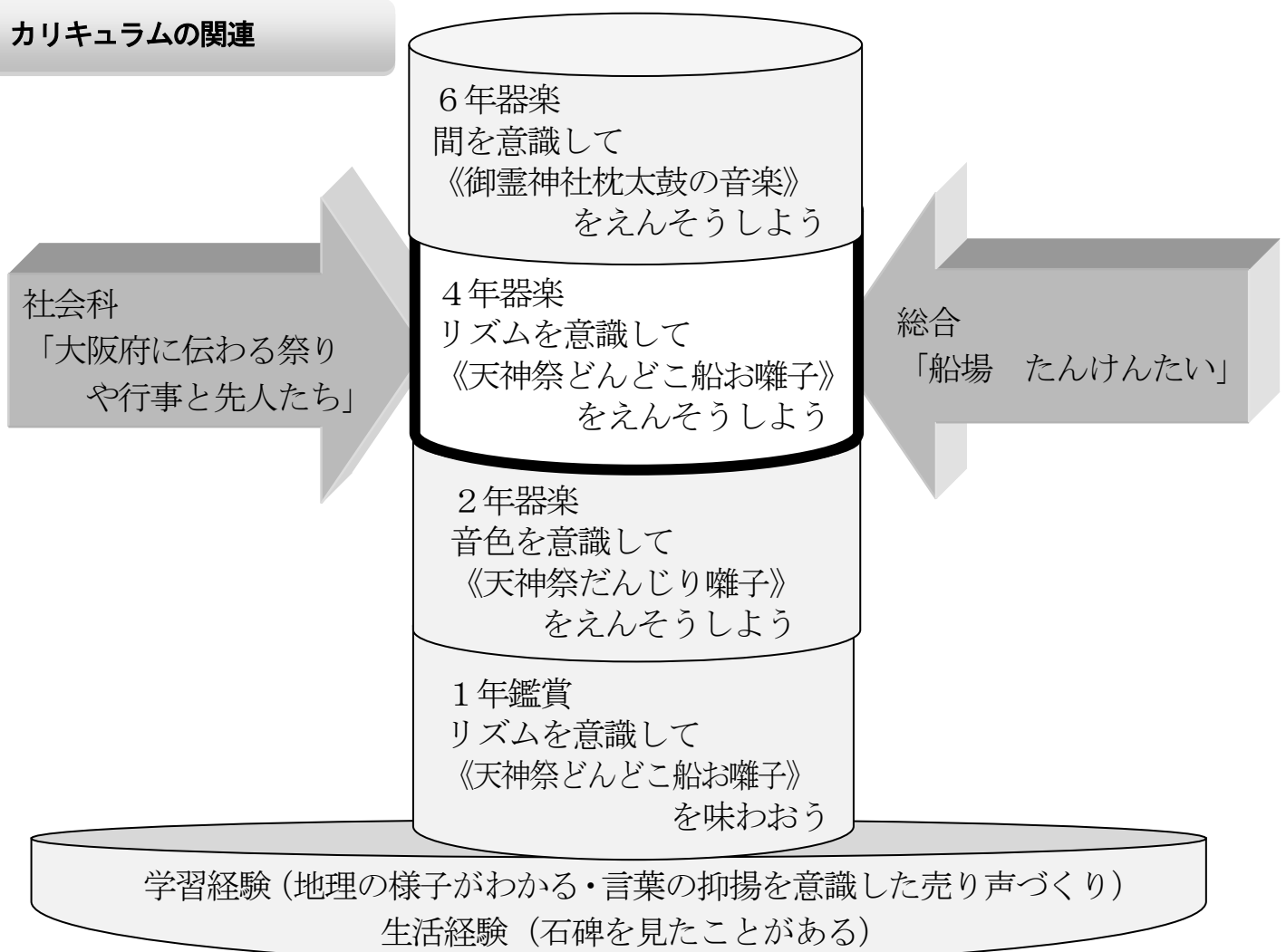
「間を意識して《手締め（船場締め・大阪締め）》をつくろう」

4. (1) 第4学年 器楽「リズムを意識して《天神祭どんどこ船お囃子》をえんそうしよう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 -生活・歴史と音楽とのかかわり -どんどこ船 ・開かれた商業都市として水上交通の発達で繁栄してきた大坂の経済的実力を背景に、天神祭はどんどん盛大になっていったと言われている。このような地域の背景を踏まえ、天神祭は、船渡御を一番の特色とした川の祭りとして伝承されてきている。このような天神祭は、日々の船漕ぎの腕前を大勢の見物人に見てもらい絶好の機会であり、その代表が「どんどこ船」であった。船尾にとりつけられた「太鼓」と「鉦」をどんどこと大川の川面いっぱいにならび鳴らしつつ、かけ声勇ましく漕ぎめぐるのは、船渡御の花形とされている。	○リズムパターン ・3つのリズムパターンを太鼓と鉦で演奏している。 ・船渡御において、「前進する時」「回転する時」など演奏される場面によってリズムパターンが異なる。 ○速度 ・船渡御において、「前進する時」「回転する時」など演奏される場面によって速度が異なる。 ○楽器の音色 ・太鼓と鉦で同じリズムを打っている。	○音・言葉・動きのかかわり -船漕ぎによる身体の動き ・音（お囃子）、言葉（口唱歌）、動き（船漕ぎ）のかかわり
活動を通して 指導できる内容		●楽器の音色 ・口唱歌を歌いながら、船漕ぎをする。	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：リズムパターン
- 単元目標：○リズムパターンに関心をもって、イメージに合わせて《天神祭どんどこ船お囃子》を演奏している。
- ・リズムパターンの違いを知覚することができる。(知識・技能)
 - ・リズムパターンの違いによる特質を感受し、それぞれの場面と関連付け、イメージに合わせて《天神祭どんどこ船お囃子》を演奏している。(思考・判断・表現)
 - ・リズムパターンに関心をもって、リズムパターンによるお囃子のよさを感じて演奏している。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①太鼓や鉦のリズムパターンと伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、それぞれの違いを捉えている。 ②リズムパターンの違いを意識して、オリジナル曳航図に合わせて《どんどこ船お囃子》を演奏している。	①太鼓や鉦のリズムパターンの違いをふまえ、お囃子の演奏される場面と関連付け、その特徴をとらえている。 ②場面におけるリズムパターンの違いを踏まえ、オリジナル曳航図を考え、表現の工夫を考える。	①リズムパターンの違いを意識して、活動に主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい	子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	天神祭どんどこ船における《お囃子》に合わせて、船漕ぎを疑似体験する。(前打ちのみ) グループで、船漕ぎに合わせて、太鼓と鉦で《お囃子》を演奏する。		
1	<p>◆《どんどこ船のお囃子》への興味を引き出す。</p> <p>◆船漕ぎを疑似体験することで、リズムを体感させる。 (言葉【口唱歌】・音楽【地車囃子】・動き【龍踊り】が三位一体であることを体感させる)</p> <p>◆文化的背景をとらえさせる。</p>	1. 天神祭どんどこ船における《お囃子》に合わせて、船漕ぎを疑似体験する。(前打ちのみ)	<p>●船漕ぎを疑似体験することで、身体でリズムパターンを感じることができるようにする。</p> <p>●掛け声や「太鼓」「鉦」の口唱歌を唱えながら疑似体験をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。</p> <p>●提示映像と疑似体験空間を一致させることで、より「お囃子(音楽)」「船漕ぎ(動き)」「掛け声・口唱歌(言葉)」を三位一体として感じることができるようにする。</p>	
《天神祭のどんどこ船のおはやし》をえんそうしよう				
	◆口唱歌をうたいながら、お囃子を演奏させる。	2. グループで、船漕ぎに合わせて、太鼓と鉦で《お囃子》を演奏する。	<p>●漕ぎ手と打ち手に分かれて疑似体験することで、より「お囃子(音楽)」「船漕ぎ(動き)」「掛け声・口唱歌(言葉)」を三位一体として感じることができるようにする。</p> <p>●「漕ぎ手」と「打ち手(お囃子口唱歌)」を十分に体験し、口唱歌を覚えて唱えることができるようになったら、《お囃子》を演奏する。</p> <p>●楽器を実際に打つ前に、パチを持たず打ち方を体験しておくことで、打つときに、打ち手につまずかないようにする。</p> <p>●口唱歌を唱えながら演奏することができるようにする。</p>	

2	◆分析の場面の必要感をもたせる。		<ul style="list-style-type: none"> ●グループで、「漕ぎ手」と「打ち手」にわかれて《お囃子》を演奏することで、身体で《お囃子》の特質を感じることができるようにする。 ●演奏におけるつまずきから、リズムパターンに着目することができるようにする。 	
	分析	2種類の《おはやし（前打ち・回転）》の変化を聴き、リズムパターンの特質を捉える。		
	◆リズムパターンの違いを知覚させる。	3.船の動きに合わせて、《お囃子》が変化する場面を聴き、リズムパターンの変化に気付く。	<ul style="list-style-type: none"> ●《前打ち》から《回転》に《お囃子》が変化する場面を提示することで、リズムパターンの変化による特質を捉えることができるようにする。 （映像による提示） ●身体を通して《お囃子》の変化を捉える場を設定することで、より知覚・感受を深めることができるようにする。 ●掛け声や「太鼓」「鉦」の口唱歌を唱えながら《お囃子》の変化を捉える場を設定することで、リズムパターンの変化を捉えることができるようにする。 ●それぞれどのような場面で演奏されていたかを捉えることで、自分たちの演奏に、イメージを伴い音楽表現の工夫（オリジナル曳航図による演奏）を重ねる再経験へつなげることができるようにする。 ●子どもたちの気付きに合わせて、適宜、気付きを言葉のみならず、音楽で共有することができるようにする。 ●それぞれの《お囃子》について言葉やイラストで感じたイメージをまとめることができるようにする。 	知識・技能① 【ワークシート】
	◆リズムパターンの違いによる特質を捉えさせる。	4.《お囃子》のリズムパターンの変化による特質を捉える。		
	◆2つの《お囃子》のつながりを祭の文化的背景と関連付け、捉えさせる。			思考・判断・表現① 【ワークシート】
	再経験	リズムパターンを意識して、オリジナル曳航図を描き、イメージに合わせた天神祭どんどこ船曳航の《お囃子》を考え演奏表現の工夫を考える。		
3	◆イメージに合わせた《お囃子》の演奏の工夫を考える。	5.リズムパターンを意識して、イメージに合わせた表現を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ●オリジナル曳航図を考えることで、どのような場面で演奏されているかグループでイメージを共有し、そのイメージに合わせたリズムパターンで演奏することができるようにする。 →場面や場所をイラストで表したり、曳行図を描いたりすることで、イメージをより共有することができるようにする。 ●イメージに合わせた船漕ぎに合わせて演奏することで、言葉・音楽・動きが三位一体であったことを踏まえ、文化的背景を踏まえた表現とすることができるようにする。 	思考・判断・表現② 【ワークシート・活動の様子】 主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】
	評価	お互いの演奏を交流し、天神祭におけるどんどこ船の《お囃子》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《お囃子》のよさを共有させる。	6.互いの演奏を交流する。	●お互いの演奏を交流し、天神祭におけるどんどこ船の《お囃子》のよさをまとめる。	知識・技能① 【演奏】

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

これまでの学習経験を踏まえ、導入において、改めて身体を通して音楽を感じる場として、「船漕ぎ」を疑似体験する場を設定した。船漕ぎを疑似体験することで、「おはやしに合わせてこいでいたら、グッと力を入れてこぎたくなるな。力強い感じがする」「おはやしに合わせて掛け声をいったり、船をこいだりしているんだな」というように、「お囃子（音楽）」「船漕ぎ（動き）」「掛け声・口唱歌（言葉）」を三位一体として感じる姿がみられた。

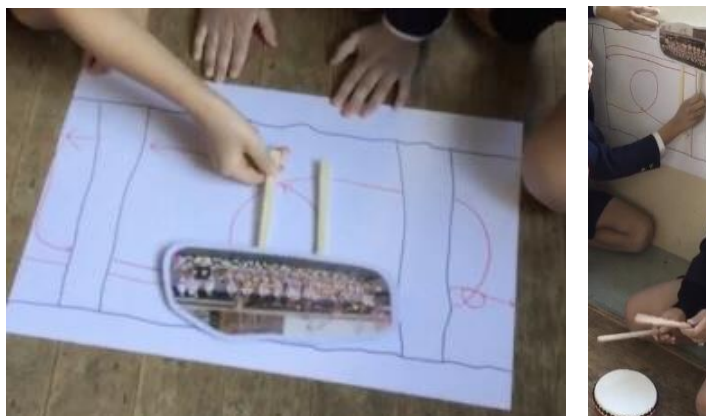
また、イメージに合わせた演奏表現を重ねる場においても、常に「漕ぎ手」と「打ち手」を設定することで、リズムパターンの特徴を身体を通して感じることができるようにした。「橋のところは、観覧している人が多いから、回転を何回もしよう」「回転のところは、見せ場だから、水しぶきがいっぱいあがるぐらい力強くこいで、音楽も、よりもりあげたいな」というようにイメージを豊かに膨らませていく姿がみられた。



川の様子を想起しながら演奏する

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

1年鑑賞におけるリズムパターンの違いを捉える学習経験を踏まえ、本時では、リズムパターンの変化に着目した活動とすることとした。「どんどん前に力強く進んでいる感じにしたいな」「見に行ったとき、橋のところで、ぐるぐる回っていた気がする。たくさん人がいるから見せ所だったんじゃないかな」という自らの生活経験とのつながりによる気づきを踏まえ、「前進（流し）」と「回転」という2つの船の進み方が連続性のあるものであることを意識し表現の工夫につなげていくことができるようにした。



オリジナル曳航図を考え、曳航図に合わせて演奏する

リズムパターンの変化を捉える場を踏まえ、再経験の場におけるイメージの共有では、曳航図を共に描くことで、イメージをより共有していくことができるようにした。これまでの学習経験や生活経験と関連付け、地域の立地を想起しながら、イメージを音楽表現に繋げていく姿がみられた。このように領域（1年鑑賞→4年器楽）を関連付け、系統的に単元構成し、さらには、これまでの他教科・領域における学習経験や生活経験と関連付くようにすることで、グループで、よりイメージを詳細に膨らませ、演奏につなげていくことができたと考える。

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

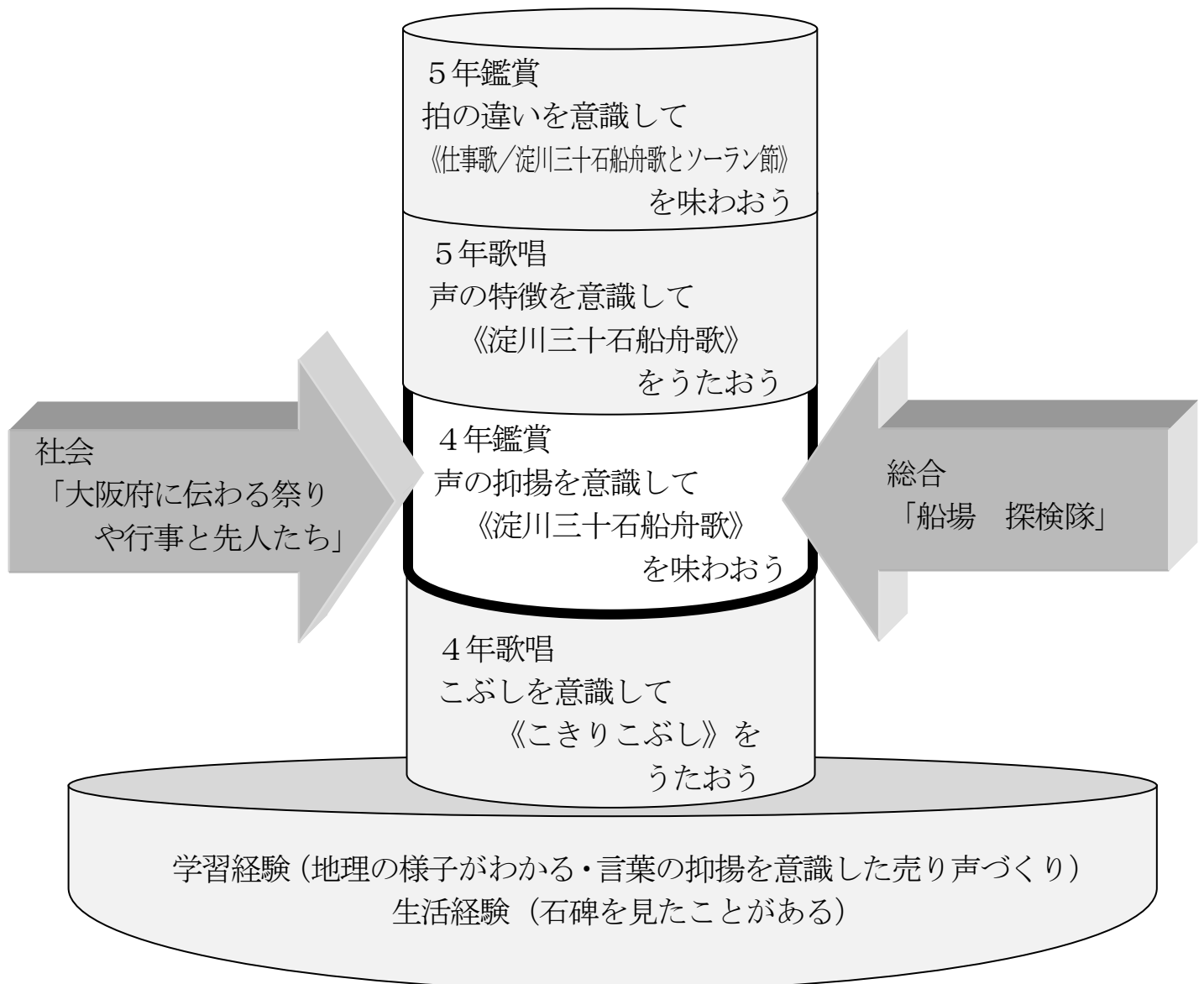
本実践では、主に社会科「大阪府に伝わる祭りや行事」の学習と関連した活動とした。社会科教材では、天神祭についての伝承されてきた人々の想いに迫る学習がある。このような天神祭に関わるさまざまな視点を持ち、改めて4年生において器楽演奏に取り組むことで、より文化的背景を捉え、現代における伝承されている意味を感じ、広い視野をもって新たな価値づけを行っていくことができるようにした。

4. (2) 第4学年 鑑賞「こぶしを意識して《淀川三十石船舟歌》を味わおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 ー生活・歴史と音楽とのかかわり ー舟歌 ・江戸時代、京都伏見と大坂八軒家 間の淀川舟運で活躍した三十石積 み 28 人乗りの乗合船であった淀 川三十石船で、船頭たちによって うたわれていた仕事歌（民謡）。	○言葉の抑揚 ・船を漕ぎながらうたう。 ○こぶし ・船を漕ぎながらうたう。	○音・言葉・動きのかかわり ー船を漕ぐ身体の動き ・音（うた）、言葉（うた 歌詞）、動き（船を漕ぐ） のかかわり
活動を通して 指導できる内容	・八軒家、大阪城、枚方、淀、伏見 など、船着場ごとのうたがあり、 船頭たちが息を合わせ漕ぐときに うたわれていたといわれている。	●言葉の抑揚 ・船を漕ぐ真似をしながら、 うたう。（歌唱、鑑賞） ●こぶし ・船を漕ぐ真似をしながら、 うたう。（歌唱、鑑賞）	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：声の抑揚
- 単元目標：○声の抑揚の特質を捉え、よさを味わう。
- ・声の抑揚を知覚することができる。(知識・技能)
 - ・声の抑揚の特質を感受し、楽曲の文化的背景と関連付け、声に抑揚があるうたい方のよさを考える。(思考・判断・表現)
 - ・声の抑揚に関心をもって、楽曲における声の抑揚のよさをとらえようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①声の特徴と伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、声の特徴「こぶし」「言葉の抑揚の変化」を捉えている。 ②こぶしをつけてうたったり、言葉の抑揚を変化させてうたったりするよさを意識してうたうことができる。	①仕事歌として伝承されてきたことを踏まえ、歌詞に込められた想いと声の特徴のつながりを考える。 ②歌詞に込められた想いや文化的背景と声の特徴のつながりを意識した表現の工夫を考える。	①こぶしをつけてうたったり、言葉の抑揚を変化させてうたったりするよさを感じ、共にうたい合う活動に主体的に取り組もうとしている。

活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	船漕ぎの疑似体験をしながら、《淀川三十石船舟歌》をうたう。			
1	◆《淀川三十石船舟歌》に興味をもたせる。	1. 《淀川三十石船舟歌》を聴き、気付いたことを交流する。	<ul style="list-style-type: none">●《淀川三十石船舟歌（大阪城船着場）》を提示し、「どのような感じがしたか」「どのような言葉が聴こえたか」など、気付いたことを交流する。●気付きの発言に合わせて、《淀川三十石船舟歌》に関する文化的背景を伝える。気付きに合わせ、疑似体験のための空間を創造する。		
《淀川三十石船舟歌》を味わおう					
	<ul style="list-style-type: none">◆文化的背景をとらえさせる。◆船漕ぎを疑似体験することで、船漕ぎと舟歌のつながりを体感させる。 （音楽【うた】・言葉【歌詞】・動き【船漕ぎ】が三位一体であることを体感させる）◆分析の場面の必要感をもたせる。	2 船漕ぎの疑似体験しながら《淀川三十石船舟歌》をうたう。	<ul style="list-style-type: none">●気付きを踏まえ、船漕ぎを疑似体験することで、身体で《淀川三十石船舟歌》の特質を感じることができるようにする。●気付きを踏まえ、さまざま教科・領域における学習と関連付けたり、伝承されてきた文化的背景と関連付けたりすることで、《淀川三十石船舟歌》が伝承されてきたさまざまな文化的背景を想起しながら体感していくことができるようにする。●うたをうたいながら船漕ぎの疑似体験をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。●船頭（《舟歌》をうたいながら漕ぐ）と乗客（三十石船に乗っている人）に分かれて疑似体験することで、伝承されてきた空間と体験空間を一致させ、より「音楽」「言葉」「動き」を三位一体として感じることができるようにする。●《淀川三十石船舟歌》を真似てうたうときに工夫したことを交流することで、声の特徴（こぶし）に気付くことができるようにする。（知覚）		

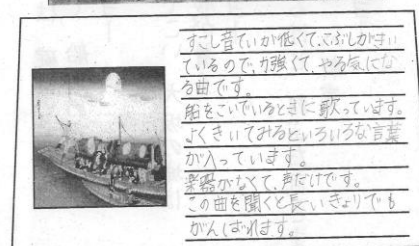
2	分析 《淀川三十石船舟歌》の声の特徴を捉える。			
	◆声の特徴の違いを知覚させる。	3.こぶしのついた《淀川三十石船舟歌》とこぶしのない《淀川三十石船舟歌》を聴き比べる。	●声の特徴（音楽）に対する気付きに合わせて、手で言葉の抑揚を捉える場を設定することで、こぶしに気付くことができるようにする。（知覚） ●こぶしのついた《淀川三十石船舟歌》とこぶしのない《淀川三十石船舟歌》の違いを知覚する場を踏まえ、2つの《淀川三十石船舟歌》の生み出す特質の違いを捉える。（感受） ●2つの《淀川三十石船舟歌》に合わせて、手を動かしたり（音楽：言葉の抑揚・こぶし）船漕ぎ（動き）をしたりすることで、より知覚・感受を深めることができるようにする。 ●声の抑揚がついた《淀川三十石船舟歌》と抑揚のない《淀川三十石船舟歌》の違いと、その感じの違いを、ワークシートにまとめる。 ●子どもたちの気付きに合わせて、適宜、気付きを言葉のみならず、音楽で共有することができるようにする。 ●実際の《淀川三十石船舟歌》を再提示することで、実際のうたと関連付けながら違いを捉えることができるようにする。 ●音楽用語「こぶし」を気付きに合わせて提示する。 ●経験の場における大阪城船着場の《淀川三十石船舟歌》における声の特徴を線や言葉で表し（知覚）、そこから感じる様子（特質）をワークシートにまとめ、交流する。	知識・技能① [ワークシート]
	◆声の特徴の違いによる特質を捉えさせる。			
	◆実際の《淀川三十石船舟歌》を構成する声の特徴に気付かせる。			
	◆再経験の場面の必要感をもたせる。	4.経験における《淀川三十石船舟歌》をふりかえり、声の特徴を捉える。		思考・判断・表現① [ワークシート]
	再経験 《淀川三十石船舟歌》の声の特徴を意識して、石碑にのせる紹介文をまとめる。			
2	◆さまざまな船着場の《淀川三十石船舟歌》をうたい、声の特徴を捉えさせる。	5.声の特徴（こぶし）を踏まえて、《淀川三十石船舟歌》のよさを伝える石碑の紹介文をまとめる	●うたいながら、船漕ぎをすることで、より声の特徴への知覚・感受を深めていくことができるようにする。 ●パフォーマンス課題「《淀川三十石船舟歌》をうたい、気付いたよさを石碑に加えよう」とし、実際にある石碑の一部に《淀川三十石船舟歌》のよさを掲載しようとする中で、生活とのつながり（現代への伝承）を感じるができるようにする。	思考・判断・表現② [ワークシート・活動の様子]
	評価 お互いの《淀川三十石船舟歌》を交流し、《淀川三十石船舟歌》における声の特徴をまとめる。			
	◆それぞれの感じた《淀川三十石船舟歌》のよさを共有させる。	6.互いの《淀川三十石船舟歌》紹介文を交流する。	●それぞれの紹介文を交流し、声の特徴をまとめる。	主体的に学習に取り組む態度① [紹介文]

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

子どもたちにとって、自分たちの生活する地域が、川に囲まれているということは、身近な地形の特徴である。また、本年度より体育で使用する第2運動場横に淀川三十石船舟歌の石碑があることには気付いていた。しかし、「石碑にどのようなことが書かれているか」「どのような音楽なのか」に出合う機会はなかなかなかった。本実践では、音楽科の授業時間のみならず、これまでの生活経験（八軒家浜にある2つの石碑）を写真から想起する場、想起の場を踏まえ実際に訪れる場を設定することで、実生活とのつながりを感じ、より主体的に学びに向かうことができるようにした。

3. 南天満公園には、淀川三十石船舟歌の石碑があります。
石碑に、「音楽の持ちようをしようか」という部分をつけたいと思います。
石碑を見た人が「どんな音楽が知りたい」と思うようなうたい文にしましょう。



石碑に紹介文を加える

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

本実践につながる学習として、1年生音楽づくり「言葉の抑揚を意識して《売り声》をつくろう」では、「言葉の抑揚」に着目することで、地域で用いられる言葉、地域の文化的背景がその音楽を形づくってきたことに気付くことができた。2年歌唱「はねるリズムを意識して《船場通り名うた》をうたおう」では、船場の地形・歴史にもとづくうたのよさを感じ、主体的にうたい合ってきた。前単元において、日本に伝わる民謡《こきりこ》のこぶしに着目し、歌唱と器楽を関連させた活動とすることで、民謡の謡いのよさを感じていた。

また、これまでの天神祭にまつわる学習において、大阪の川に囲まれた地形、身近な川で行われる祭りのよさを感じ、地形を意識した音楽表現にも取り組んできていた。《教材》を系統的に積み上げ、さらには活動経験の系統性を意識した単元配列をしたことで、より文化的背景と関連付けこぶしについて詳細に捉えていくことができたと考える。

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

本実践では、主に社会科「大阪府に伝わる祭りや行事」の学習と関連した活動とした。社会科教材では、天神祭などと合わせ、淀川三十石船についての記載もされている。ここでは、これまでの社会科における学習と関連付け、淀川三十石船の役割や現代にどのように伝承されてきたのが掲載されているが、船場とのつながりについては書かれていない。そこで、《淀川三十石船舟歌》は、子どもたちの生活する地域にもつながりがあることに気付かせることで、より主体的な学びを教科・領域を超えて進めていくことができると考えた。

ワークシート

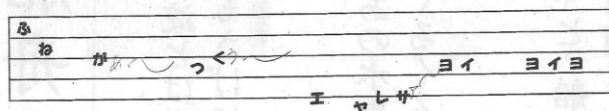
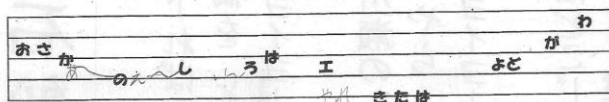
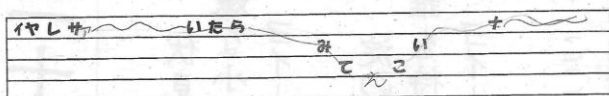
第1時 ワークシート

声のとくちょうをいきて《仕事歌》を味わおう

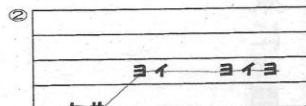
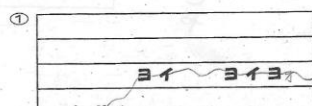
1. 「淀川三十石船舟歌」の 声(うたいかた)のとくちょうをみつけよう。

【うたいかたのとくちょうを見つけるコツ】

声をのびているときに、強めにうたわれている母音(カタカナ)をかきこむと動きをつかみやすいです。



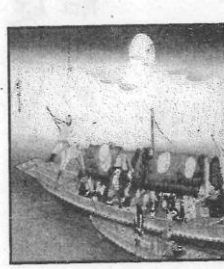
2. ききくらべよう。



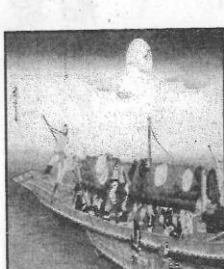
気持ちかきこもって、
強くこいでいる感じがした。

気持ちかきこもってない、
弱くこいでいる感じがした。

第2時 パフォーマンス課題



こぶしがきいてくるので昔に
かいて、声が低くなったり高くな
りして、低くなったり高くな
ると力がこもって、船がはやく
すすむかんの声かとくちょう
です。船をこぎながら歌うと大
阪のことかきこえる感じがする
矢張り、大阪にきた人も
聞くと大阪のことが矢張り、



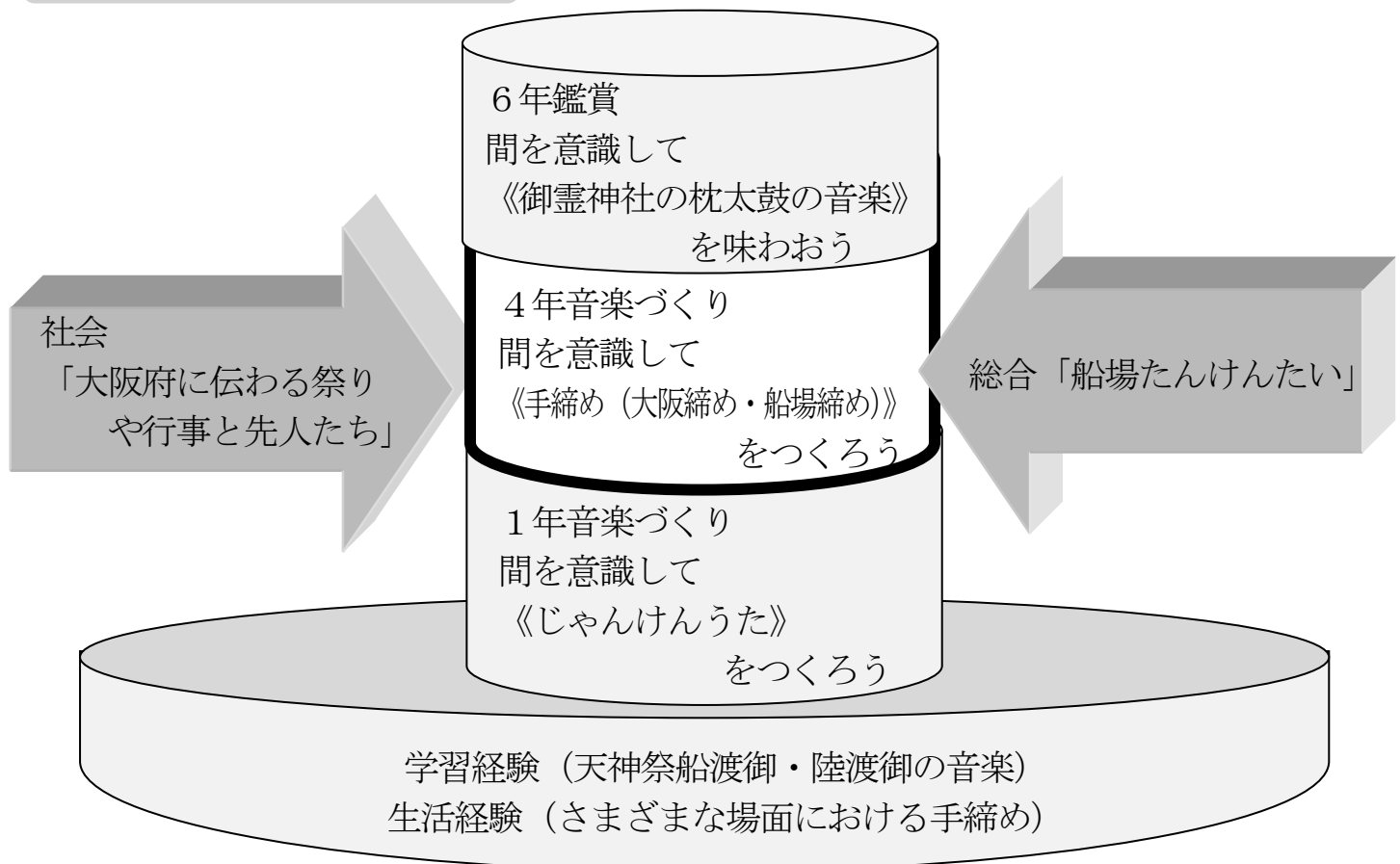
淀川三十石船舟歌は、こ
ぶしの上がり下がりかきこ
えてのは、しているときにう
すちかき言葉かきこえている
ところがはかきこえます。
聞いているとまねしたくな
ります。こぶしの上がり下がり
があるから、仕事に気合
いかきこえます。きいてみて、

4. (3) 第4学年 音楽づくり「間を意識して《手締め（大阪締め・船場締め）》をつくろう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と想定されるもの	<p>○風土・生活・文化・歴史</p> <p>ー生活・歴史と音楽とのかかわり</p> <p>ー手締め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏に行われる天神祭は、子どもたちにとって生活の一部となっている地域の祭りである。 ・《手締め》は、日本の風習の一つで、物事が無事に終わったことを祝って、掛け声とともにリズムを合わせて打つ手拍子、手打ちである。現代において、祭りや冠婚葬祭などの式典、商談や株主総会などの終わりに行われている。 	<p>○間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の間に手打ちをすることで、手締めが構成されている。 <p>○言葉の抑揚</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉に抑揚をつけ、手締めの言葉がうたわれる。 <p>○締めくくりや始まりの音楽</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天神祭どんどこ船のお囃子のはじめと終わりに行われる。 	<p>○音・言葉・動きのかかわり</p> <p>ー踊りや舞による身体の動き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音（手打ち）、言葉（掛け声）、動き（手打ちの動き）のかかわり
活動を通して指導できる内容	<ul style="list-style-type: none"> ・日本各地、さまざまな《手締め》が伝承されてきているが、同じ《大阪締め》でも地域によって異なる。天神祭では、船渡御において船が行き交う際や、どんどこ船曳航の始まりと終わりに「打ちま〜ひょ（パンパン）もひとつせ（パンパン）祝うて三度（パンパン パン）」という《手締め》が伝承されてきている。また、同じ言葉で、船場では《船場締め》として「打ちま〜ひょ（パンパン）もひとつせ（パンパン）祝うて三度（パンパンパン）」という間の異なる《手締め》が伝承されてきている。 	<p>○さまざまな身体の音色(手の音色)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手の打ち方により音色が異なる。 	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：間
- 単元目標：○間の特質を捉え、イメージに合わせた表現の工夫を重ね、うたづくりをしている。
- ・間を知覚し、間を意識して表現している。(知識・技能)
 - ・間の特質を感受し、イメージに合わせて表現の工夫をしている。(思考・判断・表現)
 - ・間に関心をもって、主体的に表現しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①間を理解している。 ②間を意識してうたっている。	①間の特質を感受している。 ②イメージに合わせた間の表現の工夫を考えている。	①間に関心をもち、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	天神祭どんどこ船において行われる《大阪締め》を知り疑似体験をする。			
1	◆《大阪締め》に興味をもたせる。	1.天神祭船渡御において行われる《大阪締め》の様子をみて、気付いたことを交流する。	●夏の天神祭船渡御「どんどこ船曳航」の映像を提示する。 →学習経験のある《どんどこ船お囃子》の前後に着目させる。		
《手締め》をつくろう					
	◆文化的背景をとらえさせる。 ◆さまざまな場面における《大阪締め》を疑似体験することで、間を体感させる。 (言葉【掛け声】・音楽【手打ち】・動き【手打ちの動き】が三位一体であることを体感させる) ◆分析の場面の必要感を持たせる。	2.映像に合わせて、さまざまな場面における《大阪締め》や《船場締め》を疑似体験する。	●気付きの発言に合わせて、《手締め》に関する文化的背景を伝える。気付きに合わせ、疑似体験のための空間（どんどこ船のお囃子を演奏する、船渡御を想起できる空間）を創造する。 →船渡御の向かい合う場面の想起においては、実際に向かい合って《大阪締め》を疑似体験することで、より文化的背景を捉えることができるようにする。 ●①どんどこ船曳航のはじまり、②どんどこ船曳航の終わり、③船渡御の行き交う場면을提示しながら疑似体験をすることで、さまざまな場面でどのような気持ちで《大阪締め》が行われているのか意識しながら、身体で《大阪締め》の特質を感じることができるようにする。 ●掛け声を一緒に唱え、身体の動きも模倣しながら疑似体験をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●提示映像と疑似体験空間を一致させることで、より「手打ち（音楽）」「手打ちの動き（動き）」「掛け声（言葉）」を三位一体として感じることができるようにする。 ●船渡御以外にも、さまざまな場面における《大阪締め》を疑似体験することで、《手締め》が行われる意味を感じることができるようにする。 ●疑似体験の中で、同じ《手締め》でも言葉は同じで間のみが異なる《大阪締め》と《船場締め》を提示することで、2つの音楽の違いに気付くことができるようにする。（知覚）		

分析		2種類の《手締め》(同じ言葉でも間の異なる《大阪締め》と《船場締め》)を聴き比べ、間の特質を捉える。			
◆間の違いを知覚させる。	◆間の違いによる特質を捉えさせる。	◆間と文化的背景のつながりを再確認する。	3. 2種類の《手締め》(同じ言葉でも間の異なる《大阪締め》と《船場締め》)を聴き比べる。 4. 間の違いによる特質を捉える。 5. 経験における《大阪締め》の疑似体験をふりかえり、文化的背景を踏まえた間の特質に気付く。	● 2つの《手締め》の違いを知覚する場を踏まえ、間の生み出す特質の違いを捉える。(感受) ● 2つの《手締め》に合わせて疑似体験をすることで、身体を通して、より違いを捉えることができるようにする。 ● 間の違いを捉えることができるように、「間のある《大阪締め》(パパン・パン)」と「間のない《船場締め》(パンパンパン)」を比較聴取する場を設定する。 ● 言葉の間・手打ちの間を視覚的に提示することで、間の違いを捉えることができるようにする。 ● 子どもたちの気付きに合わせて、適宜、気付きを言葉のみならず、音楽で共有することができるようにする。 ● 2つの《締め》に合わせて疑似体験をしながら聴き比べる場を設定することで、身体を通して、違いをより捉えることができるようにする。 ● 音楽用語「間」を気付きに合わせて提示する。 ● 実際の映像をふりかえることで、実際の天神祭における「間」がどちらかを捉えることができるようにする。	知識・技能 ① 【ワークシート】 思考・判断・表現 ① 【ワークシート】
再経験		間を意識して、オリジナルの《手締め》を考える。			
◆間を意識して、オリジナルの《手締め》を考えさせる。	◆適宜、《手締め》を交流させる。	6. 間を意識して、オリジナル《手締め》づくりを行う。	● 《手締め》は、「手打ちによって締める」が語源であること、行事を取り仕切った者が行事や祭りが無事に終了したことを協力者に感謝する気持ちを込めたり、行事を無事行えることへの喜びの気持ちを込めたりして行われるものであることを伝え、この年末を締めくくるオリジナルの《手締め》を考えることができるようにする。また、手締めが祭りの初めに使われていることも取り上げ、年始を迎えるにふさわしいオリジナルの《手締め》を考えるよう声掛けする。 ● 《大阪締め》だけでなく、《一本締め》《三本締め》などさまざまな手締めに提示することで、オリジナル《手締め》のイメージを豊かにもつことができるようにする。 ● パフォーマンス課題『いろいろなことがあった令和2年度。みんなのがんばりをたたえ、新たな年明けをお祝いする《手締め》を考えよう』とすることで、創作の目的、共に行う相手意識を明確にもって活動することができるようにする。 ● それぞれのグループの《手締め》を適宜取り上げ、間の活かし方、その間や言葉と連動した動きの根拠を交流することで、身体的同調をうむことができるようにする。	思考・判断・表現 ② 【活動の様子】 主体的な態度 ① 【活動の様子】	
評価		お互いの《手締め》を交流し、《手締め》のよさをまとめる。			
◆互いの《手締め》を交流し、間の特質を捉えさせる。	7. 互いの《手締め》を交流する。	● お互いの《手締め》を交流し、《手締め》における間のよさをまとめる。 ● 「間」という語を使って、自分たちの《手締め》を紹介する文をまとめる。	知識・技能 ② 【演奏】		

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

さまざまな場面における《手締め》と出会うことができるようにすることで、どのような場面において《手締め》が行われているのかを捉えることができるようにした。導入においては、《大阪締め》に限定し、「天神祭における《大阪締め》」「大阪取引所における《大阪締め》」「(船場を舞台にした)ドラマにおける《大阪締め》」など、子どもたちにとって、身近な場面において《手締め》が行われている場面を映像提示することで、より生活とのつながりを感じることができるようにした。

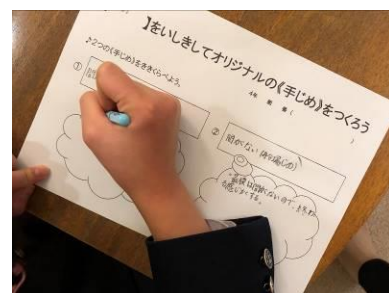


生活経験・学習経験を想起させる教材提示

さまざまな《大阪締め》を疑似体験する中で、同じ言葉（掛け声）であるが間が異なる《船場締め》を提示することで、間に自然に着目し、文化的背景と関連付け、特質を捉えていくことができるようにした。

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

子どもたちにとって、「間」は、日本に伝承される音楽にとって多くの場面において音楽を構成する要素であるが、意識をして音楽を演奏するには至っていなかった。そこで、身近な《大阪締め》と《船場締め》を教材とすることで、自然に「間」に着目していくことができるようにした。同じ言葉であり、大阪では主に《大阪締め》が行われ、船場においてのみ《船場締め》が今も残っていることを知り、現代における《手締め》の意味を改めて価値付けていくことができるように、オリジナル《手締め》づくりの場を設定することとした。



間の異なる《手締め》の比較

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

本実践では、主に社会科「大阪府に伝わる祭りや行事」の学習と関連した活動とした。社会科教材では、天神祭について、祭りに関わるさまざまな人々の想いや、どのように伝承されてきたのかなど、天神祭に込められた想いに迫る学習が設定されている。そこで、天神祭を起点として《大阪締め》を取り上げることで、子どもたちの生活する地域とのつながりを感じ、より主体的な学びを教科・領域を超えて進めていくことができると考えた。



身体の動きを伴いながら考える姿

ワークシート

第1時 比較聴取ワークシート

♪2つの《手じめ》をきくらべよう。

① 間がある
〈大阪じめ〉

・楽しい感じがする
からこれから楽しく健
でいてくれたせいとねが
うときにふさわしい。
・間のあとは強く打た
れる。

いい終わりだねと
思ってたんだけど

② 間がない
〈船場じめ〉

・間がないから神社
でおいのりするとき
にいたからいっている
みたい。
・力強くつたえる感じ。

♪2つの《手じめ》をきくらべよう。

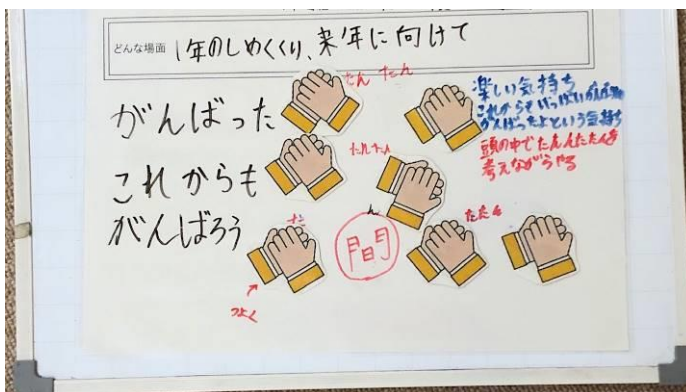
① 間がある。(大阪じめ)

・がんばってくださった
せい。
・間があるから、くいな
んじ。
・間があるから、めたり
かんじた。
・気持ちがもってほ
かえり。

② 間がない。(船場じめ)

・がんばってくださった
せい。
・間がないから、はやく
かんじた。
・間がないから、元
々かんじ。
・いねがえりがある。

第2時 ペアによる音楽づくりワークシート



間をいしきて オリジナルの《手じめ》をつくろう

いろいろなできごとがあった
令和2年。みんなのがんばりを
たたえ、新たな年をいわい、新
たな気合いを入れることがで
きるような《手じめ》をつくろう。

《大阪じめ》

うちま〜しよ
もひとつせ
いおうてさんど

きっちりしめくる感じ
楽しい気持ち
をつたえる

間を合わせて
さいごの手打ちを合わせ、息を合わせ

《手じめ》

物事の終わりをしめくる

1年のほじまりをいわう

感謝を伝え、健康をいける

1年をしめくる

おたがいをたたえる

よるこびをわかち合う

船がいきかいあいさつ

勝利をいわう

感謝をつたえる

商売はんじょうを願う

第5学年

実践報告

(1) 歌唱

「声の特徴を意識して《淀川三十石船舟歌》をうたおう」

(2) 音楽づくり

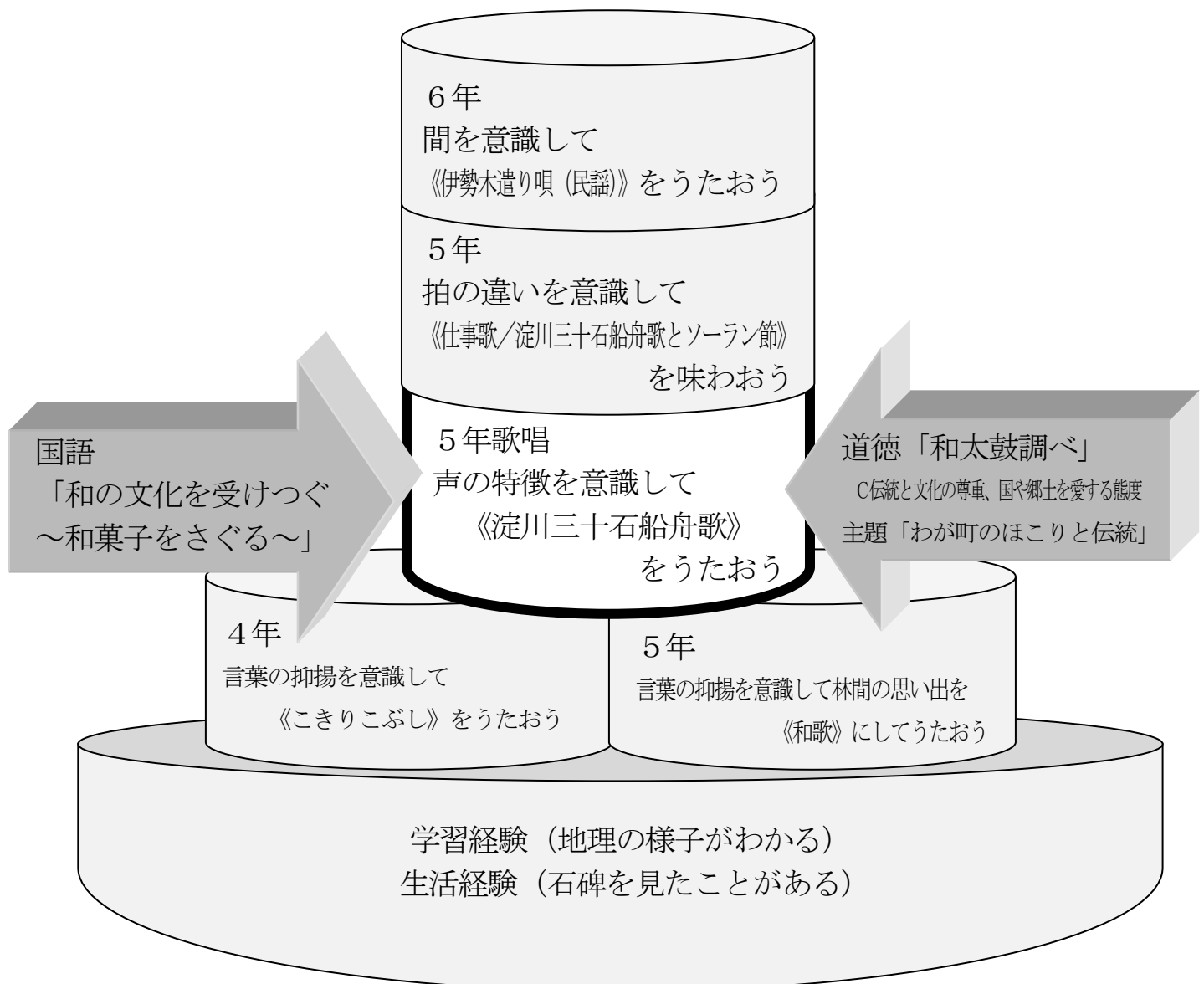
「声の抑揚を意識して《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》の続きをつくろう」

5. (1) 第5学年 歌唱「声の特徴を意識して《淀川三十石船舟歌》をうたおう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 ー生活・歴史と音楽とのかかわり ー舟歌 ・江戸時代、京都伏見と大坂八軒家 間の淀川舟運で活躍した三十石積 み 28 人乗りの乗合船であった淀 川三十石船で、船頭たちによって うたわれていた仕事歌（民謡）。	○言葉の抑揚 ・船を漕ぎながらうたう。 ○こぶし ・船を漕ぎながらうたう。	○音・言葉・動きのかかわり ー船を漕ぐ身体の動き ・音（うた）、言葉（うた 歌詞）、動き（船を漕ぐ） のかかわり
活動を通して 指導できる内容	・八軒家、大阪城、枚方、淀、伏見 など、船着場ごとのうたがあり、 船頭たちが息を合わせ漕ぐときに うたわれていたといわれている。	●言葉の抑揚 ・船を漕ぐまねをしながら、 うたう。（歌唱、鑑賞） ●こぶし ・船を漕ぐまねをしながら、 うたう。（歌唱、鑑賞）	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：声の特徴（声の抑揚・こぶし など）
- 単元目標：○声の特徴（言葉の抑揚・こぶし）の特質を捉え、よさを感じながら演奏する。
- ・声の特徴を知覚し、声の特徴を意識して表現できる。（知識・技能）
 - ・声の特徴の特質を感受し、イメージに合わせて表現の工夫をしている。（思考・判断・表現）
 - ・声の特徴に関心をもって、意欲的に表現をしようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①声の特徴と伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、声の特徴「こぶし」「言葉の抑揚の変化」を捉えている。 ②こぶしをつけてうたったり、言葉の抑揚を変化させてうたったりするよさを意識してうたうことができる。	①仕事歌として伝承されてきたことをふまえ、歌詞に込められた想いと声の特徴のつながりを考える。 ②歌詞に込められた想いや文化的背景と声の特徴のつながりを意識した表現の工夫を考える。	①こぶしをつけてうたったり、言葉の抑揚を変化させてうたったりするよさを感じ、共にうたい合う活動に主体的に取り組もうとしている。

活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	船漕ぎの疑似体験をしながら、《淀川三十石船舟歌》をうたう。			
1	◆《淀川三十石船舟歌》に興味をもたせる。	1. 《淀川三十石船舟歌》を聴き、気付いたことを交流する。	●《淀川三十石船舟歌（大阪城船着場）》を提示し、「どのような感じがしたか」「どのような言葉が聴こえたか」など、気付いたことを交流する。 ●気付きの発言に合わせて、《淀川三十石船舟歌》に関する文化的背景を伝える。気付きに合わせ、疑似体験のための空間を創造する。		
《淀川三十石船舟歌》をうたおう					
2	◆文化的背景をとらえさせる。 ◆船漕ぎを疑似体験することで、船漕ぎと舟歌のつながりを体感させる。 （音楽【うた】・言葉【歌詞】・動き【船漕ぎ】が三位一体であることを体感させる）	2 船漕ぎの疑似体験しながら《淀川三十石船舟歌》をうたう。	●気付きを踏まえ、船漕ぎを疑似体験することで、身体で《淀川三十石船舟歌》の特質を感じることができるようになる。 ●気付きを踏まえ、他教科・領域における学習と関連付けたり、伝承されてきた文化的背景と関連付けたりすることで、《淀川三十石船舟歌》が伝承されてきたさまざまな文化的背景を想起しながら体感していくことができるようになる。 ●うたをうたいながら船漕ぎの疑似体験をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようになる。 ●船頭（《舟歌》をうたいながら漕ぐ）と乗客（三十石船に乗っている人）に分かれて疑似体験することで、伝承されてきた空間と体験空間を一致させ、より「音楽」「言葉」「動き」を三位一体として感じるができるようになる。 ●《淀川三十石船舟歌》をまねてうたうときに工夫したことを交流することで、声の特徴に気付くことができるようになる。（知覚）		

分析		《淀川三十石船舟歌》の声の特徴を捉える。		
3	◆声の特徴の違いを知覚させる。	3.声の抑揚がついた《淀川三十石船舟歌》と抑揚のない《淀川三十石船舟歌》を聴き比べる。	<ul style="list-style-type: none"> ●声の特徴（音楽）に対する気付きに合わせて、手で言葉の抑揚を捉える場を設定することで、声の特徴（言葉の抑揚・こぶしなど）に気付くことができるようにする。（知覚） ●声の抑揚がついた《淀川三十石船舟歌》と抑揚のない《淀川三十石船舟歌》の違いを知覚する場を踏まえ、2つの《淀川三十石船舟歌》の生み出す特質の違いを捉える。（感受） ●2つの《淀川三十石船舟歌》に合わせて、手を動かしたり（音楽：言葉の抑揚・こぶし）船漕ぎ（動き）をしたりすることで、より知覚・感受を深めることができるようにする。 ●声の抑揚がついた《淀川三十石船舟歌》と抑揚のない《淀川三十石船舟歌》の違いと、その感じの違いを、ワークシートにまとめる。 ●子どもたちの気付きに合わせて、適宜、気付きを言葉のみならず、音楽で共有することができるようにする。 ●実際の《淀川三十石船舟歌》を再提示することで、実際のうたと関連付けながら違いを捉えることができるようにする。 ●音楽用語「言葉の抑揚・こぶし」を気付きに合わせて提示する。 ●経験の場における大阪城船着場の《淀川三十石船舟歌》における声の特徴を線や言葉で表し（知覚）、そこから感じる様子（特質）をワークシートにまとめ、交流する。 	知識・技能① 【ワークシート】
	◆声の特徴の違いによる特質を捉えさせる。			
3	◆実際の《淀川三十石船舟歌》を構成する声の特徴に気付かせる。	4.経験における《淀川三十石船舟歌》をふりかえり、声の特徴を捉える。		思考・判断・表現① 【ワークシート】
	◆再経験の場面の必要感をもたせる。			
再経験		さまざまな船着場における《淀川三十石船舟歌》の声の特徴を意識してうたう。		
3	◆さまざま船着場の《淀川三十石船舟歌》をうたい、声の特徴を捉えさせる。	5.声の特徴を意識して、さまざまな船着場の《淀川三十石船舟歌》をうたう。	<ul style="list-style-type: none"> ●「八軒家浜」「枚方」「鍵屋浦」「淀」「伏見」の5つの船着場の《淀川三十石船舟歌》を提示し、グループに分かれて、声の特徴を捉えてうたうことができるようにする。 ●ペア（1つの船着場ごとに4ペア）に1台タブレット端末を渡し、声の特徴を捉える。（線で抑揚・こぶしを表す） ●声の特徴を捉える際には、必ず、うたいながら捉えることができるようにする。 ●同じ船着場のグループ（4人グループ）で、みつけた声の特徴を交流することで、より声の特徴への知覚・感受を深めることができるようにする。 ●4人グループで声の特徴を意識しながら、《淀川三十石船舟歌》をうたう。 ●タブレット端末に、自分たちのうたう《淀川三十石船舟歌》を記録することで、適宜、客観的に歌唱の様子をふりかえり、音楽表現を高めていくことができるようにする。 ●うたいながら、船漕ぎをすることで、より声の特徴への知覚・感受を表現の工夫につなげていくことができるようにする。 ●同じ船着場のグループ同士（各船着場4名グループが2つ）で、お互いのうたい方を交流することで、よりうたい方の工夫を重ね、演奏につなげていくことができるようにする。 ●お互いのうたを聴き合う際には、船漕ぎを体験し合うことで、より知覚・感受を深め、演奏につなげていくことができるようにする。 	思考・判断・表現② 【ワークシート・活動の様子】
	◆より声の特徴を意識したうたいにつなげることができるようにさせる。	6.声の特徴を意識した《淀川三十石船舟歌》のうたい方の工夫を考え、うたう。		

評価	お互いの《淀川三十石船舟歌》を交流し、《淀川三十石船舟歌》における声の特徴をまとめる。		
◆声の特徴を意識した《淀川三十石船舟歌》のうたい方を捉えさせる。	7.互いの《淀川三十石船舟歌》を交流する。	●それぞれの船着場のうたを交流し、声の特徴をまとめる。	知識・技能② 【鑑賞】 主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子・紹介文】
◆それぞれの感じた《淀川三十石船舟歌》のよさを共有させる。	8. 声の特徴を踏まえ、《淀川三十石船舟歌》のよさを紹介する文にまとめる。	●パフォーマンス課題「《淀川三十石船舟歌》をうたい気付いたよさを、石碑に加えよう」とし、実際にある石碑の一部に《淀川三十石船舟歌》のよさを掲載しようとする中で、生活とのつながり（現代への伝承）を感じることができるようにする。	

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

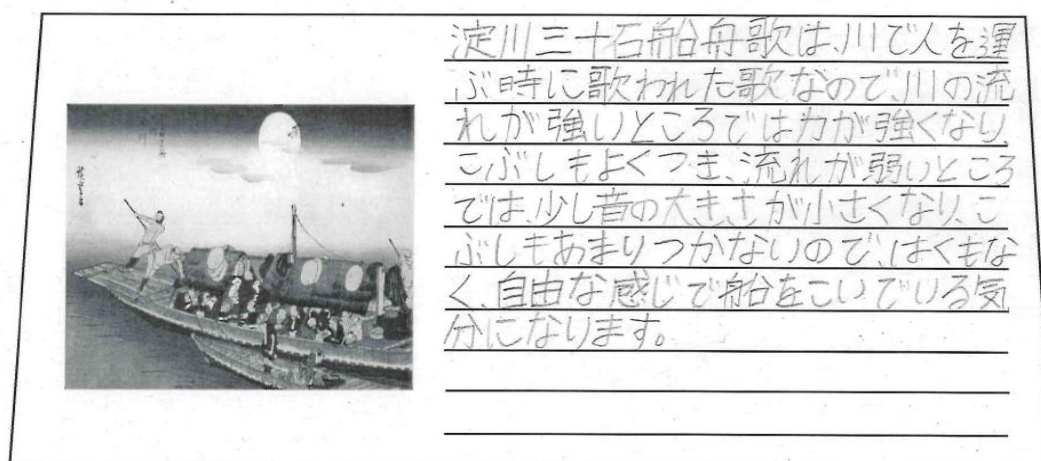
児童にとって、自分たちの生活する地域が、川に囲まれているということは、身近な地形の特徴である。また、本年度より体育で使用する第2運動場横に淀川三十石船舟歌の石碑があることには気付いていた。しかし、「石碑にどのようなことが書かれているか」「どのような音楽なのか」に出合う機会はなかなかなかった。

本実践では、音楽科の授業時間のみならず、これまでの生活経験（八軒家浜にある2つの石碑）を写真から想起する場と、想起の場を踏まえ実際に訪れる場を設定することで、実生活とのつながりを感じ、より主体的に学びに向かうことができるようにした。

また、単元を通して、パフォーマンス課題「《淀川三十石船舟歌》をうたい、気付いたよさを石碑に加えよう」を意識した活動とすることで、実生活とのつながりの中で学びの必然性を感じることができるようにした。実際にある石碑の一部に《淀川三十石船舟歌》のよさを掲載しようとする中で、自分たちが現代における伝承の一手を担うという意識をもって活動を深めることができた。



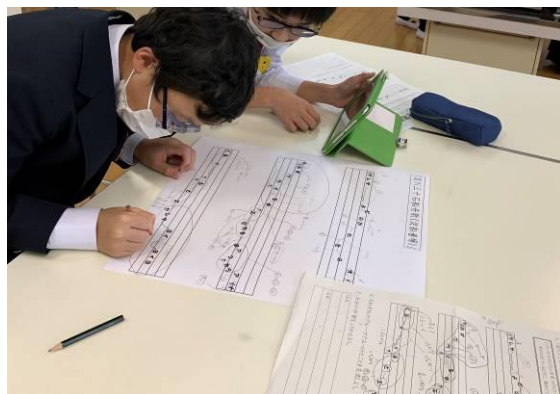
石碑の見学



パフォーマンス課題「《淀川三十石船舟歌》をうたい、気付いたよさを石碑に加えよう」

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

本実践につながる学習として、1年生音楽づくり「言葉の抑揚を意識して《売り声》をつくろう」では、「言葉の抑揚」に着目することで、地域で用いられる言葉、地域の文化的背景がその音楽を形づくってきたことに気付くことができた。2年歌唱「はねるリズムを意識して《船場通り名うた》をうたおう」では、船場の地形・歴史にもとづくうたのよさを感じ、主体的にうたい合ってきた。また、1年鑑賞・4年器楽における《天神祭どんどこ船お囃子》を教材とした学習では、大阪の川に囲まれた地形、身近な川で行われる祭りのよさを感じ、地形を意識した音楽表現にも取り組んできていた。さらに、4年生では、日本に伝わる民謡《こきりこ》のこぶしに着目し、歌唱と器楽を関連させた活動とすることで、民謡の謡いのよさを見出していた。このような学習を踏まえ、前単元「言葉の抑揚を意識して林間の思い出を《和歌》にしてうたおう」では、林間学習の感動を日本の音楽において用いられる五七調で、感情に合わせた言葉の抑揚をつけうたうことができた。このような「指導内容」の系統性のみならず、《教材》の系統的な積み上げ、さらには地形などの地域に関連する他要素を取り入れた活動経験の系統性を意識した単元配列とすることで、より文化的背景と関連付け、声の特徴（言葉の抑揚・こぶし）の変化を詳細に捉えていくことができたと考える。



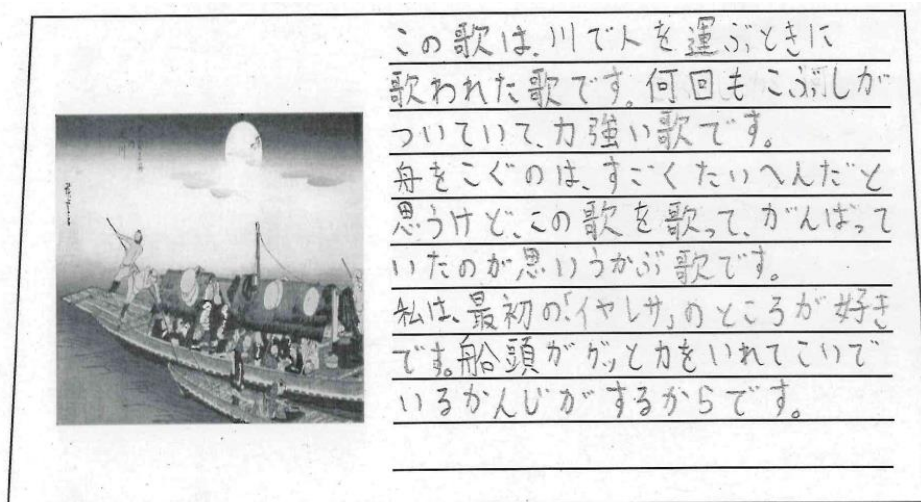
声の特徴をより詳細に捉える姿

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

本実践では、主に国語科・道徳における学習との関連を意識した活動展開とした。

国語科「和の文化を受けつぐ～和菓子をさぐる～」では、単元末において、自らの興味・関心にもとづいた和の文化の紹介を書く活動に取り組む。そこで、本実践と関連付けることで、身近な和の文化のよさを自らの経験を踏まえ、実感をもった紹介としていくことができるようにした。自らの経験を踏まえたことで、紹介文では、自分の考えをより具体例を挙げながら述べていくことができた。また、子どもたちの読書活動において、課題図書「こんぴら狗」に淀川三十石船が登場することに、子どもたち自身が興味・関心を高くもち、互いに本を読み合う姿もみられた。

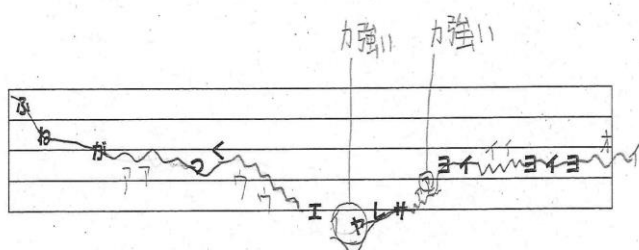
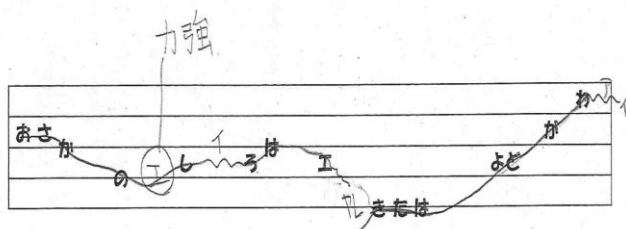
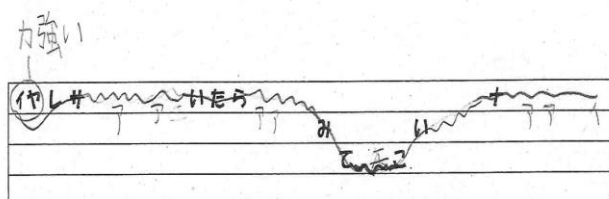
また、道徳「和太鼓調べ」と関連付けたことで、道徳の主題であった「わが町のほこりと伝統（伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度）」についても、より考えを深め、パフォーマンス課題における石碑の紹介文では、自らが感じた《淀川三十石船舟歌》の価値を述べていく姿がみられた。



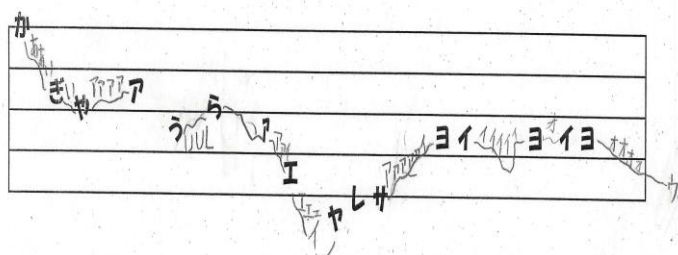
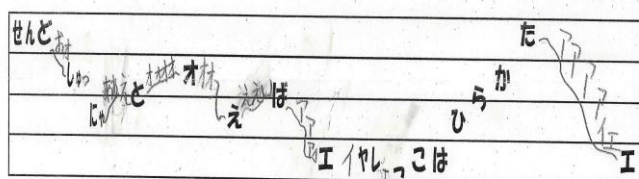
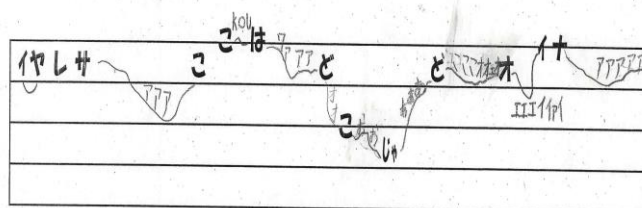
他教科・領域のつながりを捉えた紹介文

ワークシート

第1時 ワークシート

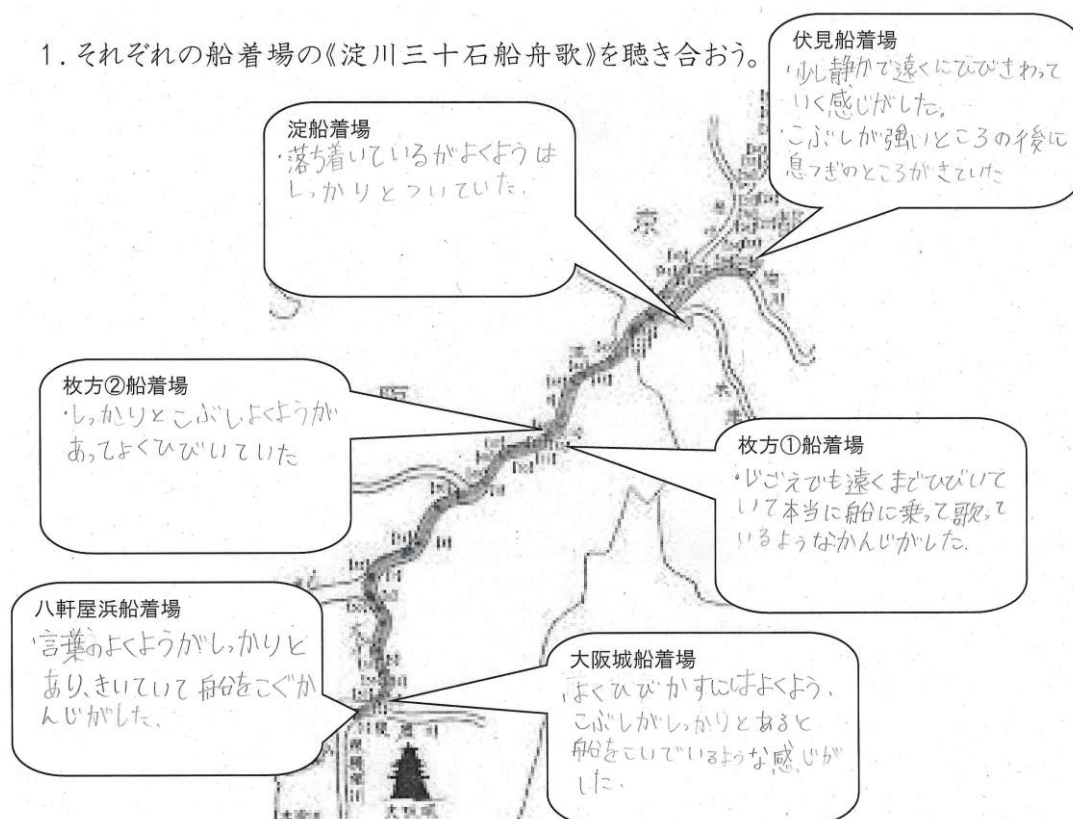


第2時 グループワークシート



第3時 相互交流ワークシート

1. それぞれの船着場の《淀川三十石船舟歌》を聴き合おう。

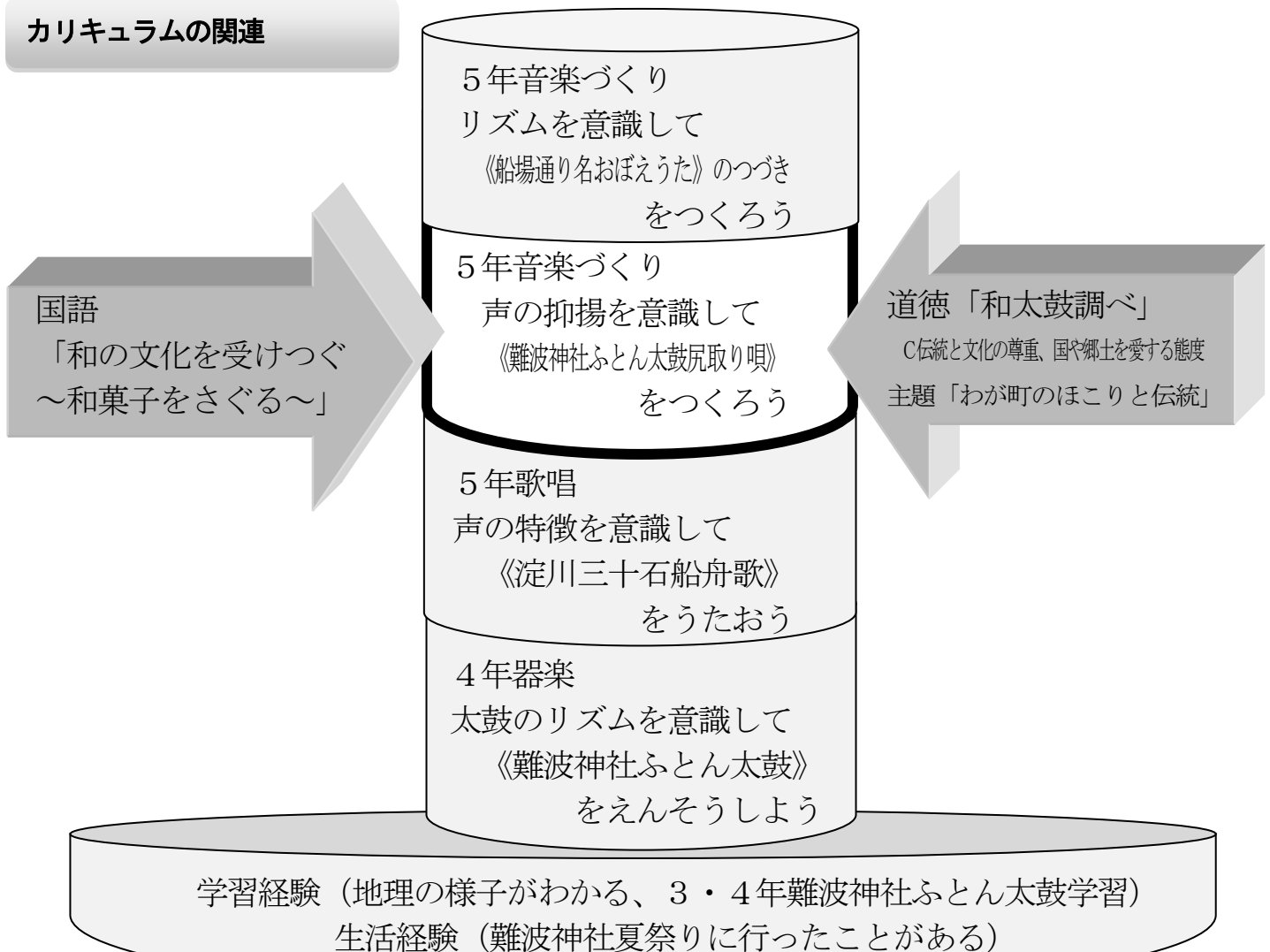


5. (2) 第5学年 音楽づくり「言葉の抑揚を意識して《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》をつくろう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	○風土・生活・文化・歴史 -地域の行事と音楽とのかかわり -地元の尻取り唄（ふとん太鼓尻取り唄） ・難波神社のふとん太鼓のお囃子では、太鼓を打つリズムに合わせて、太鼓台の担ぎ手たちが太鼓台を揺らしながら足並みを揃えて練り歩いたといわれている。その揺れの動きに重ねてふとん太鼓囃子唄が歌われた ・現在、難波神社では、このようなふとん太鼓の曳行は行われなくなったが、堺市百舌鳥八幡宮月見祭には、今も布団太鼓お囃子として伝承されている。明治後期ごろから、他の神社の夏祭りで大人も子どもも唱和するようになったと言われている。蒲団太鼓がくりだされるときには、囃子唄（尻取り唄）を必ずうたい囃したといわれている。	○尻取り唄の抑揚 ・太鼓のリズムに合わせて言葉の抑揚に合わせて尻取り唄をうたう。 ○太鼓のリズム ・ふとん太鼓のリズムに合わせ、太鼓台が練り歩く。 ○太鼓のリズムと囃子唄の重なり ・太鼓のリズムに合わせ、囃子唄を重ねる。	○音・言葉・動き -音・言葉・動きのかかわり -囃子唄と太鼓のリズムと動き（動きをふとん太鼓曳行）
活動を通して 指導できる内容		●拍の流れ	

カリキュラムの関連



実践の概要

□指導内容：声の抑揚

□単元目標：○声の抑揚を捉え、ふとん太鼓のリズムとのつながりを意識し《尻取り唄》の続きをつくる。

- ・声の抑揚を知覚することができる。(知識・技能)
- ・声の抑揚による特質を感受し、ふとん太鼓のリズムとのつながりを意識して《尻取り唄》の続きを考える。(思考・判断・表現)
- ・声の抑揚に関心をもって、夏祭りふとん太鼓における尻取り唄のよさをとらえようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

□ 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①声の抑揚を理解し、声の抑揚を意識して《尻取り唄》をうたう。 ②声の抑揚を意識してオリジナル《尻取り唄》をうたう。	①ふとん太鼓に合わせて演奏される声の抑揚の特質を感受している。 ②声の抑揚による特質をふまえ、ふとん太鼓のリズムとのつながりを意識して《尻取り唄》の続きを考える。	①声の抑揚を意識して、主体的に尻取り唄をうたったり、つくったりし、取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい 経験	子どもの活動	指導者の活動	評価
	《難波神社ふとん太鼓》と同じように生まれ現代にも伝承され続けている《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓》(宮入)を聴き、気付いたことを交流し、《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のつづきをつくる。			
1	<p>◆《お囃子》への興味を引き出す。</p> <p>◆疑似体験することで、《お囃子》を体感させる。 (言葉【尻取り唄】・音楽【お囃子】・動き【太鼓の動き】が三位一体であることを体感させる)</p>	1. 《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓》(宮入)を聴き、気付いたことを交流する。	<p>●出合いは、難波神社にある「蒲団太鼓」の写真を提示する。読本「わが町船場」に掲載されている部分を提示する。</p> <p>●《難波神社ふとん太鼓》は現代には子ども太鼓としてのみ残っていることを伝え、昔どのような音楽であったのかを、同じルーツで伝承されている《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓》を聴くことで、音楽と出合う。映像提示することで、どのような祭りであったのか、読本にある挿絵と合わせて想起することができるようにする。</p>	
《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のつづきをつくらう				
	◆文化的背景をとらえさせる。		<p>●気付きに合わせて、文化的背景をつなげて捉えていくことができるようにする。</p> <p>●《難波神社ふとん太鼓》の歌詞を提示し、尻取り唄であることに気付くことができるようにする。</p> <p>●気付きに合わせて、疑似体験空間を創造することで、ふとん太鼓の動きと音楽、尻取り唄のつながりを感じることができるようにする。</p> <p>●動きに合わせて、尻取り唄(言葉)をうたったり、口唱歌をうたいながら太鼓を打つ真似(音)をしたりすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。</p> <p>●地域によって尻取り唄の歌詞が異なることを伝え、船場の特徴・よさが伝わる歌詞の続きを考える。</p> <p>●うたいながら歌詞を考えることで、声の抑揚を意識するきっかけをもつことができるようにする。</p>	
2	<p>◆《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のつながりを意識して続きをつくらせる。</p> <p>◆分析の場面の必要感をもたせる。</p>			主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】

3	分析	2種類の《ふとん太鼓尻取り唄》(【声の抑揚があるもの】、【声の抑揚がないもの】)を聴き比べ、太鼓のリズムと太鼓の動きに合わせた尻取り唄の声の抑揚による特質を捉える。		
	◆声の抑揚を知覚させる。 ◆声の抑揚による特質を捉えさせる。	2. 2種類の《ふとん太鼓尻取り唄》(【声の抑揚があるもの】、【声の抑揚がないもの】)を聴き比べ、声の抑揚に気付く。 3. 声の抑揚による特質を捉える。	●2種類の《ふとん太鼓尻取り唄》(【声の抑揚があるもの】、【声の抑揚がないもの】)を比較提示することで、声の抑揚による特質を捉えることができるようにする。 ●音源に合わせて動いたり、うたったりと、身体を通して聴き比べる場を設定することで、声の抑揚を知覚し、その特質を捉えることができるようにする。 ●気付きに合わせて、《百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓(宮入)》の映像を提示することで、動きと音と言葉のつながりを捉えることができるようにする。太鼓のリズムと囃子唄の重なりのみならず、日本伝統音楽ならではの、“場”や“状況”とのつながりを感じ、祭りににおける尻取り唄の位置付け(祭りの意味)を捉えることができるようにする。 ●尻取り唄の声の抑揚による特質をとらえ、文化的背景とつなげることで、再経験へつなげることができるようにする。	知識・技能① 【ワークシート】 思考判断表現① 【ワークシート】
	◆尻取り唄の声の抑揚による特質をとらえ、文化的背景とつなげることで、再経験の場面の必要感をもたせる。	 <div data-bbox="614 488 847 806"> <p>① よくようがある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うたに合わせて、ふとん太鼓がゆれる感じ ・動きやすい ・持ち上がる <p>② よくようがない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まっすぐスーッと行く感じ ・つまらなさそう ・つかれている感じ ・あがり上がらない </div>		
	再経験	声の抑揚を意識して、オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》の謡い方を工夫する。		
	◆声の抑揚を意識して、オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のうたい方の工夫を考えさせる。	4. 声の抑揚を意識して、オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のうたい方を考える。	●声の抑揚を意識して、オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のうたい方を考える。 ●オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》に合わせてふとん太鼓の動きを模倣することで、「言葉と動き、音のつながり」や「祭りににおける意味」を感じることができるようにする。	思考判断表現② 【表現の工夫】
	評価	オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》を交流する。 読本「わが町船場」に追記する《難波神社ふとん太鼓》についての紹介文をまとめる。		
	◆オリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》を交流する。 ◆それぞれの感じた《お囃子》のよさを共有させる。	5. お互いのオリジナル《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》を交流する。 6. 尻取り唄づくりを踏まえ、読本「わが町船場」に追記する《難波神社ふとん太鼓》についての紹介文をまとめる	●互いの表現を交流することから、声の抑揚による音楽のよさを捉えることができるようにする。 ●1年生の時から学習で用いている読本「わが町船場」の難波神社の祭りについての部分に追記する紹介文をまとめる場面を設定することで、活動を通して感じた《難波神社ふとん太鼓尻取り唄》のよさを感じることができるようにする。	知識・技能② 【演奏】 主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】

実践のポイント

生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

本単元では、3年生における祭りの学習経験、生活における難波神社夏祭りに訪れたという生活経験を想起することから、太鼓のリズムとうたの重なりを感じながら、言葉の抑揚を意識して《しりとりのうた》をつくる活動を設定した。現代に生きる自分たちが、現在消滅してしまった音楽をどのように感じ、どのように伝承していくことができるのかを考えることができるように、自分たちの町の素敵などところをつたえる《しりとりのうた》を考える活動とした。

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

これまでに3年「太鼓のリズムとうたの重なりを意識して《難波神社ふとん太鼓》を味わおう」の学習において、難波神社ふとん太鼓とは出合っている。現代に残っていないため、実際の祭りの様子を見ることはできないが、子どもたちの中には、現在も残っている同じ音楽であったと言われている堺市百舌鳥八幡宮月見祭布団太鼓について、これまでに自ら調べている児童もいた。また、これまでに、わらべうたや民謡などにおいて、言葉の抑揚を意識した歌唱や音楽づくりに取り組んできている。このような子どもたちの学びの積み重ねを踏まえ、本単元では、今の船場の素敵などところを伝えるとしたらどんな《しりとりのうた》ができるだろう、と問いかけることで、うたづくりに主体的に取り組むことができるようにした。太鼓のリズムやふとん太鼓の動き（房の動き）を意識してうたづくりをすすめることで、文化的背景を一体として感じることができたと考える。

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

本実践は、国語科「和の文化を受け継ぐ」・道徳「和太鼓調べ」と関連付けた。本教材は、現代に現存していないが、“受け継ぐ”とは、どういうことなのかを、改めて考えることができる単元となると考えた。実際に、現代に形あるものとして残っているもののみが受け継がれているものではなく、受け継がれてきた想いやどのような背景・歴史をたどってきたのかを、さまざまな和の文化において感じることができるようにした。

ワークシート

2. 船場のすてきなところが伝わる《尻取り唄》の続きをつくらう。

せ は さかいすじ んばに しまり	船場に橋お堀筋
さかいすじ くりの ど には まち は	堀筋は薬の町の道修町
どしうまち の かくには じん	道修町の近所神社船
じで くり の かん さる	神社は薬の神 やりる

2. 船場のすてきなところが伝わる《尻取り唄》の続きをつくらう。

どしう まに くりが ま は す	道修町には薬屋が
くり は じう ま せん け の こ	薬屋はんじう今移る
こ じん は な の った ん すく みこ	移った神社は 少彦名
すく みこ くりが に は りの	少彦名には薬の神

2. 船場のすてきなところが伝わる《尻取り唄》の続きをつくらう。

くりの まち どしうまち	薬の町 道修町
どしうまち には すくみこ	道修町には少彦名
すくみこはんじう かみさき	少彦名神社は神様か
ころなさん おまじりだ	コロナ退散 お参りだ

2. 船場のすてきなところが伝わる《尻取り唄》の続きをつくらう。

どしう まち くりの まち	道修町は薬の町
まちには くりが たくさんだ	町には薬がたくさんだ
たくさん くりが あつまれは	たくさん薬が集まれは
あつまれみんな やってこい	集まれみんなやてこい

第6学年

実践報告

(1) 音楽づくり


「リズムを意識して《船場通り名おぼえうた》の続きをつくろう」

(2) 器楽

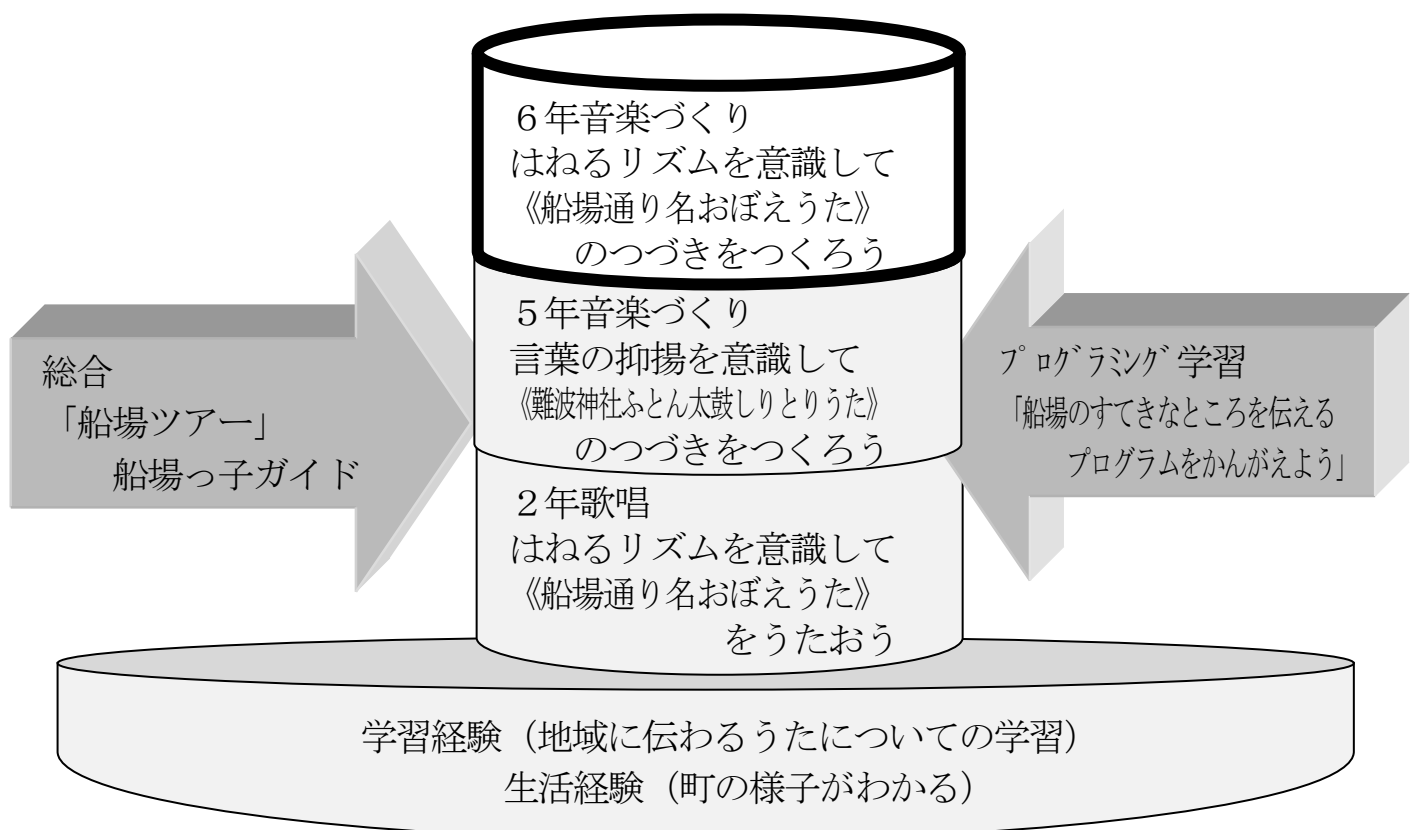
「間を意識して《御霊神社枕太鼓の音楽》を演奏しよう」

6. (1) 第6学年 音楽づくり「はねるリズムを意識して《船場通り名おぼえうた》の続きをつくろう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	<p>○風土・生活・文化・歴史</p> <p>—生活と音楽のかかわり</p> <p>—わらべうた、生活の音楽(おぼえうた)</p> <p>・船場の町は、今も東西と南北の通りが基盤の目のように区割りされている。このわらべうたは、このような船場の通りの名を北から順にうたっている。</p> <p>・船場の商家には各地から丁稚や女中が集まったことから、通り名を覚えないと仕事にならないので、覚え歌ができたのではといわれている。</p>	<p>○はねるリズム</p> <p>・  というリズムは、このわらべうたの躍動感を生み出し、親しみやすいうたとなっている。</p> <p>○音高(わらべうたの音律)</p> <p>・ レ、ファ、ソの3音で構成されている。</p> <p>○歌詞の抑揚と旋律のかかわり</p> <p>・ 「かじき」「びんあづち」など、言葉の抑揚が、旋律の動きに反映されている。</p>	<p>○音と動きとのかかわり</p> <p>—通りを歩く身体の動き</p> <p>—遊びによる身体の動き(まりつき)</p> <p>○音と言葉とのかかわり</p> <p>—言葉の抑揚</p>
活動を通して 指導できる内容	<p>・ また、子どもたちには、鞠つき歌としても伝承されてきたとも言われている。</p> <p>・ 七五調の言葉遊びうた。</p>	<p>●拍の流れ</p> <p>・ うたに合わせて、歩いたりまりつきをしたりする。(歌唱)</p> <p>・ 拍の流れに合わせて歩いたりまりつきをしたりして「自分のまちなうた」をつくる。(音楽づくり)</p> <p>●リズム</p> <p>・ リズムを感じながらうたう。(歌唱、音楽づくり)</p>	

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：はねるリズム
- 単元目標：○リズムを意識して、《船場通り名おぼえうた》をうたったり、うたづくりをしたりする。
- ・はねるリズムとはねないリズムの違いを知覚することができる。(知識・技能)
 - ・はねるリズムによる特質を感受し、文化的背景と関連付け、うたづくりをしている。(思考・判断・表現)
 - ・リズムに関心をもって、主体的にうたったり、うたづくりをしたりしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①リズムの違いを理解している。 ②はねるリズムを意識して、うたっている。	①はねるリズムとはねないリズムを感受している。 ②はねるリズムを意識して、表現の工夫を考えている。	①はねるリズムを意識して、身体表現(歩く)をしている。 ②はねるリズムを意識して、うたづくりをしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい		子どもの活動	指導者の活動	評価
	経験	《船場通り名覚え歌》をうたいながら、歩く。			
1	◆《船場通り名おぼえうた》への興味を引き出す。	1. 《船場通り名おぼえうた》をうたいながら、歩く。	●うたいながら歩くことで、身体でリズムを感じることができるようにする。	主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】	
	《船場通り名おぼえうた》をうたおう				
	◆文化的背景をとらえさせる。 ◆歩くことで、リズムを体感させる。 （言葉・音楽・動きが三位一体であることを体感させる） ◆分析の場面の必要感をもたせる。		●うたいながら、歩くことで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●船場ツアー下見における町探検の活動と関連づけることで、文化的背景を捉えることができるようにする。 ●歩く中で気付いたつまづき（うまくうたにあわせて歩けない、歩くとうたがへんになる、など）を交流することから、リズムに着目するきっかけをもつことができるようにする。		
	分析	2種類の《船場通り名おぼえうた》（はねるリズムのもの、はねないもの）を聴き比べ、リズムの特質を捉える。			
	◆リズムの違いを知覚させる。 ◆リズムの違いによる特質を捉えさせる。 ◆リズムと文化的背景のつながりを捉え、再経験の場面への必要感をもたせる。	2.リズムの異なる《船場通り名おぼえうた》を聴き比べ、リズムの違いに気付く。 3.《船場通り名覚え歌》のリズムの違いによる特質を捉える。	●身体を通して2種類の《船場通り名おぼえうた》を聴き比べる場を設定することで、より知覚・感受を深めることができるようにする。 ●2つの《船場通り名おぼえうた》を比較提示することで、リズムの特質をより捉えることができるようにする。 ●「歩く役」「うたう役」に分かれて、身体を通して聴き比べる場を設定することで、よりリズムの違いを捉えることができるようにする。 ●リズムの特質を捉え、文化的背景とつなげることで、再経験へつなげることができるようにする。	知識・技能① 【ワークシート】 思考判断表現① 【ワークシート】	

2	再経験	はねるリズムを意識して、《船場通り名おぼえうた》をうたいながら歩く。 うたの続きがあることを伝え、うたづくりを行う。		
	◆はねるリズムを意識して、うたづくりをさせる。	4.リズムを意識して、自分たちオリジナルのうたを考える。	●はねるリズムを意識して、うたの続きを考える場を設定する。自分の住む町のすてきなところを伝えるうたづくりを行うことで、より伝えたいことを明確にイメージし歌詞づくりにつなげていくことができるようにする。 ●創作したうたに合わせて、歩きながらうたうことで、身体でリズムの特質を感じることができるようにする。 ●歩きながらうたうことで、言葉・音楽・動きが三位一体であったことを踏まえ、文化的背景を踏まえた表現とすることができるようになる。	思考判断表現② 【活動の様子】
	評価	お互いのうたを交流し、《船場通り名おぼえうた》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《船場通り名おぼえうた》のよさをまとめる。	5.互いのうたを交流する。	●互いのうたを身体を通して共有することから、はねるリズムの特質を捉えることができるようにする。 ●「6年〇組オリジナル船場通り名おぼえうた」として、全員のうたをリレーにして表現することで、よりはねるリズムでうたうことのよさを感じることができるようになる。	知識・技能② 【演習】 主体的に学習に取り組む態度② 【活動の様子】

実践のポイント

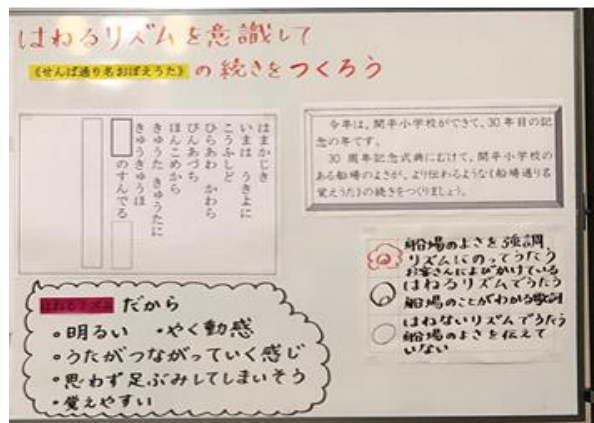
生活との結びつきを感じることのできるカリキュラムデザイン

本校の児童の通う校区は、とても広い。通り（東西の道）と筋（南北の道）が碁盤の目のようになっており、子どもたちも、自分たちの住んでいるところを「〇〇町」と意識し、生活している。子どもたちは、全員が、堺筋を順に北上・南下し、校区北東角に位置する学校に登校している。そこで、導入の場面において、教室を校区にみたくて、通りと筋を床面に描き、町探検でみつけたさまざまな建物やお店などの位置を確認し、その床面の筋に沿って《船場通り名おぼえうた》をうたいながら歩くことで、日々の生活とのつながりを感じ、活動を進めていくことができるようにした。



音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

本実践において、2年「はねるリズムを意識して《船場通り名おぼえうた》をうたおう」における“自分の住む町のすてきなところを伝えるうたづくり”を想起し、6年では、これまでの学習を踏まえて、船場のよさを伝えるうたをつくることとした。自分たちの表現をループリックに照らし合わせながら、随時、工夫を重ねていくことで、より船場のよさの伝わるうたづくりにつなげていくことができた。



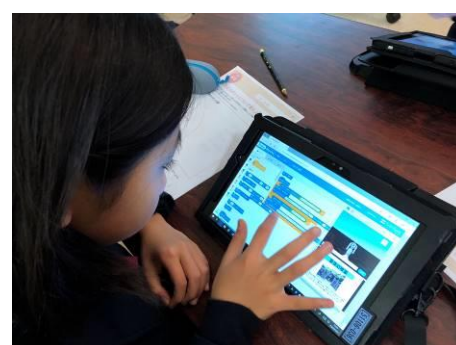
音楽の特質を捉えループリックを子どもたち自ら作成・活用する

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

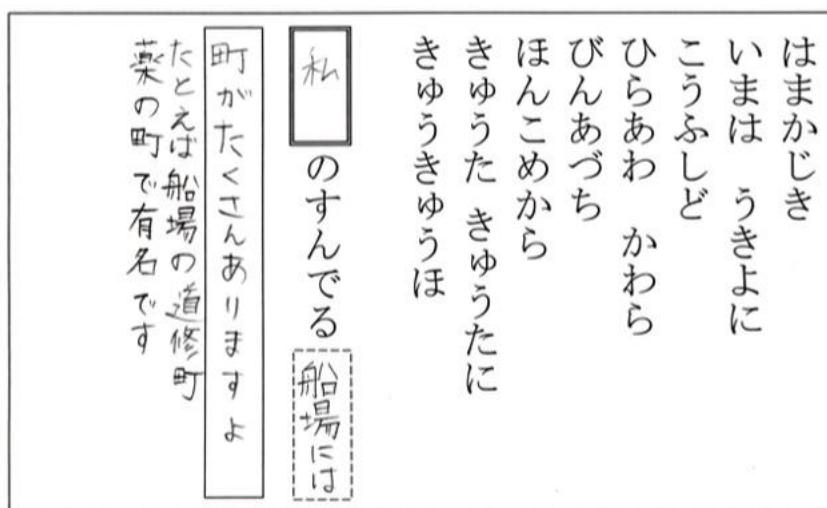
本実践を行う上で、総合「船場ツアー“船場っ子ガイド”」との連携を図った。これまでの6年間の生活科・総合的な学習の時間を中心とした学びの中で、感じてきた船場のよさを伝える活動と連動させることで、より地域への愛着を感じることができるようになりたいと考えた。また、児童には、ポスターによるプレゼンが得意な児童、うたにのせて伝えることが得意な児童、写真や解説をプログラムすることでわかりやすい説明をすることが得意な児童など、それぞれ個性がある。さまざまな視点から、「船場のよさ」を伝えるという活動に取り組むことで、活動をより深めていくことができるようにしたいと考えた。



船場の町をガイドする「船場ツアー」



船場ガイドをプログラミング



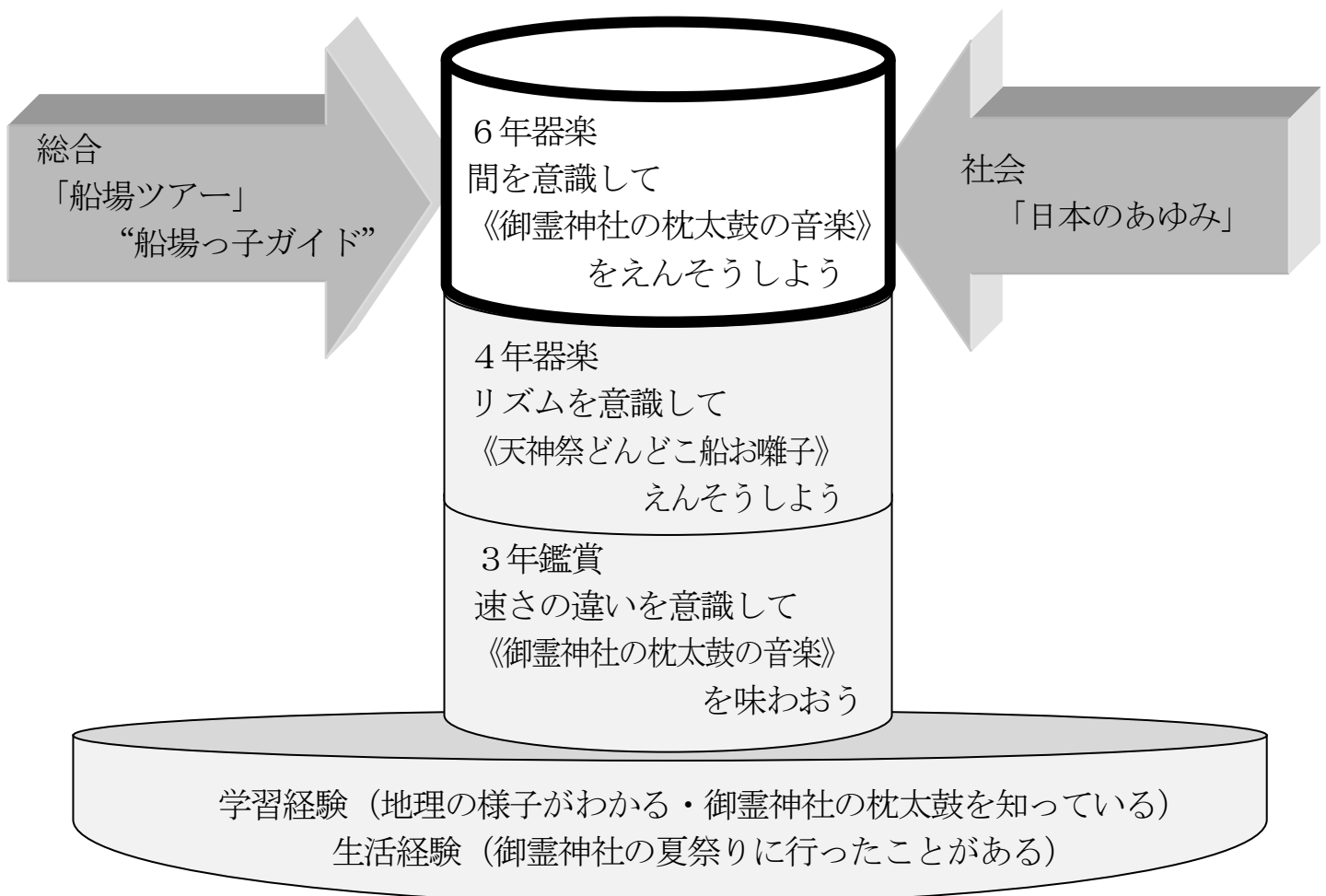
船場の町のすてきなところを伝えるうたづくり

6. (2) 第6学年 器楽「間を意識して《御霊神社枕太鼓の音楽》をえんそうしよう」

教材としての楽曲分析

3つの柱	柱1【人と地域と音楽】	柱2【音楽の仕組みと技能】	柱3【音楽と他媒体】
楽曲の特徴と 想定されるもの	<p>○風土・生活・文化・歴史</p> <p>ー地域の行事と音楽とのかかわり</p> <p>ー地元のお囃子（枕太鼓）</p> <p>・願人（がんじ）が乗る「枕太鼓」。枕太鼓とは、祭りのはじまりを告げ、神輿を先導する露払い、邪気を払う役割を担う。祭りの枕太鼓は神社のものであるため、地車は町ごとの名誉もあり意匠、飾りが豪華になるのに対して、枕太鼓では太鼓と赤い枕だけで、殆ど飾りもなく、いたってシンプル。しかしながら願人の太鼓の打ち方は凝っている。願人の所作は上方文化の真髄といえる「粋」そのものである。</p> <p>・枕には、「五穀成就（穀物が豊かに実ること）」と「天下太平（世の中が平和でよく治ること）」が刺繍されている。</p> <p>・動きの由来は現在の宮司さんもわからないようであるが、宮入、宮出の前のにぎやかさ、祭りの盛り上げとして昔から引き継がれているようである。</p>	<p>○速さの違い</p> <p>・枕太鼓の打たれる場面（待機場面、宮入場面）によって、速さの違いが生じる。</p> <p>○拍</p> <p>・掛け声に合わせてうたれる音楽は、動きに合わせて拍の流れが変化する。</p> <p>○間</p> <p>・枕太鼓の動き、打ち手の動きにより間が生じる。</p> <p>●拍の流れ</p> <p>●リズム</p>	<p>○音・言葉・動き</p> <p>ー音・言葉・動きのかかわり</p> <p>ー太鼓と動き（動きを伴う太鼓）</p>
活動を通して 指導できる内容			

カリキュラムの関連



実践の概要

- 指導内容：間
- 単元目標：○間をとらえ、演奏されている空間・状況とのかかわりを意識し、よさを味わう。
- ・間を知覚することができる。(知識・技能)
 - ・間による特質を感受し、文化的背景と関連付け、間の有無によるそれぞれのお囃子のよさを考える。(思考・判断・表現)
 - ・間に関心をもって、楽曲における間の特徴を捉えようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)
- 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①間と伝承されてきた文化的背景とのつながりを理解し、間による特徴を捉えている。 ②間を意識して演奏している。	①間と演奏されている空間・状況との関わりを捉え、それぞれのお囃子のよさを考える。 ②間の有無によるお囃子のよさを文化的背景と関連付け演奏の工夫をしている。	①間を意識して、リズムを打つなど、主体的に取り組もうとしている。

□ 活動の流れ

時	活動のねらい 経験	子どもの活動	指導者の活動	評価
1	◆《お囃子》への興味を引き出す。 ◆疑似体験することで、《お囃子》を体感させる。 (言葉【掛け声】・音楽【お囃子】・動き【太鼓の動き】が三位一体であることを体感させる)	1. 《御霊神社枕太鼓の音楽》(宮入)を聴き、気づいたことを交流する。	●出合いは、音のみを提示する。 ●気づきに合わせて、文化的背景をつなげて捉えていくことができるようにする。 ●気づきに合わせて、疑似体験空間を創造することで、自らの生活経験とつなげていくことができるようにする。(鳥居・参道・境内)	
	《御霊神社の枕太鼓》をきこう			
	◆文化的背景を捉えさせる。 ◆分析の場面の必要感をもたせる。		●疑似体験空間の中で、子どもたち自らが観客役になり映像を視聴することで、よりイメージ豊かに音楽とかわることができるようになる。 ●映像に合わせて、掛け声(言葉)を言ったり、打ち手の動き(動き)、打つ真似(音)をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにする。 ●宮入とは異なる場面の《枕太鼓の音楽》(待機時)の音楽を提示することで、生まれた気づき(リズムが違う、なんかゆっくりしている、など)を交流することから、間に着目するきっかけをもつことができるようにする。	
	分析	2種類の《枕太鼓の音楽》(【待機時】、【宮入時】)を聴き比べ、間による特質を捉える。		
	◆間を知覚させる。 ◆間の有無による特質を捉えさせる。 ◆動き・音・言葉のつながりを捉え、再経験の場面の必要感をもたせる。	3.間が異なる《お囃子》を聴き比べ、間に気付く。 4.《お囃子》の間による特質を捉える。	●2つの《枕太鼓の音楽》を比較提示することで、間による特質を捉えることができるようにする。 ●音源に合わせて打つ真似をする身体を通して聴き比べる場を設定することで、より間の特質を捉えることができるようにする。 ●気づきに合わせて、映像を提示することで、動きと音と言葉のつながりを捉えることができるようにする。日本伝統音楽ならではの、「間」が「場」や「状況」に応じて変化するということを感じることで、祭りにおける枕太鼓の位置付け(祭りの意味)を捉えることができるようにする。	知識・技能① [ワークシート] 思考・判断・表現① [ワークシート]

2	再経験	間を意識して、《枕太鼓の音楽》を演奏する。		
	◆間を意識して《お囃子》を捉えさせる。	5. 間を意識して、2つの場面における《枕太鼓の音楽》を演奏する。 6. どのような場面で《枕太鼓の音楽》が演奏されているかを踏まえ、間を意識した表現の工夫を考える。	●間を意識して、改めて演奏することで、「言葉と動き、音のつながり」や「祭りの意味」を感じることができるようにする。 ●自分なら、どのような場所・場面でこの音楽を演奏したいかを考え、間を意識した表現の工夫を考える。	思考表現② 【表現の工夫】 主体的に学習に取り組む態度① 【活動の様子】
	評価	お互いの紹介文を交流し、御霊神社の《枕太鼓の音楽》のよさをまとめる。		
	◆それぞれの感じた《お囃子》のよさを共有させる。	7. お互いの演奏を交流し、《枕太鼓の音楽》のよさをまとめる。	●互いの演奏を交流することから、間による音楽のよさをとらえることができるようにする。	知識・技能① 【演習】

実践のポイント

生活との結びつきを感じることのできるカリキュラムデザイン

御霊神社夏祭りには、多くの児童が参加している。しかし、本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、夏祭りは中止となった。そこで、そのお祭りで行われている枕太鼓の曳行において囃される《枕太鼓の音楽》と出合う場を設定することで、本年度も、夏祭りを感じることができるようになりたいと考えた。

御霊神社の「鳥居・参道・境内」を疑似体験の空間として創造することで、自らの生活経験とつなげ、演奏表現を工夫していくことができるようにした。映像に合わせて、掛け声（言葉）を言ったり、打ち手の動き（動き）、打つ真似（音）をすることで、言葉・音楽・身体の動きを一体として捉えることができるようにすることで、自分たちの演奏表現においても、常に、言葉・音楽・身体の動きがつながっていることを意識し演奏していくことができた。

祭りにおける曳行の様子を流れで捉えることで、どのように枕太鼓が一日の中で演奏されるのか、祭りの間どのように演奏されるのか、祭り当日までどのような準備がなされるのかなども捉え、演奏表現の工夫につなげていく姿がみられた。

音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

2つの場面における《枕太鼓の音楽》を聴き比べることから、《枕太鼓の音楽》の特質である「間」を捉えることができるようにした。「間」は、日本伝統音楽において欠かすことのできない特徴である。前単元「リズムを意識して《越天楽》を味わおう」においても、「間」が、日本の古くから伝わる音楽において、とても重要な役割を果たしていることに気付いていたことから、《枕太鼓の音楽》においても、演奏される状況などに関連付け、とても重要な要素であることに気付くことができた。日本伝統音楽ならではの、「間」が“場”や“状況”に応じて変化するというところをも感じることで、祭りにおける枕太鼓の位置付け（祭りの意味）を捉え、現代まで伝承されてきているよさを感じることができるようにした。

6年総合「船場ツアー」の学習と関連付け、読本「わが町 船場」を用いて、学習を進めていった。読本においては、

他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

音楽についての記述はあるが、読むだけではどのような音楽が体感することはできない。そこで、どのようにすれば、伝承していくことができるかを「船場ツアー」と絡めながら考えていくことができるようにした。

本研究では、郷土の伝統音楽を地域文化の視点で捉え、他教科・領域との横断的なカリキュラムデザインの在り方を模索する。児童が、自分たちの生活経験を踏まえ、現代の生活とのつながりを見だし、新たな価値観を形成していくことができるカリキュラムデザインを探究することを目的とした。

実践を進めていく上で、以下の3点をカリキュラムデザインの柱とした。

【柱1】生活との結びつきを感じることでできるカリキュラムデザイン

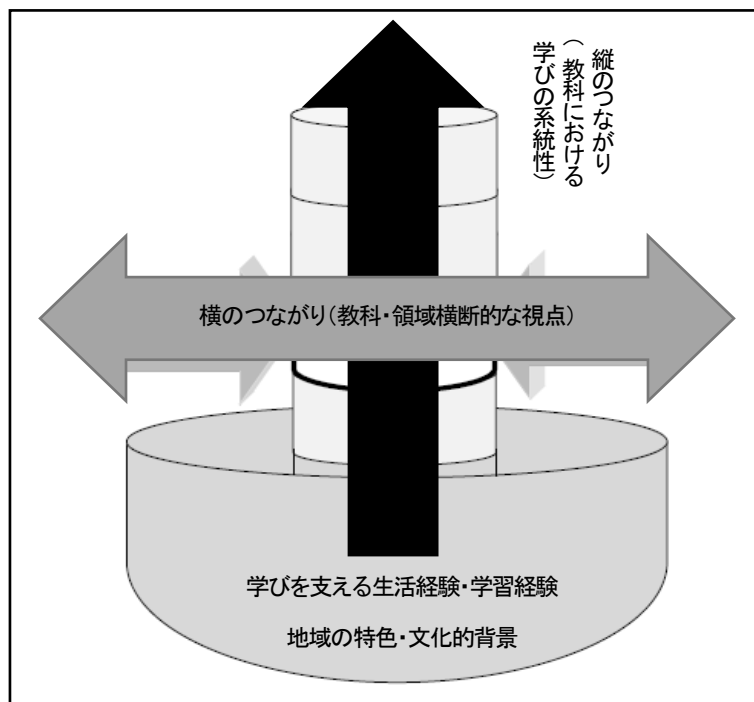
【柱2】音楽科における学びの系統性【縦のつながり】

【柱3】他教科・領域との横のつながりを踏まえたカリキュラム配列【横のつながり】

この3本の柱を意識したカリキュラムデザインを進めていく上で、授業者が意識をもって、授業を展開していくことができるよう開発した「開平小学校音楽科における単元デザイン」は、とても有用であった。

実践を推し進めていく中で、「郷土の伝統音楽」の「①文化的背景（教材としての楽曲分析）」を授業づくりの根幹とすることで、常に、「子どもたちの生活との結びつき（学びを支える生活経験・学習経験、地域の特徴）」「音楽科における系統性（縦のつながり）」「他教科・領域との関連（横のつながり）」を意識することが大切であることが、改めて明らかになった。授業者が、児童の姿や発言をどのように捉え、授業を展開していくか考える上で、「開平小学校音楽科における単元デザイン」は、それぞれの関連を一見することができることから、とても有用であったと考える。

図4 開平小学校音楽科単元デザイン



開平小学校では、これまでも「船場に生きる」ということを視点に、生活科・総合的な学習の時間を中心に授業づくりに取り組んできた。そこで、本研究実施前に、全教科・領域のつながりが一目でわかるように本校カリキュラムを再編し、各教科・領域で取り組まれている地域文化を教材とした単元の抽出、関連の再検討を行った。そのことにより、研究メンバーが、個々に実践を行うのではなく、開平小学校音楽科カリキュラムの、どこに位置づいた学びであるのかを、常に意識して取り組んでいくことができた。

計画に基づき実践を進めていく中で、互いの実践を参観し合うのみならず、ビデオ記録をとることで、授業者も共に授業を客観性をもってふりかえる場をもつことができた。各学期末には、それぞれの取り組みについて討議することで、より実践を深めていくことができたと考える。

年度当初作成した、郷土の伝統音楽を軸とした教科横断的な「令和2年度開平小学校計画カリキュラム」に基づき計画的に実践を進めていくことから、適宜、単元配列・関連を見直し、新たに教材化が必要となった単元を新設していくこともできた。このような一年間の取り組みを「令和2年度実施カリキュラム」としてまとめ直し、再検討することから、「令和3年度開平小学校音楽科計画カリキュラム」を作成することができた。

このように地域文化としての郷土の伝統音楽を軸とした教科横断的なカリキュラムデザインは、音楽を軸として、さまざまな教科・領域における地域学習が関連付き、より学びを深める手立てとなることが明らかになった。